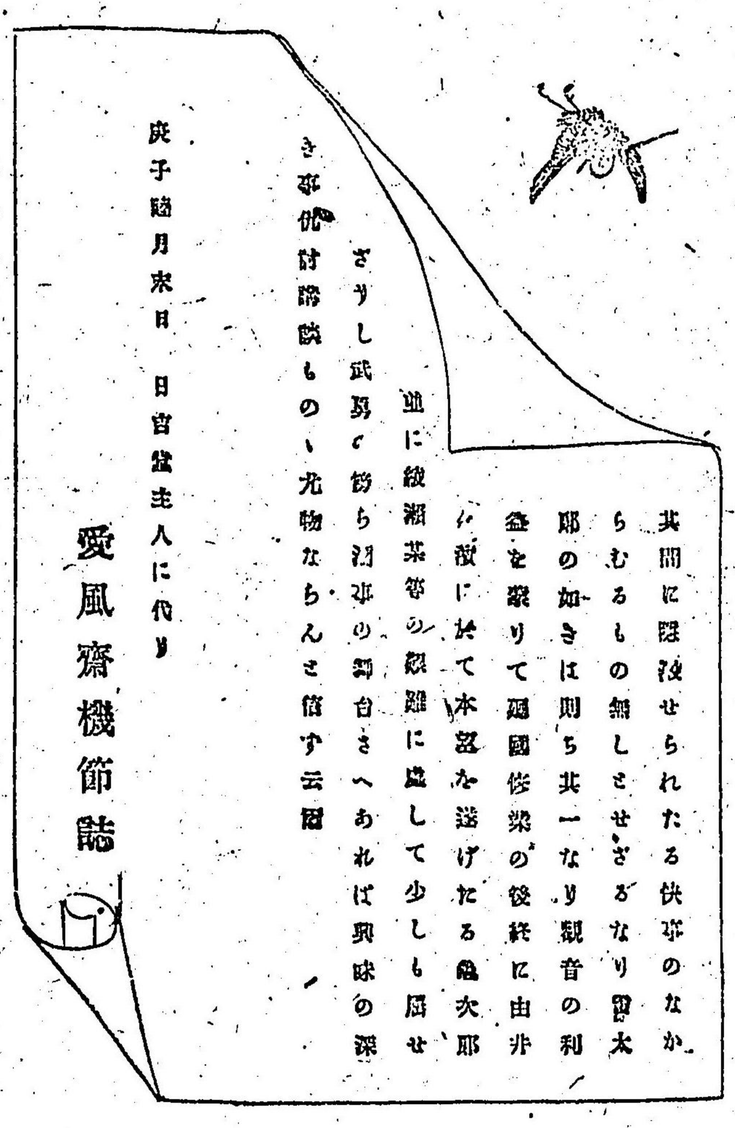
後雙
勇夫郎
東京
日吉堂

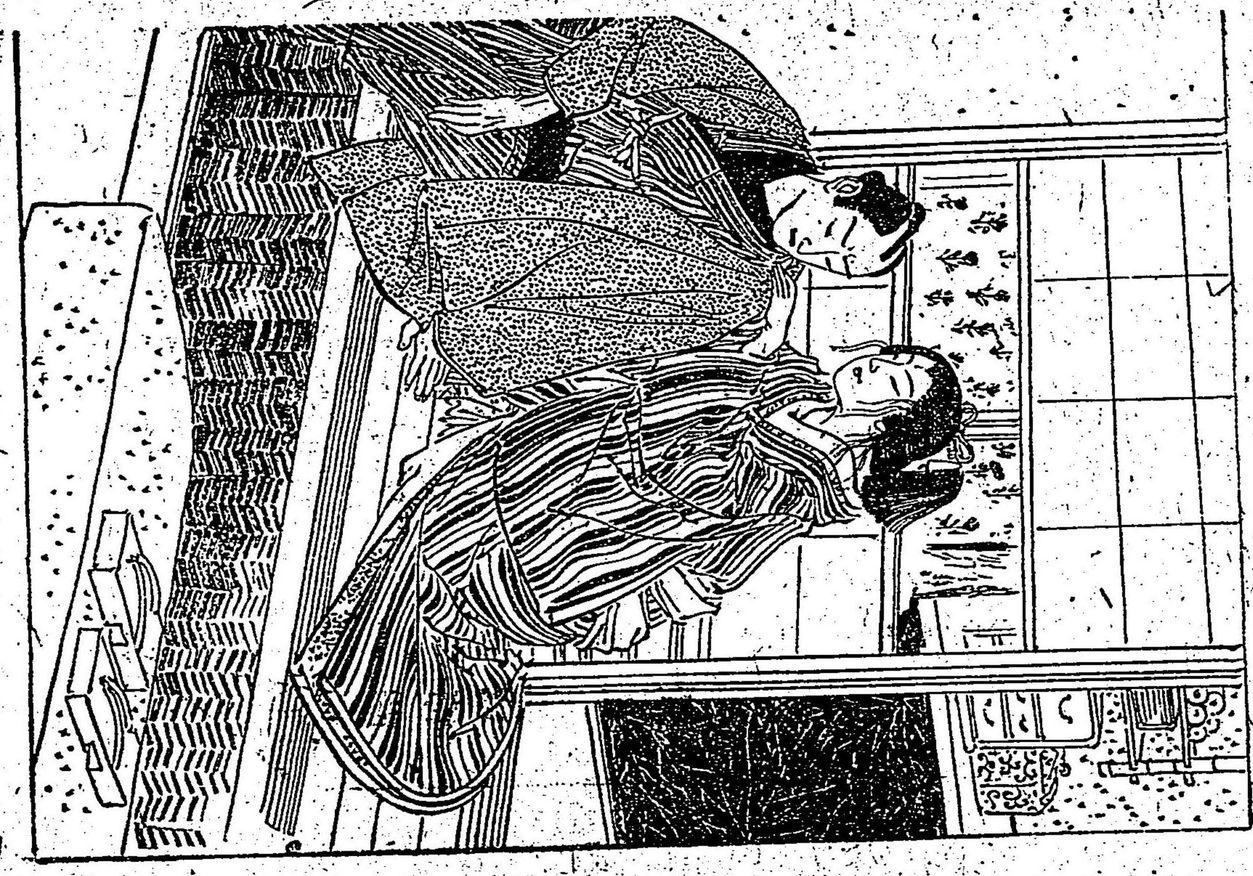
其間に陥没せられたる快事のなからむるもの無しとせざるなり曾太郎の如きは則ち其一なり観音の利益を蒙りて廻國修業の後終に由井ヶ浜に於て本望を遂げたる龜次郎さすし武勇ぐ釣ら汐事の舞台さへあれば興味の深き事仏討路談もの、尤物ならんと信ず云爾

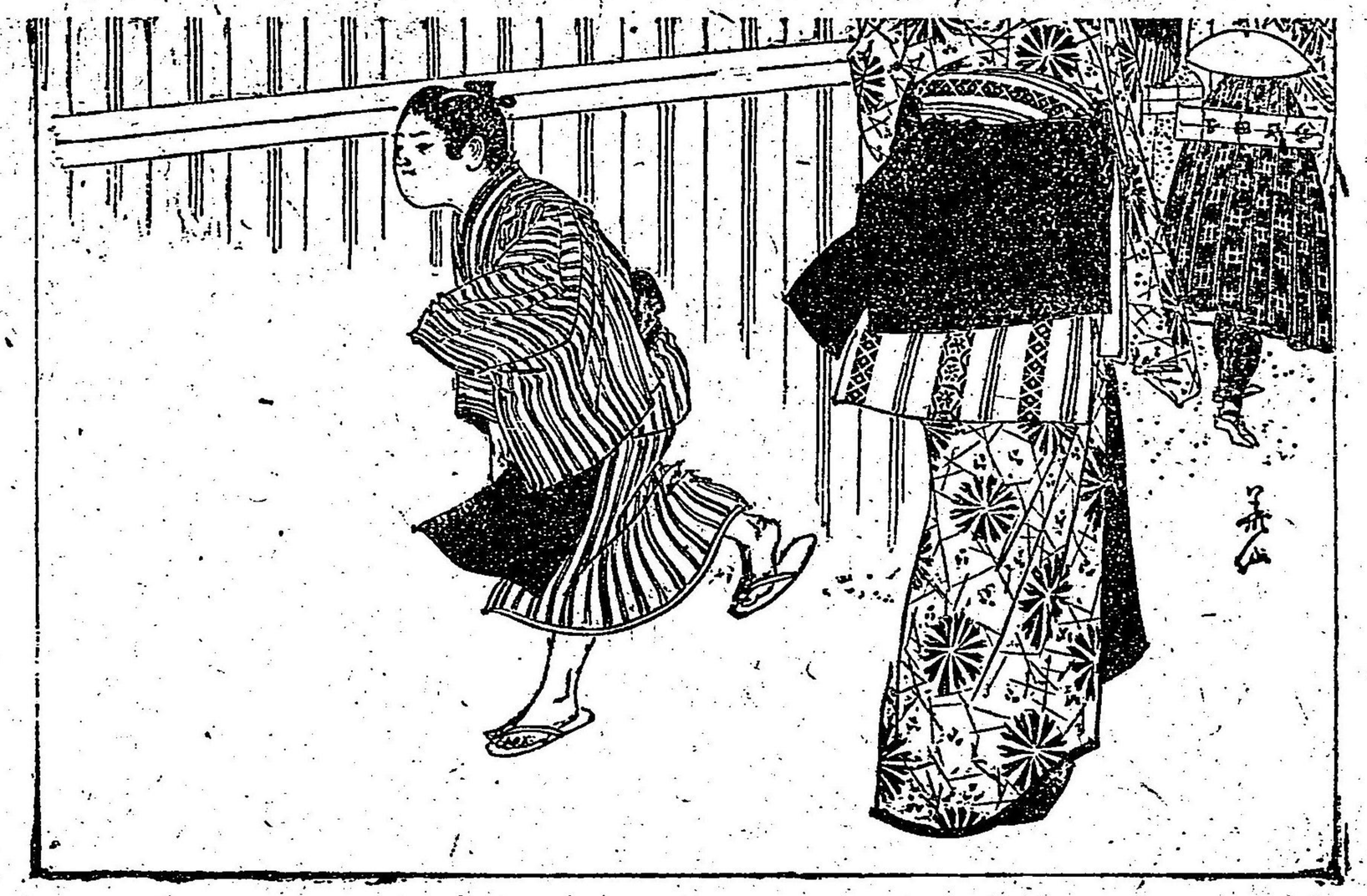


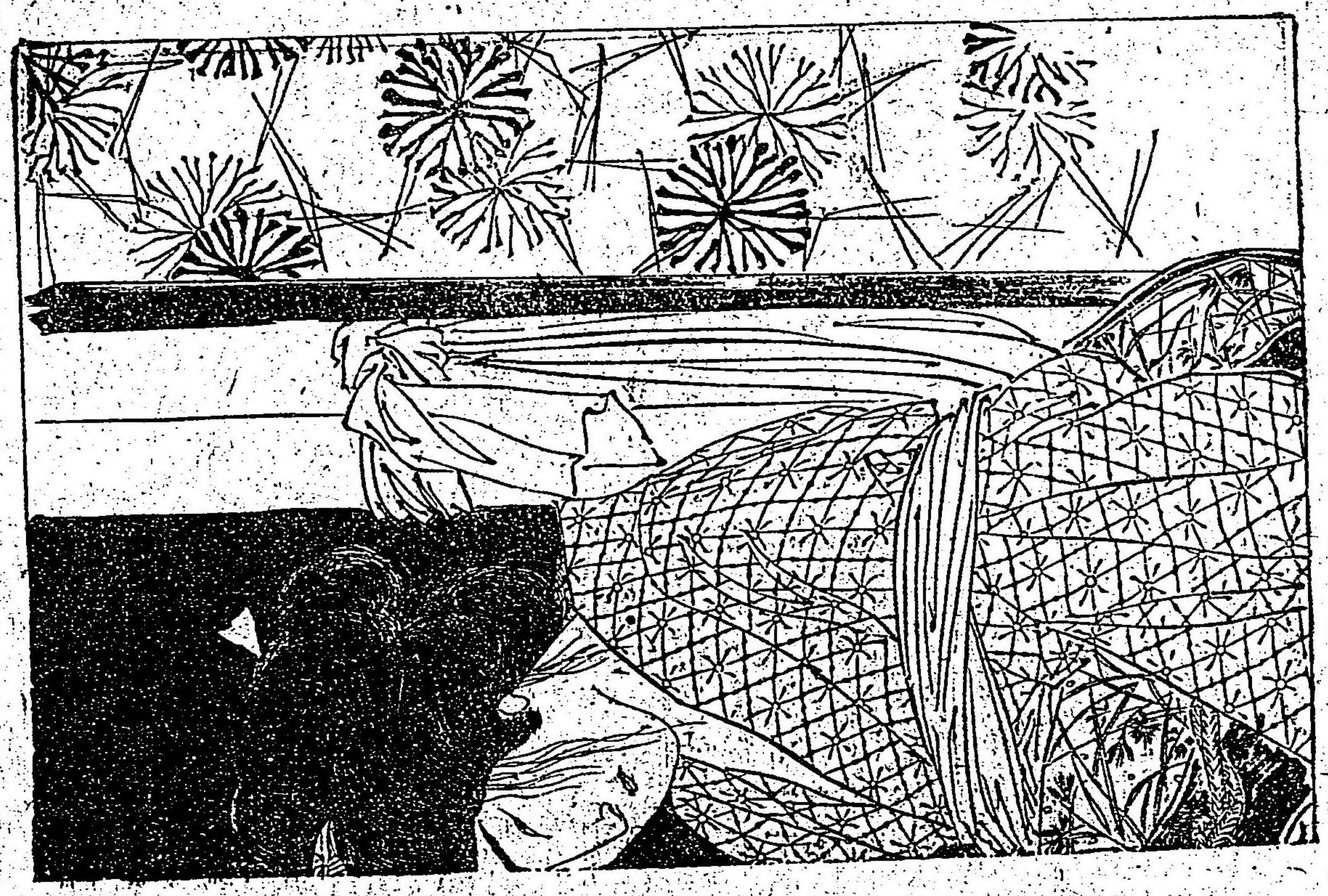
血に紘瀬茶等の緑雛に盛して少しも屈せ

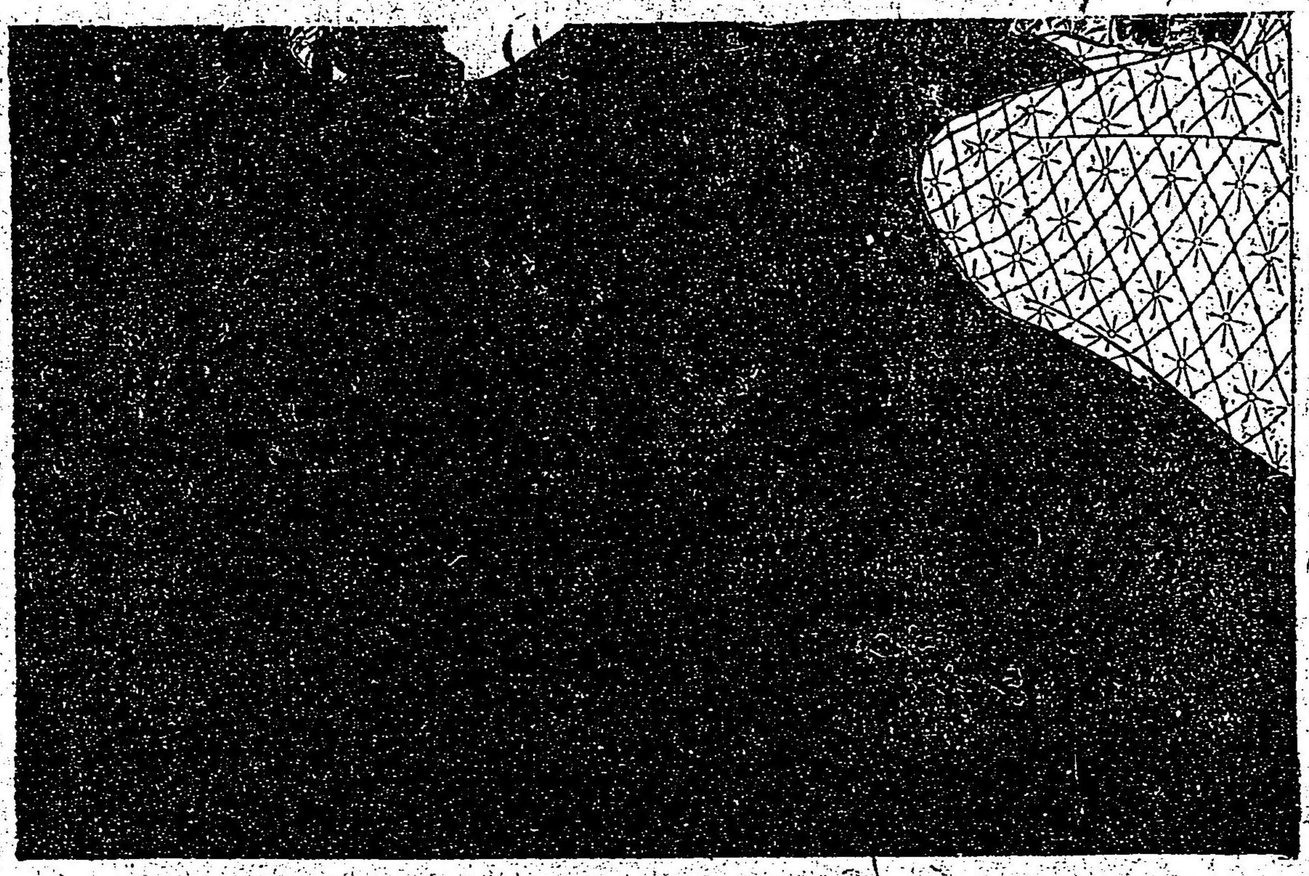
庚子臨月末日　日宮猛主人に代り

愛風齋機節誌

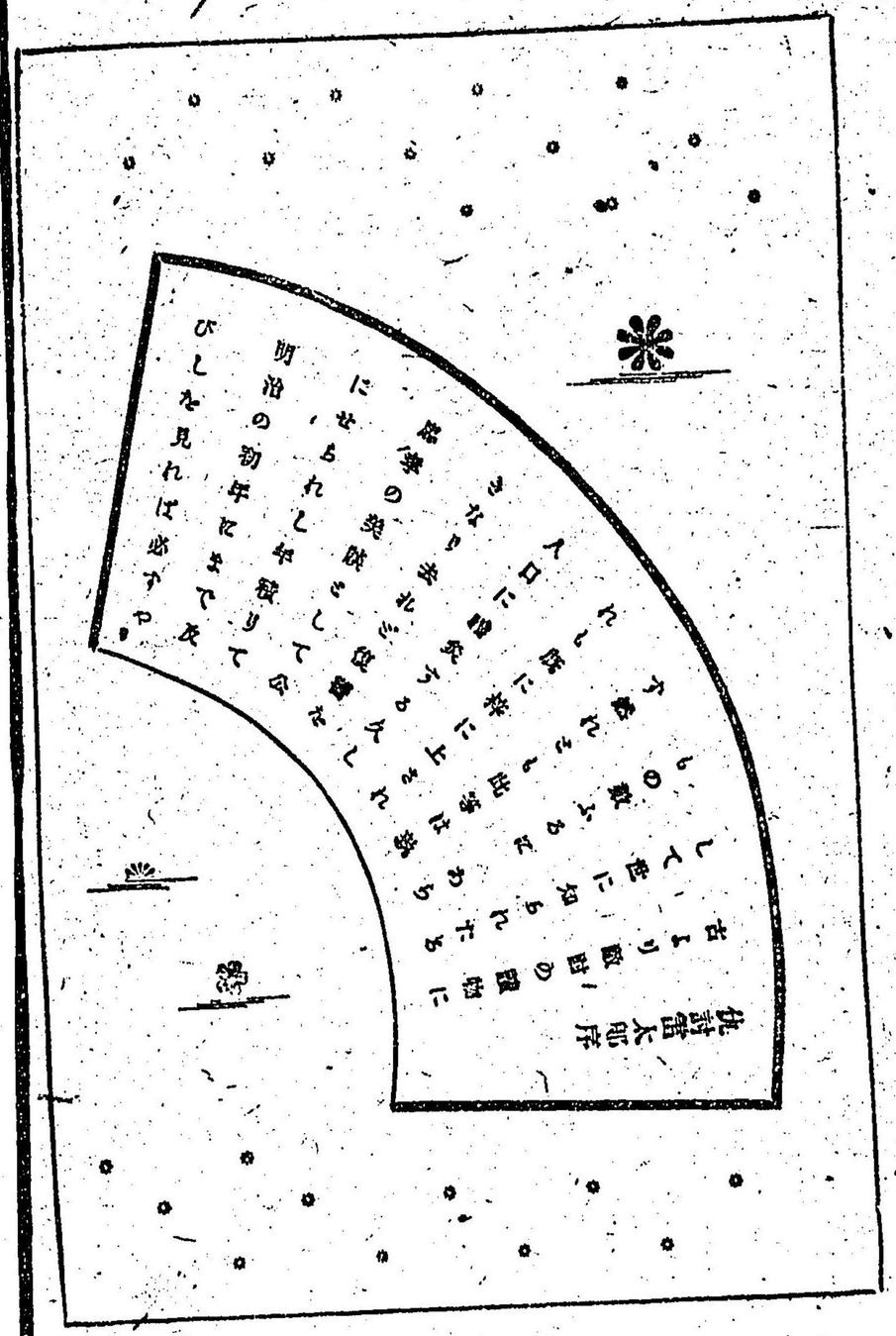








特8
271



復讐雷太郎

神田伯林講演
速記社員速記

第一席

敵討雷天郎

エヽ此度は日吉堂主人の御依頼に依り敵討美談として有名なる雷太郎の傳記を言上いたします……處は武藏國熊谷在に於て萬屋文右衛門と云ふ者があつて近在での豪家でございますが田舍の事だから酒も賣れば荒物も賣るし薪炭から質物までも取るといふんで萬屋へ往けば何品でも間に合うと云至極便利な家だ夫れ故商賣も繁昌するし從つて身代は益々館くなるばかり殊に

番頭の武兵衛といふのが誠に實直に能く働らくので客の氣受も能く主人にも大層氣に入られて居る……商賣といふものは六ケ敷ものでも良い番頭や良い小僧が當らなければ繁昌は仕ないもの番頭からして主人の品物を誤取て帳尻でも誤魔化し得意廻りをする積りか何かで遊びに出懸け歸つて來て口をぬぐつて居る、やうじやア幾ら身代の良い店でも終には左り前になる又小僧だなんぞと云つても中々目は離されないもの隨分素生の悪い奴があつて賣り溜を誤取だして渇屋の歸りに摘み喰をする抔と云ふなア幾らもあります　デあるから商賣を一口に云ふがナカ〳〵六ケ敷もので詰り良い人を使はなければ盛大に遣ると云ふ譯には往かない……萬屋文右衛門は昔し堅氣とは云ふものゝ根が至つて溫泊い人ですから人を遣ふのも亦ナカ〳〵旨いもんで　主人「ヲイ清造や此包みを立花屋さん迄屆けるんだが別に口上は入らない書付さい持つて往きやア用は足りるから、清「ヘイ……主人「左樣だ……じやア別に何とも云はないで宜しう厶いますか　主人「左樣だ……雨が降りゝだから傘を忘れるなよ」清造は傘を持つてスタ〳〵出懸けて往く案の控途中から雨に逢つてお負けに降りが強かつたもんだからヅブ濡になつて歸つて來た　主人「ヲヽ御苦勞だつた……降りが強かつたからうナ　清「ヘイ……と云つたが小僧の身になると主人の勞る此の一言で濡た事なぞは思はないでは直ぐに又他の仕事に懸りやす夫を突然歸つて來るが早いか主人「ヲイ大變遲いじやアねいか又グヅ〳〵　道卿を喰つて居たんだらう雨が降つて來たもんだから繪卿紙屋の前にでも立つて居てボンヤリして居たんだらう」抔とビショ濡になつた事抔はソッチ退けにして喰み付く樣に小言を云ふ夫れじやア思ひ遣りと云ふものが更にない　小僧「何だ詰らねい一生懸命で濡れくさつて歸

つて來りやア那な事を云やアがつて……と遂に主人を恨むやうになりますもの從がつて用を言ひ付けても蹉跎り渉々しく遣らないと云ふ樣な譯は此遣ひ方を云ふものが六ケ敷のだ……冗談は扨置き文右衛門はナニシロ良い番頭を抱へて商賣繁昌を致しますが子供も能い子が當つた姉をれ嫁と云つてモハヤ十七の春を迎へた實に顏かたちから背格合まで何處と云つて非を打つところが無い八相揃つたと云ふのは此女の事だから其上容色ばかりか心ばへも優しく女の業一通りは心得て居る夫れ故兩親も掌の内も珠かざしの花と可愛がり分けて母親の自慢娘で……ある弟の鶴次郎……之は漸やく未だ十五歳だが姉が容氣の良い位ゐですから決して惡からう筈はなく當世の美少年といつたら先づ一と云つて二と下らない位ゐ殊に性質至つて學問を好み又武藝にも身を入れて類りに劍術を習つて居るが斯いふ能い子供

を持つた者は兩親も仕合せだ　父「ワイ樅木や毎日〳〵遊んで斗り居やがつて萬屋の鶴さんを見ろ手前よりよ二ツも下じやアねいか夫でも本を讀んだり劍術を習つたりして惡戯なんか仕やしねいや夫を未だに餓鬼大將になつてやがつてチツト氣を付けろ抔と近所の者は就れも鶴次郎を手本にして俺れの子供に小言を云ふ先づ文右衛門も此分で往けば實に仕合せの物だケレども兎角好事は魔がさし易くして降つて湧いたる災難が萬屋の家に起るといふのは後に追々と言上いたします

茲に又熊谷から一里斗りの處に吾妻國次と云ふ浪人者が居たが侍士も殿より御扶持を頂戴して居れば氣樂なもんだが扨御扶持に放れて仕舞つちやア全然木から落ちた猿も全樣別に商賣の道も知らんゆへ國次も據ところなく其頃此土地で山來る鎧を作つて僅かに其日の畑りを立つて居たデ一人の倅に來太郎といふの

があつてもハヤ二十四にもなつたから言はゞ一パン親の役に立つ年配ですければ兎角男達の氣像があつて何も惡い奴の交際ばかり致して居ると云つてナカ〳〵馬鹿じやアない性質至つて發明で人柄も賤しからず克く萬能に達つして居る殊に武家の血筋を受けて居る事故劍術は尤とも妙を得て力も拔群だ夫れ故兎角く已れの氣量を鼻に掛けて兩親を疎末にすると云ふ親不孝な奴だゲンでも親の慾目で子の可愛いくないものはない　國「來太郎一寸愛へお出で　來「何か用かい　國「又あれだ用があればこそ呼のじや、イッも〳〵口答へばかりして來いといつたら愛へ來い」來太郎も親に逢つちやア正逆に喧嘩を賣る譯にも往ない故セプ〳〵節父の前へ座ると、國「外でもない今日は篤くにれ前の量見を聞いて俺も胸を決なくちやアならねい事がある全体れ前は親を何と思つて居るんだ……お前の召使ひか何ぞの樣に思つて……此

間だの如きは小言を云はれたと謂つてれ袋を手鞭にするなんテ以ての外の奴だ能く考がへて見る隣り近所でも手前の事は蛆虫の樣に厭がつて成丈け先方から外して居らア夫を宜い氣になつて自分一人豪い者か何ぞの樣に思つて大手を振つて歩行て居るたア呆れて物が言へない位ねだ夫にモー之れ二十四にもなつて親の手助けになる事は仕ないで僅かの代物でもありさへすれば手當り次第に持り出し酒を飲むか博奕を打つか知らないが未だに親の脛を噛つて居るたア余まり情けねい咄しぢやアねいかエーヲイ來太郎何だ之から心を入れ換へて眞人間になり親に苦勞を懸けまいと云ふ氣はねいのか素は由ある武士だが惡人の爲めに讒言に逢い今しやア斯して居るものゝイッカは歸參を願はうと思ふんだが手前が其樣野卑な久良者じやア迚も末の見込がねい俺はモー取る年だ左樣いつまでれ役が勤まるもんか切めて手前で

も確かりして居りやア家督を讓つて又御師參も出來やうが何を云ふにも其樣ふうじやア到底望みもない咄し……サア手前の返答一ツに因つて俺にも量見がある乎正根を据へて挨拶をいたせ」と嚴しき父の强意見母親も側からして　母「來太郎決してれ父親はれ前の不爲になる事を仰しやりやア仕ません能く量見を定めて御挨拶を申上なさい」來太郎は暫らく無言にて何とも返答いたさんが腹と思ふ處があると見ね　來「夫りやア亟心配を掛けたのアタ全たく惡いにやア逸いねいが俺しやア斯ういふ風に生れついたが災難だ武士だなんて一本半分差したつて何も樂しみな事アありやアしねいンナいけ確苦しい事をするよりやア飲みていい酒は飲み買いていい女郎を買つて面白れ可笑世の中を暮す方が遙か增だ長い浮世に短かい命イツ迄グヅ〳〵して居たつて定命儘か五十年……喧嘩にも成りやアしねいや成佛する時にやア腹と

するんだヤア折角の御意見でずが俺しやア此方が勝手でげす何卒此儘にして置て下さいましと思ひ切つて決然と謂はれて仕舞いましたので兩親も口あんぐり腹立紛れに　兩親「夫れじやア以來モー勘當だ汝奴の往きたい處へ往つて死ぬとも生るとも勝手にしろ　來「ヲツトツト皆まで言はずと解つて居ます出て往けと謂ふんなら何日まで愚圖々々して居るもんか二度と再度來やア仕ねいやとフイト家を飛出しました　國次「那んな野郎じやアねいと思つたら呆れて物が言へねいモー決して當になんか成らねいから呆れ極れ前も其積りで居なせいす女房「何も誠とに困り切つた奴ですねい何も來が案じられます」と國次夫婦は只管嘆息をして居る來太郎は親の云ふ事抔を用いればこそ勘當されたを幸はひと我家を立出で夫から夫れへと賭場を轉突て居ました處が或日萬屋へ行つて質に入れた袍を出し酒も買つて居るもんですから大き

い奴で二三杯あぶり付けて居たソコへチラリと見ねたのが惚傾娘のお鶴でございます來太郎は飲み乍らヂッと眼を付け　來「成る程良い女だナア俺ア未だ生れてつからアンナ辨天様のやうな女に出逢した事がねい……アヽ云ふ女を女房に持つたなら夫れこそ男子の本望だ」と瞬たきもせず見て居るお鶴はソンな謀反心を忘して居る者が其處に居たとは知りませんから何か用を足して其儘奥へ往つた　來「ヤイもう往つて仕舞やアがつた……チロッ忌々しい折角彼女の顔を見乍らモウ一杯きこし召そうと思つて居たら何時の間にか引込んで仕舞やアがつたと如何にも殘念そうに來太郎其日は夫れて歸つて仕舞つたサア夫れからと云ふ物はドウもお鶴の姿が目に付いてウッラ〳〵と其日を送つて居るが不圖考がへた　來「コリヤア何でも那處の主人と懇ごろになつて夫れからでなければ迚も望みを遂げる事ア出來ねい聞きゃ

ア文右衛門と云ふ者は大層將棋に熱心て居るうちだからソコを甘く付け込んで遣つたら自然出入が出來るやうになるだらゥ夫からソロ〳〵小口を開けても遲くはねい」と元來利發な來太郎なるゆへ左樣いふ考がへも又上手だサア夫れからと云ふものは何や彼や用事を寄托けては萬屋へ往くと合間には主人が店の別間の處で上那寺の和尚と將棋を差して居る　來「有難い……此處が他の狙つて居た處だと好な道と云ふものゝ無遠慮勝だからズッと其處へ往つて見て居る　來「旦那樣ソレ飛車が浮雲うございますよ……文右衛門は一生懸命で勝負て居たから來太郎の側へ來たのも何にも知らなかつたが今口出しをされたのを見てヒョッと傍を見ると兼て評判の悪者といふ來太郎が見て居た、ケレども何も自分の處へ來て悪い事をしたでもなし又始終買物や質入に來る謂はれ得意さまだ夫れ故何故來たとも言へねい　文「之

は來太郎どん克く御出でごんすノウ　來「旦那樣毎日御邪魔ばかり致しますッイ俺も將棋が好だもんだから御挨拶もしねいで伺がひました……大分面白い勝負になりやしたねい」と扨目のない挨拶をする文右衛門も勝負の決までは一生懸命で差して居るとトッ〳〵旦那寺の和尚は敗けになつて仕舞つた　來「コリや旦那の御手柄だ……如何でしやう俺も見たが最後何も遣つて見たくて仕樣がねい寺の御前の仇討ちに一ッ御相手を致していもんですねい」所ういはれると誰れでも天狗でないものは無いから序で　文「俺し達のは」に那方も一番負して遣らうといふ氣になります

ホンの下手の横好なもんだが夫じやア折角ですから御相手を致しましやうと何心なく局面を引き寄せ來太郎先手となつて互ひに秘術を盡し勝負を爭ろつて居たケレども來太郎の方が遙かに上手です文右衛門も劣手といふんぢやア無いがナニシロ片方は

轉突て居て外に商賣もねいから暇せいありやア將棋でも差して遊んで居るゆへ自然と強手くなる夫だものだから來太郎の目から見るとモー勝負はチャーンと解つて居るが此處で負かして仕舞つては曲がないので態と機一髪い處で負けとなつた　來「ヤアりませう　文「左樣さノー一番じやア不物足ねへ……初めの勝ぢやア藥勝だつてから……と又駒を振つて手合せをすると今度も今一手といふ處で來太郎の負……サンザン汕を搾つて置いてトの詰り機一髪い處へ來て負て遣るんだからサア文右衛門は面白くて堪らない、ケレども餘まり遣つて居ちやア下々の者の示しにもならずするから程宜い處で切り上げとして仕舞つた　文「小僧やれ茶を入れて來なソーして棚に羊羹があるからアレを序で持つてれ出で　小僧「畏こまりました……聽てれ茶も遣入つたの

で來太郎にも勸め旦那寺の和尚とも色々世間咄しをして居るが來太郎はナニしても世間を渡つて居るので種々面白い咄しもありますが、ヂア之が縁となつて度々高屋へ遊びに來る足繁くなりますけれど文右衛門は自分の好な道の相手だし且つはナカ〳〵如才なく立廻るからして　文「來太郎て男は皆な蛆虫のやうに云ふが正逆咄し程の奴でもねい夫れとも俺にやア恐れて居てアヽイ〳〵して居るか知らんと文右衛門はグツと天狗になつて居るので來太郎の腹を見破る事が出來ない處が番頭の武兵衛と云ふのは中〳〵賢しい萬事に抜目のない人だから此間中から繁々來太郎が奥へ入り込むのを見て不思議に思ひ夫とはなしに眼を付けて居ると只管旦那の御機嫌を取つてスツカリ猫を破つて居る　武「那奴は決してアンな温須な眞似の出來る筈はねいんだが其處を我慢してアヽペコ〳〵取入る處を見ると野郎の胸に一物あるにやア違ひねい油斷は決して出來ねいぞ……アヽ飲呑〳〵……と主人思ひの武兵衛ゆへ獨り胸を傷めて居る、デ來太郎は此頃ではもう毎日のやうに高屋へ來ては將棋の相手をしたり又色々奥の用などを足して遣つたり仕るから旦那寺の和尚は恐皆株を來太郎に奪取られて仕舞つた和尚は頻りにコボシて居る　和尚「來太の野郎トウ〳〵胡麻を摺りやアがつて俺の株を取つて仕舞やアがつた何も當時の若いもんにやア及ばねい老人は跳足だ」と内心大いに面白くなくなつて居る文右衛門も來太郎が取入つて來るもんだからナゼ來ると云ふ譯に往かず其儘にして月日を送つて居たが戀しいお鶴は母親の側にばかり居て來太郎が悟れてがしの素振りをしても見向きもしないソイツを番頭の武兵衛スツカリ晩らんだ　武「油斷が出來ねいと思つたら娘のれ鶴さんに惚れて居やがるせ見ても吐悖の出さうな眼付をしやがつて

ヤ〳〵笑つて居るなんぞは御氣が勞れて仕舞うけれどヨモヤ此懸は出來こはあるまい……萬一出來ねいでお鶴さんにれ肘を喰つた曉つきにやアアヽ云ふ野郎の事だから又何んな祟りをするかも知れねい……アヽ惡い奴が舞込んだものだと非常に心配して居る果せるかな是が一ッの騒動の起る糸口と相成りますが次席に讓りまして

第二席

武兵衛は心配の余り夫とはなしに此事を主人に咄しますと文右衛門も尤ともの事に思ひ

文「成程俺も其處迄にやア氣が注かなかつた就れンな腕があつてする仕事にやア迄ひねいが夫じやア斯しやう俺しが當分留守をすりやア其間だは幾ら來太郎がッウ〳〵しくしても少しやア足が遠くなるだらう遠からして江戸見

物に出ていと思つて居たから丁度幸はひ家内を連れて出懸けやう夫に淺草の觀音へと御參りをして來たいしするから二三日内に出懸けやうよ……お鶴がいナニれ鶴はアヽ云ふ内氣な娘だから余り賤やかな處は否だ〳〵と云つて江戸なぞへは往たがらない留守居をさせるにやア丁度宜い龜次郎も置いて往くが何分れ前に頼んだはと此處で相談も極つたから誰れにも知らせず文右衛門夫婦の者は江戸見物に出懸けて仕舞つた來太郎は何日の通り茂屋へ來て勝手口から揚らうとすると下女のれ金といふ太福面の女が台所を片附けて居た　金「ヲヤ來ぞんれ生憎さまだよ旦那樣は御留守ですよ　來「何處へれ出だ旦那は……と遠慮なく奥へッカ〳〵と這入つて往つた　金「マア呆れたねい旦那は御留守だと云ふに奥へなんぞ揚がつて往つて……一寸……一寸……番頭さん御覽なさいッウ〳〵しい來ぞんは旦那が此留守だと云ふ

のに奥へヅカ〳〵揚つて往きましたよ」と店へ飛んで來て武兵衛に告げた　武「ソイッは怪しからんナアと奥へ來て見ると龜次郎と何か頻りに咄しをして居る　武「來太郎どん今日は生憎だつたね い旦那は急に江戸見物に出懸けて當分は御留守だから又れ歸りになつたられ出でなせい」と夫とはなしに當付けた　來「此奴俺の來たのを邪魔がつてアヽ云ふ事を吐しやナがるんだナ癪ねて居やがれと心中大いに怒つたが今事を荒立つては折角の苦心も水の泡とヂッと心を押鎮め　來「ソー云ふ事たア少とも知らなんだ別に旦那も御咄しがなかつたが……ヂャア急に御立ちでしたね　武「ソーです……マア當分は御留守ですから……飽までも御愛想ですから遊らッウ〳〵敢い來太郎も斯う云はれちやア歸らねい歸たやア往かねい　來「夫じゃア今日はお暇まにしやう番頭さんお邪魔をしました　武「何もれ卿々さま……」此日は來太郎も

據ところなく歸つたが兩親が居ないと云ふ事を聞いて時節到來と大いに喜こびました　來「然し待てよ番頭にアヽ嚴重々々に云はれちやア往くにも少と間が惡いが恥かしがつたり氣まりが惡かつたりしちやア女の出來ッてはねい何でも押を強く遣つて見やうと之から文を認ためて思ひの丈を細々と記し又明日になると萬屋へ遣て來たが天氣も宜いものですかられ鶴は慰さみ半分に裏の畑けの傍で頻りに張物をして居た、チラッと見たる來太郎は天の與へと大らに喜こび密かに背戸口より廻つて往くと外に誰も居ない　來「れ鶴さん大層御精が出ますれい母親がれ留守で淋しうございましやう　鶴「ヲヤ誰かと思つたら來さんですか……モー直に歸つて來やうと思ひますが兎角無人で淋しうございます」咄しの糸口が付いたゆへ來太郎は密かに懷中より認めし文を取出し　來「お鶴さん……　鶴「ハイ何ぞ御用ですか……

來「別に用と云ふんでもないが一寸此を見て下さいな中には江戸の錦絵が張り付けてあります」れ鶴は何心なく手に取つて見ると決しからぬ艶書でございますゆへサッと顔を赤らめ　鶴「妾しは此様物を見たくはありませんとソコへ投出した。來「れ鶴さん夫りやア余まり情けない心を籠めた此玉章悪くもあらうが切めて思ひの丈の半分も買つて下すつても宜いでしやうと袖を押へてサマ〳〵に掻口説くれ鶴は強面さ恥かしさト云つて大袂を出して人を呼ぶ譯にも參りませんゆへ身体爰に谷つたる様子……見て取る來太郎は　來「之れ程俺が頼んでも夫じやア願ひは叶へて下さらんか斯うなりやア破れかぶれ俺も名を賣る來太郎可愛さ余つて憎さが百倍此上は是非がない御兩親初めれ前まで撫斬りにして殺した上俺も一所に死にましやう一旦男が言ひ出しもやア跡へは引ねい氣象だから夫じやア仕方がありませんせん覺ね

れ出でれ鶴さん」と日頃の本性を顯はし捉へる袖を放しつゝと歸らんとする様子を見てれ鶴は慌たゝしく來太郎の袂に縋り鶴來さん待つて下さいまし貴郎のれ心は分りました御腹立は御尤も左が何か勘辨して下さいまし」と娘心の一筋に唯兩親を撫斬りにするといふ恐ろしい權幕に驚ろいて若しも左様した事なら一大事コリやア寧ろ我身を捨てゝ來太郎の心に從がへば夫樣禍はひも無からうとキワドイ處で思案を定め夫で摺ぎてろなく心に從がはうと云ふ事を申したのである、來太郎はアたと思つたが來「夫じやア全たく夫れに違ひはありませんね　鶴「アイ……　來「夫を聞いて安心した何も殺生をするにやあ當らねいが夫も是もお前さんを思ふ一心から終口へ出て仕舞んだ跡で綴くり此文を見て色よい返事をれくんなせい余まり二人で咄しをして居て若し人に見られても爲にならねいと其日は別れて仕舞つたが聞く

人なしと思ひきや此咄しを最前より木影にて立聞く弟の龜次郎何か心に點首まして之も全じく此の場を立去りましたお鶴は之れより人知れず來太郎より遣したる玉章を拔いて見ると見事な筆跡……

君ゆへならば命もいとはじ一と夜のなさけを百夜もかへん若しやすげなく仕給はゞそなたは更なり兩親まで一とつ刄に思ひ知らせん……

鶴樣ゟ　來太郎より

と云ふ末に恐ろしい事を認ためてある　鶴「ホンに男振りといひ氣量といひ誠とに厭味のないアノ來さんだけれども何を云ふにも氣だてが恐ろしくアゝ云ふ事を云ふ位ゐだから殊に因つたら妾しゆへに御兩親が何なに迷惑をなさるかも知れない先刻もあ

んなに云はれたから御心に從がひますと云つて置いてはあるしあるゆへ據ところない一夜は身を汚し二度と再たび詞ばも交さないといふ契約を仕樣と早速返事を認ためて人知れず來太郎に渡した來太郎は魂も天外に飛ぶと思ひ取る手遲しと人無き折を見て封押切り開いて見ると

「ろなたの切なる心にはだされて今宵合圖をする程に何卒忍んで來て下だされば其の切いろ〳〵お咄しもいたしまじやう」

といふ極く簡略な手紙だが嬉しい返事だ　來「先づ此分ぢやア日頃の思ひを遂げる事が出來さうだ夫だから少たア威嚇しても見なくつちやア女は出來ッて無いと獨りで當世の好男子を極め込んで居る愈々日暮に及びましたから來太郎もスッカリと目かし込んで密かに萬屋の裏木戸の所へ忍び合圖の礫を打つと暫らく

立まして誰やら木戸の處へ來てソッと開けた　鶴「來さんか……」來「お鶴さん……」と云ふも四邊を憚かる忍び聲れ鶴は來太郎の手を取つて、己が臥戸に伴なひ行きましたけれど何を云ふにも世間見すの未通女只胸の惑くのみ顔を赤らめ暫らく言葉もあらざれと眩度胸を定め　鶴「アノ來さん手紙でモー詳しく分りました貴郎のれ心も……ダガ妾しは落奔をして兩親の目を掠め結局は苦勢を掛けるのは口惜ひ御兩親がれ嫁に行けと仰しやれば何處へでも往きますし一生一人で暮せと仰しやれば左樣も致します只モー親達の見次第夫を斯うして貴下を今夜忍ばせては誠とに親兄弟には濟ない事ですが一夜限りの添寢にて後はフツツリ思ひ切り詞も發さぬと云ふんなら切めてはれ心に從がひましやうが夫ではと云ふ思し召なら迚もれ心に從がへませんと思ひ切つて咄し聽けた來太郎もれ鶴の勸かぬ精神を見て　來「何も一晩切りだからと云つて自分の損が往く譯じやアなし初物の寶飯丈でも有難ていんだ」と只モー無理になつて仕舞つて居るから　來「夫りやアれ鶴さんの仰しやる通り俺も一晩切りで思ひ殘す處はありません　鶴「夫では確かに……眩度左樣でしやうネ」と勸に互ひに言葉なく是から先きを申上ては大いに猥褻に渡りますから皆さんの御推察に任せます來太郎は其夜れ鶴に別れてからがドーも益々思ひの種となり惱しいやら懷かしいやら自分ながら氣が知れぬ位ゐだ　來「エー毒を喰はい皿までだ迚もものに事女房に貰つて手活けの花にしやう親せい承知ならと云つた事もあるから一ッれ鶴の心も確かめて置こうと夫から文こまく　と認ためて何度送つても返事がない　來「エヽ忌々しい氣が變つたにやア違ひねいヨシ〳〵左樣いふ譯なら此頃直々にれ鶴に談判して遣らうと人無き折を覗がつて居ると例日の如く裏の畑で張物をして

居る　來「れ鶴さん今日も眼物ですか大層御精が出ますナれ鶴は來太郎の顔を見てギョッとしたが左あらぬ躰にて　鶴「おや誰かと思つたら來さんですか　來「來さんですかもねいもんだヲイれ鶴さん余まりれ前さん薄情だね　鶴「ヲヤ薄情ですとへ何が貴郎に薄情です　來「夫でも考がへて見なせい此間の晩別れてつから幾度手紙を遣つたつて只の一度も返事を遣した事もなく逢へば見ねい振をして通り過ぎつちまうてはなア余まり夫じやア酷過らア　鶴「夫でも此間だの晩何と仰しやいました能く物を考がへてれ吶しなさい妾しやアモー其様事は知りませんと袖を拂つて店の方へ駆出して往て仕舞つた來太郎は手の内の珠を取られた思ひ只茫然として居たが暫度心を取直し先きが先きなら此方も此方だと之からグッと心が變つて仕舞ひ可愛さ余つて憎さが百倍と仝じく悪徒の一人にて字を獄卒の無理太郎といふ仝く相求

むる非道の白徒……此人を頼寄つて來ました　來「兄哥は家かねぬ……無理「ヲヽ來太か暫らく見ねいが何か甘い鳥でも摑つたのか　來「ナカ〳〵以つてイッも組語だ……時に兄哥れ主を見摑けて頼みがあるが何と聞いちやア呉れめいか　無理「俺を見摑けて頼むと云はれちやア何だか默つちやア居られねい全体吶しア何だへ　來「外でもねいが實ア媒介役を頼みていんだ　無理「フム〳〵れ主が嫁でも貰うのか夫とも宜い口へでもズラ込むのか　來「アハヽヽ其様聞かれちやア俺も困つたが實は是々云々とお鶴との關係より是非共文右衛門夫婦の承諾を得てれ鶴と女房に貰はなければ俺れの一分が相立たんといふ事を話した　無理「ヨシ〳〵夫りやア造作はねい獄卒が受込んだからにやア大丈夫が虎の皮の嚇鼻摑を確かりアの摑るまでの事だ　來「ダガ兄哥其處に一ッ困つた事があるといふナア萬屋の番頭に武兵衛と云ふのが居るだら

う　無理「左様〳〵　アノ堅造の武兵衛の野郎か……アレが何した　來「何の斯のつて外じやアねいが實ア何も頑固な野郎で理窟を云つたんじやア歯も喰立たねいだ　無理「ヨシ〳〵　夫も承知だ何でも搗はねい明日は此方から子分の二三人も連れて結納物でも持つて出懸けやうと悪事に懸けては抜目のなき無理太郎ゆへ兄弟分の來太郎から余義なき頼みと云はれて見りやア駄つては居られない殊には甘く往けば五十と百の金子は奪取める事が出來やうといふ一ッの山があるゆへ明日になりますると手下の者に柳や巻を持たせ萬屋方へ參つて文右衛門に面會致したいと云ふ事を申込んだ此時は折あしく文右衛門は他出して武兵衛一人店に居つたが大の男が櫓や肴を搗ぎ込んだから何事ならんと思つて居る　無理「ア、夫れぢやア旦那は留守ですかい居ても居ねいなんて狙を追うんぢやアありますまいナ　武「手前共では左様な事は決して申上ません居ない者は何處まで居ないんでございます　無理「左様か夫なら夫で宜い……エ、御免ねい少し今日は相談があつて來やした　武「何かは知りませんがマア御上り下さい　無理「外でもねいが此家の娘のれ鶴どんを他が貰いに來ました夫で之れはホンの結納の印し何か納めて下せいやし……　とサア突如に云つちやア分るめいが全体此中から此家へ出這入をする來太郎が れ鶴さんに惚れ込んで文を遣つて口説いた處ソンなら一晩の事位ねは承知したと云つて裏の木戸から忍ばせ嬉しい夢を結んだそうだ……デ其時の返事から何から證據は幾らもありやすが左様いふ譯で二人の中はモー皆悉出來て仕舞つて居るケレども れ鶴さんの云ふにやア兩親が承知しなけりやア幾ら惚れた仝志でも夫婦になるの嫁に往くのと云ふ譯にやア往かねいと斯いふ話しソコで俺しが一ッ肌を抜いて今日は二人の媒介役グッと粹を

利かした積り何か此處で男の一分を立てゝ承知して貰ひていゞが若し又承知が出來ねいなんぞと云やア此方にも量見があらア命を捨てゝも懸るから眩とした挨拶を聞かして貰ひてい武兵衛は驚ろきました全然之がやア寐耳に水だが索より瞑の出來て居る武兵衛の事故驚ろき乍らも心を鎮め　武「之りやア思ひも寄らぬ事を仰せられます例へれ鶴どのは何いふ事があらうとも親の云ふ事に從がうのが女の道、夫に主人の文右衛門も只今れ話し申た通他出中の事故斯いふ事と云ふものは親も得心した上に親類にも相談して夫で宜いと云ふんでなけりやア決して話しの纏まるものじやアございません何れ主人の歸り次第筋と相談して挨拶を致しましやう例命命に懸けて媒介をなさるとも親の得心しないものは代官所へ訴へてれ正しを糺らさまでの事先づ此品は持ち歸りを願ひましやうと切り込む隙のないやうにグーとも

スーと云ふ事が出來ない程の一本參らせました流石の無理太郎も一言の返答も出來ない位ぬムリも此處じやア通らぬい只もう無理「是非貰はなきやア男が立たぬい……と繰り返して云ふばかりだ武兵衛は却つて心中可笑思ふ位ね　武「サア〳〵如何樣に仰しやるとも此樽肴は受けません持つてれ歸りなさいましと急ぎ立てますので無理太郎も悉皆男を下げて仕舞つた　無理「じやアなにあつても今日の話しにやア往ません　武「左樣でございます……　無理「ムヽ夫樣いふ譯なら此方にも量見があらア何れ二三日内にやアまた出直して來ますから用心をして待つて居なせい」と持つて來た樽肴を手下の者に持たせ四邊を睨らんで歸りましたが愈々れつる自害致する件りは一寸一息いたして次第のれ樂しみ……

第三席

武兵衛は無理太郎が無道なる振舞を怒り主人文右衛門が歸宅を待受け委細を語りましたから之れ又大いに驚ろき早速れつるを一間へ呼んで樣子を尋ねて見る處全たく來太郎に脅やかされ二親に若しやの事があつては取つて返しが付かず殊には一夜の情けにて思ひ切るといふ誓言故終に道ならぬ事乍ら來太郎の言葉に從がひ[illegible]したといふ事を物語つた弟の龜次郎も　龜「私しも丁度其時は裏の畑に用があつて姉さんの跟物をして居る處へ往こうと思つたら何だか頻りに來太郎が姉さんに迫つて居るのを見ましたけれど全たく那りやア來太郎が惡いので決して姉さんの惡い譯ではございませぬ物影で委細の樣子は聞きましたと兩親の前にて姉の爲めに證明したから　文「俺れ惡くいは來太郎日頃

出入をしたのも實は其心組であつたんだらう宜し左樣事が分れば別にれつるに小言を言つた處で初まらない夫じやアナニシテも此處へ置ても心配だから隅田の里に住む伯父の牛島茂太夫殿に頼んで當分預かつて貰う事にしやう……何だノウ番頭どん夫の方が宜さうなもんだが……　武「イエ左樣いたせば別に仔細もありますまい」と相談が極つたからしてれつるは人知れず牛嶋方へ人を附けて當分厄介になる事に相成りました處が何も美人は何處へ往つても美人だ容色の美いはイツモ目に付く　甲「今度茂太夫どんの處へ辨天樣がれ下りになつたナ俺ア今まで美い女も美い女も見たけれど先づアノ位いナア少ねいや背格好から容貌から目付から鼻付き口元に愛嬌のある處は云ふに云はれねい旨味があらア　乙「ヲイ〳〵待つて呉れ待つて呉れ……ソラ涎が垂れらア幾ら美い女だつて高が女だ正逆に眼が三ツあつて鼻が額

口にクッツイて居る譯でもあるめへ矢張り人間並だらう　甲「左樣よ夫りやア又當り前よ眼が三ツあつたり鼻が額口にクッツイて居りやア化物だ全なし目鼻があつてもソコに具合のあるもんだアナれ前にやア何日でも話しが出來ねいやア逆言してばかり居やがつて……　乙「アワハヽヽ、マアー左樣怒るねいへ余まりれ前が褒るから一寸棒鼻を切つて見たんだ……全たく俺もアノ位ゐの女は生れて初めてだ先づ江戸へ出てもアノ位ゐナア少ねいが一體何處から來たもんかモー之れ一月ばかりも居るが那方にやア倅がある譯じやアなし、ト云つて茂太夫どんの妾でもあるめいし……　甲「ヤイ〳〵左樣なに嫉けるねい無爽になつて……誰だつてアノ女を一目見てゾッとしねて者はれ感んじがねいんだ」と近所の若い者が寄ると合るとおつるの噂さ、處がヂキ隣田の里に近き葛飾のはとりに高野の大之進といふ者があるが代々

庄屋を勤めて克く百姓を憐れみますので自然と人にも尊敬せられ誰一人惡く云ふ者がない一人息子に大之丞と云ふがあつて性質は至つて優柔なれど武藝の道を好み至つて勇武の聞えある者なるが或る時淺草觀音へ參詣いたし其歸るさに茂太夫の横手を通るれつるは折ふし門の處に立つて居て往來を眺めて居つて居たが不圖も大之丞と顏を見合はした大之丞も頗ぶる好男子殊に此時年齡も二十二才であるゆへおつるとは全たく釣合の好い年配である　大「アヽ斯ういふ美人も世の中にあるものか一体此女は此家の娘であるか知らん男と生まれた甲斐には是非斯ういふ女を女房にして暮らすこそ本望と暫らく其處へ立止まつて見て居る……實は余まり美い女を見た爲色に足が佇んで歩行なくなつたんだ……れつるも大之丞の男らしきを樣子を見てハッと思つたがモト〳〵男の事で失策で茂太夫の處へ預けられて居る身

であればモト男と云つちやアコリ〳〵して仕舞つたゆへ顏を赤らめて本家の方へ駈け込んで仕舞つた大之亟は手の内の珠を取られたやうな心地して其日は夫れで家へ戻つて來たが扨伯林共の克く申上げます通り如何なる武勇の者でも一度戀風が身に染みるとナカ〳〵物思ひに堪へられぬもの……大之亟もれつるの姿を一目見るより　大「美い女だナア〳〵〳〵」と思ふ斗りで自然氣分も引つたゝず

「物や思ふと人の問ふ迄」

母親「大之亟やれ前此頃は如何したんだねい隨張り元氣がないしやアないか何かれ仕かい病氣ならば大事に仕ない内に療治ないと往ないと夫に顏色も惡るし何だか此節は寐ても時々唸される樣だよ……　大「誠とに母親さん中分がありません御心配を懸けまして……何もれ隱し申しませう實は全たく病氣でございます　母親「オヽ夫りやア往けない何か左樣だらうと思つたよ夫しやア早くれ醫者に見て貰つたら如何だい澤山惡くして仕舞つてからモー間に合はないよ　大「ナニお醫師に見て貰う程の病氣でもありません夫れにれ醫師しや迚も治はりも致しません……れ醫師さんでも草津の湯でもッ……てねー母親さんれ察し下さい爲母だつて若い時ア美い男を見れば萬更惡いものでもなかつたでしやう我身を抓つて人の働きを知れッて事があるしやアないか　母親「何だとへ妙な事をお言ひだねい全体れ前は生氣なのかへ何が何だか醫張り譯が解らないねい思ふ事があるんなら正直に言ふ方が宜いよ……言つてお仕舞ひ母子の中だもの何も遠慮の入る筈はないやア　大「ハイ……實はソノー……　母親「何だい實はソノー……ばかりしやア解りやア仕ないよ　大「ハイ……實はソノー……就中……豈圖らん……然

故に……　母親「何だねい此子は余程ドーカ爲て居るよ生氣じゃア無いね……　大「實は少し狂印で……　母親「戯談じゃアない何か胸に思ふ事があるんだらうモシ有るんならば之々斯々だとお話しなさい惡ければ惡い宜けりゃア宜いと私しがソコは判斷をして遣るからと情けの籠る母親の言葉　大「實は過日淺草觀音へ參詣し道なながら隅田の里牛嶋茂太夫の門邊にて見染めたる女がある　と云ふ一伍一什の事を話し是非女房にして欲しいといふ事を明白さまに述べました　母親「左樣かへ大方ソンナ事だらうと思ふから根堀り葉問ひをした譯だが本人の欲いたのが何よりの事れ前もモー年頃だから是非女房を持たしたいと思つて居た處幸ひの話しだれ父親とも克く相談して何にか先方へ話しをして見やうと之から兩親は相談の上玉川の在に住む一刀流の達人綾瀬權太左衛門と云ふ名を聞くと一寸怖さうな人物だが至つて優しい氣

立ちの人……　大之丞とは極く親親の間柄であります　すゆへ此人を媒介に頼む事にして茂太夫の處へ掛合ひに遣りました……　一体此權太左衛門と云ふ人は結城藩の者ですが浪人して二君に仕へず今じやア玉川の在へ引籠んで專ぱら男を磨き弱きを扶け强きを挫くと云ふ頗ぶる義俠の擧動多く其上身の丈六尺五寸虎髭を左右に生へて宛然鬼神の如くでありますゆへ誠れも生仁王權太左衛門と呼び近鄕近在切つての大達者だが此權太左衛門に頼み込んだと云ふのは頼む方もナカ〳〵拔目のない致し方だ權太左衛門も頼まれては跡へ引かぬ男氣である故早速承知いたし夫より牛島茂太夫方へ尋ねて參り初對面の挨拶も濟み　權「牛島殿實は今日伺がひましたも余儀ない義で……　茂「ハヽア何御用かれ話し下さいますれば又克く勘考も致しますでございましやう　權「イヤ外でもござらんが此方に一人の娘さんがれあんなさる御

様子で……　茂「イエ手前共に娘なぞはございませんが……　權「之は
したり牛島殿娘が無い抔とは偽はりを云ひ召さるな只今もお茶
を汲んで持つて參つたではございませぬか　茂「アハヽヽ大きに御
尤とも……　那れでございますかッイ〳〵　手前の心得違いで申し
譯はありませんそれは俺しの娘じゃアございませんそれは其親類
の者より預かりました代物で　權「夫では賣物と申す譯ではござ
いませんか　茂「左様さ強がち左様でもないらしいが何を隠そう
此娘と申すは熊谷在の萬屋文右衛門と申す者の娘で有升　權「左
様でござるか夫で漸やく合点が參つたが俺しも今日伺がつたは
若しや其娘さんは他へ出しても宜いと云ふ親御さんの思し召な
ら何か俺しが媒介をして葛飾の里に庄屋を勤めて居る高野大之
進の倅大之丞の嫁に貰ひ受けたいのであるがと懇望の次第を委
しく語りました　茂「ソウ云ふ譯でございますか夫れでは一ッ早

速に親元の方へ聞き合し何とか御挨拶を申上ましやうと茂太夫
の言葉　權「夫じゃア何分宜敷くれ頼み申すと其日は其れにて
權太左衛門も立歸つた茂太夫は翌日に及で直ちに文右衛門の許
を尋ね棲瀬權太左衛門と云ふ王川在の侠客だが素は武家出の堅
氣な侍……此人の周旋を以てれつるを葛飾の里にて代々庄屋を
勤めたる高野大之進の倅大之丞と云ふ者の處へ遣はしたらどう
だらう是非貰ひたいといふ相談のあつた旨を委細物語り文右衛
門の胸中を夫となしに氣引いて見た文右衛門は大きに喜び　文「
不束な娘なれども先方様で貰つて遣らうと仰せがあれば何より
の仕合せ御存じの通り彼太郎とはアヽ云ふ不都合の仔細もあつ
たから夫れ故に預け申して置いたやうなものだから此段を篤く
と先方へ話し夫れでも關存が無いと仰しやれば私しの方では決
して否やはございません萬端貴郎にお任せ申しますと茂太夫へ

の話し　茂「左樣いふれぼし召しならば何れ一兩日の中には綾瀬殿も見へられましやう故明白に話しをして見ましやう」と之より種々四方山の話しを致し其日は是にて別れました三日目に及んで樹太左衛門は先方の返事を聞き乍ら追つて參つたソコで茂太夫もお鶴の生來より女心の余儀なくも來太郎と云々のなつた事を隱さず物語り夫れ故一時我家へ預かつて居るが決して不品行で來太郎と譯のあつた次第ではないと云ふ事を明細に打明けました　樹「イヤ却つて左樣伺がうのは何よりの事夫れでは兎に角親元の方では別に御異存もございませんね　茂「夫りやアモー異存どころか之れ〳〵の次第だと咄したら文右衛門も喜こんで不束の者でも貰つて下されば何よりの事だと云ふ挨拶であつたと云ふ事を話したゆへ樹太左衛門は再たび取つて返して大之進に茂太夫からの咄しを詳しく傳へた大之進も自分の貰う女房では

なし悴大之亟の好き好んで貰うのであつて見れば決して彼是云ふ譯にも往かずするが一應は尋ねて見やう」と一間へ呼び　大之進時に悴漸やく緩談も纏まり懸つたが一ツ困つた事には娘の失策のあるのじやテ　大之亟「ハヽア左樣でございますか夫りやア又何いふ譯でございます　大之進「夫れは別義でもないが……と之より來太郎に横戀慕を受け一度肌を汚された事を眞直に咄した大之亟「外の事ならば左樣いふ譯なら直にも御斷はりだが親の爲めを思つたとあつて見れば又殊勝な處もあります故御兩親も御承知の上なら何か御取極めを願ひたうございます」當人が左樣いふもんだから早速咄しも取極まつて樹太左衛門は再たび茂太夫の許へ參り是非共大之進方に於いて貰ひ受けたいといふ事を咄した爰で全たく双方の札談が取極つたものですから吉日良辰を撰んでれつるは牛島の家より直ぐ高野大之進方へ輿入れを致し四海

流部かに高砂の諸ひも濟んで目出度くお開きとなり思ふ二人が夫婦となつて之より仲睦まじく暮しました之と云ふも全たく祖瀬どのゝ御骨折と双方の両親も大きに喜こび厚く禮を述べて其親切を謝したが權太左衛門は更らに禮物抔は受けなかつたと云ふのは潔白な人であります此事を聞き及んだる來太郎は果して如何致しますか一喫御免を蒙むりまして次席に委しく言上いたします

第四席

されは咄しは少々跡もどりを致しますが爰に彼の來太郎は俺れが惡事の兄弟分なる獄卒の無理太郎を頼んでれ鶴を貰ひ受けたいと云ふ事を掛け合に及んだからドウ云ふ挨拶があるかと心中歸りを樂しんで居た處が案外にも番頭武兵衛の爲めに刎付けられて

無理太郎は結納物を持ち歸つて來たから心中に面白くない　來兄哥お前が之れ程骨を折つて呉れて出來ねいんなら之も據どころねい咄しだ就ちやアモー一度頼みがあるんだが聞いちやア呉れめいか俺も惡徒仲間の來太郎だ此樣な處で尻毛を抜かれちやア男の一分が立たねいからモー一遍御若勢序でに往つて貰へて い　無理「夫りやア俺も往く積りよダガれ前の腹は何う極つたんだグヅ〳〵しりやア斬いて仕舞う積りか夫とも女を攫つて逃る積りかナニシテも惡いは萬屋の野郎等だ只アノ分に置いちやア俺の顔もつぶれらア、ナニシテモ是非出直して腹癒せをして遣らざア成るめい　來「俺の腹は極まるも極まらねいもねいグヅ〳〵しりやア斬いちまうし出やうに依つちやア金にしても宜んだが夫りやア時と場合を見て何なるか解らねいやうなもんだ　無理「ムー夫なら夫で宜いぢやア二三日經つたら往つて見やうと夫から

充分支度に及んで來太郎は無理太郎と二人限りにて萬屋へ出掛けた萬屋に於ては充分用意して今日來るか明日來るかと必待ちに待ち構へて居た處故更らに驚ろきもしない　武「ヤア之はれ嬉ろひでサ何卒此方へれ揚り下さい……先日は何も御無體を申上ました……誠とに御天氣も穏やかにして結構で……　來「ヲイ〳〵番頭ッンなに世辞を云はなくてもいゝよ」と無理太郎と共にドッカリ店先きへ大胡座　武「お二人さん何か御用でムいますか……無理「ヲットチト待ちねい〳〵今日は主人が往ねいなんて事ア言はせねいよ　武「へエモー今日は宅に居りますでございます　無理「ムゝ居るだらう夫れぢやア直ぐに逢ひていとれ前取次で呉んねい　武「シテ御用は……　無理「知れ切つて居らアナれ鶴を貰ひに來たのよ　武「只今申ますと驚て奥へ通入つて主人に此事を告げると　文「左樣かい今日は來太郎と二人で來たか何はともあれ店

先きでは商賣の邪魔にもなるしするゆへ此方へれ通し申して呉んな　武「夫では御二人樣ソコは端近ッと奥へ只今主人も御目に懸りますでございましやう　無理「ヲイ兄弟奥へ往うじやアねいか　來「ヨシ〳〵遠慮は入らねい奥で談判をしやうと之から文右衛門に逢ひ無理太郎より改めて御鶴を懇望いたしました　文「其れ咄は武兵衛からもございいましたから其と承知はして居りますが實は娘の生れしせつ淺草觀音にて占なつて貰つたところ深く觀音を信じ一生尼になつた氣で寡で暮らさなければ迚も一命は覊束ないと云ふ判斷處が娘も如何いふものか成長するに從がつて自然と遁世の志ろざしあり余まり賑やかの處なぞは好ます既に先達て江戸見物に參たつせつもれ鶴に行ないかと勧めた處が江戸へ行て賑やかなのを見るよりやア家に居て好な裁縫でもして居る方が宜いと云ふものだから夫れ故連れずに往つた

やうな始末全たく此程は益々出家をせん事のみ望み既に何思ひ詰めたか親類の家へ逃げて行き是非尼にして呉れなければ宿へは歸らないといふ志ろざし親の身にても如何とも詮方がないゆへ彼の望みに任せやうと云ひ遣はして遣つた程御親切の程は有難うございますが何も右の始末故此事ばかりは我心に從がふ事は出來ませんと主人は主人だけ又旨い道理を付けて斷はつた鬼神を欺むく兩人も喧嘩や何んぞだと惡口でも云つて威かすのは上手だが眞面目で談じられちやアカラ意氣地がねいグーの音も出ないで兩人ともスゴ〳〵と立歸りましたサア斯うなつて見ると來太郎の醜憤は益々激しく折もあらば文右衛門並びに鶴の兩人を斬り捨てゝ呉れんと付け覗つて居たがれ鶴の行衛は更に分らない、スルと或日の事手下の者が歸つて來て 手下「今日は隣田の茂太夫どんの處から葛飾の庄屋へ嫁入があつたがアりやア

萬屋のれ鶴だと云ふ事を云ふ咄しだと云ふ事を無理太郎に咄しました無理「ムヽ大方ソンな事だらうと思つたよヨシ〳〵來太に咄して何とか遁根を晴さなけりやア腹が癒ねいと來太郎の來るのを待つて居て此事を話した 來「扨は此間だ文右衛門尼になるの緑組やアさせねヽのと言やアがつたが皆んな巧んだ仕事に違いねい……チエー殘念……とバリ〳〵と齒がみをして憤つたが 來「ヨシ〳〵夫れ迄樣子が分りやアモー怨みを晴すのは造作もねい之れから毎日野郎の跡を覗ひ一日も早やく斬殺を付けるから覺ねて居やがれと文右衛門の外へ出ますのを伺かがつて居りました

此方は萬屋文右衛門お鶴を嫁に遣つて先づ一安心と思つたが克い塩梅に夫婦中も睦まじいので此上なく喜こび或日の事久々にて、娘に逢ひ乍ら葛飾の大之進を勸れた老人同志の事でありますす

故自然と話しも合ひ二三日逗留して歸り道ずがら牛島茂太夫方へも寄つて是れにも一泊し翌日になつて暇乞をし家路を指して隅田堤へと差し掛つた……只今は隅田堤と申したところは人家はあるし少しも淋しい處ではないが此頃といふものは一方は隅田の川の流れ清く一方は芦芽が生ひ茂つて居て實に荒れ果てたる物淋しい處であつた　○「オーイ旦那……オーイ……」文右衛門は正逆に自分を呼ぶのでは無いと思つてたから他目も觸らずスタ〳〵遣つて來たスルト後ろからドン〳〵蒐けて來る者がある　○「ヲーイ萬屋の旦那……ヲーイ……ヲーイ……」ヨッと振返つて見ると豈圖らんや來太郎が胸に吃驚文右衛門扨は過日の恨みを思ひて難題を云ふに定まれりと恐れ戰なきたりしが流石は老功の郎とて氣を取直し　文「ヲヽ誰かと思つたら來さんか其後は暫らく逢ひませんな」來太郎は遺恨骨髓に徹したる事とて嚇と怒り　來「ヤイ老枯爺奴克くも腐奴は俺を厭つて娘を葛飾へ呉れたな夫も宜いが此間無理と一緒に惡合に往た時に何と言つた娘は出家するとか頭を圓めて尼になるとか体裁の宜い事を吐しやアがつて一寸通れに其場を通れ内所で遣るとは卑怯な奴だ」豁悟しやがれと突然片手なぐりに切り付けた」文右衛門は頻りに言譯をして詫て居たがモー斬り付けられて見ると猶豫は出來ない　文「アレ人殺し……ヒ……人殺し……」と逃げ迷ふといへど此方は劍道に勝れし達人、文右衛門は老人の足も四路道にて迚も逃げ終せるといふ事にも往かないモー之れ迄と思ひましたから　文「ウヌ來太郎殺す氣ならば殺して見ろ此惡黨野郎めッ」と腰なる一刀を抜き放ち死物ぐるひで刀を振り廻して居る　來「何を云つてやがるんでい此死に損ない奴早く往生しやがれと振り下す一刀は肩先へ三寸ばかり切り込んだ　文「アッ……といつて其場へ仆れる

處を横に拂つた一刀は腰の番ひを丁とばかりに深く斬り付けゆへ文右衛門はモー片息になつて仕舞つた來太郎はトヾメを斬し　來「アヽ之で漸やく少し溜飲が下つた……」とニヤリッと笑つて何處ともなく立去りました大膽不敵の曲者でありますす夫れに引き換へ牛島茂太夫は血筋の縁に曳かれてや何も文右衛門が歸つてから胸騒ぎがする　茂「ハテ不思議な事もあるもんだ今迄何ともなかつたものが急に此胸騒ぎがするとは殊に依つたら文右衛門の身に何か途中變がなけりやア宜いがと思ひ自分は淺草の觀音へ參詣すると云つて下僕を一人連れ隅田堤へ差し懸ります年は取つても至つて氣丈な老人で若い者さへも及ばぬ程だから自分がスタ〳〵　先きへ立つて參ると何やら道に血汐が流れて居るハッと茂太夫は四邊を見たが死骸抔といふものは見當らない供の嘉助を呼びまして　茂「嘉助や不思議だノ見なせい血が此

樣にこぼれて居るが人殺しでもあつたのかしらん日の暮間物騒だノー　嘉「ハー左樣かも知れません犬猫の血だア邊つて未だ生々しいやア……チー旦那物騒じやアでわせんか　茂「左樣よなア……二三間氣遣ひながら參りますと　嘉「ヤア旦那ア大變だ……大變だ那樣に人がれつ死んでらア　茂「ウム左樣か何も可怪いと思つたて……と堤の下を見ると成程死骸が横つて居るが全たく見覺えのある文右衛門の衣服の柄だ　文「何は兎もあれ下りて見届けやう　嘉「旦那樣止しなさすべい懸り合にでもなると大い損だ……茂太夫は嘉助の止めるも聞かず堤を下りて能く〳〵見ると全たく文右衛門に相違ない吃驚仰天したる茂太夫に於ては茂「ヤア大變だ〳〵　嘉助や早く下り來て呉れ文右衛門が殺されて居る……嘉助……早く來ねいか……」嘉助も大に驚ろき腰も抜けん斗りに堤を下りて一目見るに果して先刻歸つた文右衛門であ

ります　嘉「こりやア又驚たらしい事だなア遺恨か遺恨か知らぬいが旦那様殊に依つたら追剣の仕業じやアありますめいか　蔦何とも知れぬ……と四邊を見るに小汚ない紙入が落ちて居た是れ屈竟の手掛りなりと拾ひ上げて見ると文右衛門の品ではない就れ殺した奴の品らしい中を改めて見ると「來太郎殿へ急用……手頭馬頭の金八より」としてある扨は慾々仇の本人は來太郎に極まつたり殊にはれ鶴の事を遺恨に思ひ無理太郎とやら云ふ曲者と萬屋へ懸合ひに往つたとやら云ふ噂さも聞いて居るから適切り夫に違ひないと之より嘉助に云ひ付けて一度び我家へ取つて歸し二三の下僕を連れて來させて一人は代官所へ訴へた出させ夫から熊谷と玉川萬飾の三方へ人を走らせ此事を知らせて遣つた其内に撿死の役人も御出張に相成り夫れ〳〵取調べの濟んだ處へ大之進父子並びに龜次郎武兵衛の兩人が急せきと蒐

付け此有様を見て大に嘆き悲しみ殊に龜次郎は未だ弱年の事として父の死骸に取縋り悲嘆の涙に暮れ居たる處へ玉川在の綾瀬權太左衛門も此報知を聞いて大に慌ろき取る物も取り敢へず蒐け付けて呉れたので一同の者も力を得死骸は一先づ萬屋へ引き取る事になりました　權「ナア〳〵龜さん幾ら泣いても死んだ者は歸らない是非に及ばぬ事コりやア嘆く處じやアねい　龜「ハイ〳〵萬事宜敷願ひます……と一同の者は死骸に付き添ひて萬屋へと歸りました女房の嘆きも大方ならずありましたが人々に慰められ漸やく町邊の送りも濟ませ四十九日の追善供養も嘆きの内に經つて仕舞ひ今日は百ケ日の逮夜となつた大之進の妻れ鶴に於きましては一間の中へ閉籠り類りに念佛なぞ唱てへ看經怠たりなく父が未來の冥福を祈りけるがつく〳〵思ひ廻らせば　鶴父さんが無慚な御最期も皆んな妾しが身より起つた事アノ悪い

來太郎の手を借りて父親を殺したも同然不孝の罰も恐ろしく出きながらへるも恥のうはぬりアヽ事を自害して死んだなら切めて少しは罪亡ぼしにもなるだらう……夫にしても飽きも飽かれもせぬ夫大之亟殿今此儘に自害をしたら腐甲斐ない女と思召すかも知れないが之れも前世の約束事何ぞ怨んで下さるな」と能く〳〵思ひ詰めたものと見えまして家内の者は佛事に卿臥れて寐静まつたを幸はひに書置きを認めた兼て信仰する觀音の像を取出し「ナム大慈大悲の觀音さま未來成佛致しますやうにと暫らく祈念をいたし氷の如き短刀を抜き放ちガバと咽喉に突き立てゝ其儘ガックリ仆れました此物音に驚いて夫大之亟はれ鶴の居間へ駆け入れば無惨や懐剣を以て咽喉に突き立てハヤ事切れたる佛哉故驚く事大方ならず家内の者をも呼び起し此始末を話したから驚れも吃驚仰天いたし早速此趣きを實家の高屋へも告げ知らせ玉川の樵太左衛門にも知らせ牛島へも使ひを遣つたゆへサア其混雜といふもの一方ならず龜次郎並びに實母は殊更涙の堰きあへず實母「ホンにあじきなき浮世と云ふが百日も經つや經たづに二人迄無惨の最後をするとは何たる因果な事だらう前世の約束事とは云ひ乍ら神も佛もなきものかとれ鶴の死骸に取縋り前後不覺に泣沈むは見る目も哀れな有樣である茂太夫は一同嘆くのを見て　茂「イヤ皆んなの嘆きは尤ともだが之も約束事と諦らめて跡の吊らひが肝心だ泣いからつて生きて來るものではなし夫よりは供養を懇ごろにしたらば佛の爲めによからうから早く吊らひを出す支度をした方が克からう樵太左衛門も茂太夫の口を切つたを幸はひ親子兄弟を慰さめて漸やく野の邊を送りも濟せ且那寺へと葬むりましたがナニシロ可愛い女房の花の盛りを無常の風に吹き散らしたのだから大之亟も當座は只悲し

みの涙に暮るゝ斗りであります文右衛門の女房に於ても夫に別れ一人の娘に先き立たれ能く〳〵浮世があじきなくなつたと見て之から髪頭を剃りとばち妙淨と法名を改めて朝夕念佛を唱へ夫と娘の菩提を弔ふの外なく憂き月日を送つて居りました

第五席

茂太郎は隅田堤に於て遺恨に思ふ文右衛門を殺害いたしましたので恨みも晴れ氣も清々致し之から葛飾なる牛頭馬頭の金八の處へ約束のある仕事をしやうと考へて參つた處が隅田堤に於て落した紙入れが證據と相成り金八の處へ手が這入つて金八並に手下の者兩三名は召し捕られて仕舞つた夫からイロ〳〵呑味を受けたが惡黨仲間と云ふものは實に義理の堅い所があるもので幾ら水火の責苦を受けても茂太郎の惡事抔を爪の垢程も話さない終に金八は刑場の露と消へて仕舞つたがサア茂太郎の陰謀は益々嚴しく相成り無理太郎と共に逐電いたそうとしたが何しても路金といふ者は必ず追ひ高飛びが出來ないソコで搦どころなく熊谷の宿に居る掃塚の銅八といふ惡者が居たが其處へ頼み込んで二人は當分厄介になつて居る一体此銅八と云ふものは玉川の權太左衛門の實弟であります生來が至つて宜しくない心邪の者だから迚も兄貴の云ふ事なぞは聞きいて居られない遂に家を飛出して熊谷の宿を轉突て歩行き自分手下を二三人も拵へて博奕の賭場を開いたり時には熊谷堤で追剝をしちやア惡事の仕放題であつた併し此頃は在方へ這入ると至つて法律も行屆かなかつたものですから自然斯ういふ惡者が巾を利かして居た……當今の時勢で以つて斯いふ事を申上たら可笑く思召す方も

でございましやうが全たく此は事實でございます……來太郎は銅八の處へ頼み込んで無理太郎と二人で潜んで居ましたが或日手手の者の知らせに依り熊谷の堤を御用金を負たる馬に宰領の飛脚が二人付いて通るといふ事を承知いたした　銅「何だい來太郎れ主やア仕事に出る氣はねいか良い鳥が懐つたから　來「ソりやアなりだ實ア余まり出懸けねいから一ッ大きい事を遣つて突走らうと思つてた處だ……俺れ一人で間に合ふのか無理も何せ遊んで居るから一緒に往つても宜いつて言ふせ　銅「ナアーこれ主一人で澤山だらう高が相手が二人だものう　來「夫じやア別に差支へねい……兄哥往つて來るからナと之から急ぎ銅八と共に熊谷堤へ登つてキッと向ふを見ると成程手下の知らせ通り御用金を負た馬に宰領が二人付いて往く　銅「ヲヽ那處へ往くのが御用金の馬子だ夫じやア財を追懸けるよりやア此の間道を廻り道を

して辻堂の處へ先を越し奴等を斬いて金子を取らう」と來太郎を促がし急ぎ足にて抜け道を廻り辻堂の處へ出ましたが馬子は未だ三町も後だ暫待合せて居る丁度其處を通り懸ました　銅「ヤイ待宰領……奴等ア此處を通す譯にやア往ねい　宰「何を小癪な事を吐しやアがるんでい天下の御用金を運ぶに通すも通さねいもあるもんか吾やア何だ此頃噂に聞やア熊谷堤は物騒で日の昼間でも追剝が出るといふ事だけれど夫じやア手前は追剝だな　來「追剝も蚤もあるもんかトットと渡て往やアがれ　宰「生意氣な事を惡吐アがるねいと宰領二人は刀を抜き連れ二人の賊を目蒐けて切り付けました　銅「ヤア憖々小癪な腕立をしやがる……サア兄哥引導渡して早く片付けて仕舞うと二人の賊も仝じく刀を引き抜いて烈しく渡り合ひましたけれど宰領もナカ〳〵腕は利いては居るものゝ如何せん賊の二人は剣道の達人にて大力無双の

容なれば迚も敵う理屈はない　宰「人殺し……人……人殺イ……」

銅「ヤイ〳〵　何をシタバタ仕やアがる獣つて成佛して仕舞やアがれと切り込む一刀……終に兩人の宰領は散なき最後を遂げました

來「銅八兄哥……上首尾〳〵　確かに之りやア千兩箱だ　銅「ソウよ斯う旨く往きやア泥棒も商法になると云ふもんだ……夫れじやア山分けにして五百兩ヅヽかな　來「千兩のものなら五百兩ヅヽだナア」と二人して何となく不足らしい事を云つて居る併し千兩のものを五百兩ヅヽ分けるに不思議はない話し處が銅八の心中を割つて見ると　銅「アヽ俺れ一人で仕事をしたなら此千兩は手つかず自分の物となつたらうが惜しい事にやア邪魔者が一人居た爲めに仕事を山分けにされて仕舞つたチョッ……殘念々々と頻りに後悔いたし來太郎の隙があつたら切り込んで一刀の下に殺して仕舞ひ千兩は俺が物にしやうと來太郎の樣子を伺が

つて居る全じ思ひの來太郎　來「エヽ銅八の野郎せい居なけりゃア俺が千兩奪つたものを野郎に邪魔を入れられた爲め半分別けの五百兩たア情けねい始末だ油斷があつたら殺して仕舞ひ千兩奪て無理と二人で高飛びをしやうと斯う考へて居る……實に金子が此世の敵とは克く言つたものであります夫れゆへ二人とも油斷と云ふものは更らにない後になり先きになり五百兩ヅヽ負擔いで參つたが隙を伺がひ來太郎道りすがしさを切つける銅八少しも油斷がない故　銅「俺れ來太郎先刻から手前の腹はチヤーンと讀めて居らア小癪な鼠似をしやがるナ此クタバリそこない奴」とダンビラを引き拔き渡り合ふ互ひに撓まぬ猛突戰一上一下と火花を散して戰かつたり……其内に如何はしけん一天俄かに搔くもりがッツリ〳〵と大粒の雨が降つて來たかと思ふとヒヨメキ渡る雷は物凄きばかりの有樣去れども此方の二人に於て

は身を的の勝負故雷が鳴らうが雨が降らうがモー斯うなつちゃア仕方がねい命を取るか取られる迄は遁る所まで遁らなくちゃアならねい其内にピン〳〵ッと烈しく稲妻が閃めくよと見る間にゴーロ〳〵ガラ〳〵ピシャン……と云ふ天地に響くは確かに落雷でございます銅八はウーンと云つて其場へノツケに仆れて仕舞つて來太郎は得たりや應と走り寄り差し殺さんとする處へ忽ち四方は雲に閉ぢられ一ッの火の玉飛び來ると見しが内より怪しき獸の來太郎に飛掛れば來太郎も一人の敵を仆して仕舞つて又一ッの敵を得ましたゆへ身体も非常に勞て仕舞つたが猶豫して居る暇合でない　來「俺れ怪物ぢゃんなれッ……と飛懸る奴を遁り遁ひにムンズと組付いたケレども怪物はナカ〳〵の力で迚も來太郎なぞの及ぶ處でない　來「此畜生奴馬鹿に力がありやアがらア……と投飛ばされながらも又引組んだ怪物は爪が鋭どいと見ゐて引組んで來る雷太郎を引掻きむしり一散に何處かへ逃げ去つた之は全たく雷獸と云ふ毛物でございましたの雷命の爲めに飛出して出たのである來太郎は危うき難を免れ傍はらを見まするとと銅八は雷にうたれて未だに其處に倒れて居る　來「エイ意氣地のねへ野郎だナア俺れにやア本物が飛付きやアがつたが何の事アねいのに雷が鳴るが早いか打倒れて仕舞やアがつて……と傍へ立寄つて見ると未だ何分か息は通つて居るが目ばかりパチクリ遁つて居て口は聞けねいんだ　來「ヤイ銅八何時まで斯うして居たつて苦痛を見るばかりだ俺が引導渡して遁るから往きていい處へ往きやアがれと及を取直してトヾメを差し千兩の金子を.奪ばつて銅八の家へと歸つて來た。無理「ヲヽ來太か……ベラボウに遲かつたから俺ア宜い心配して居た處よ此近所は方々へ雷樣がれ下りになつたノー　來「ホウ俺の頭へもれ下

觀音靈驗

りになつたし銅八の上へもれ下りになつたし夫れにより兄哥聞いて呉れ俺ア是れ迄雷様の本物ばかりやア見たことがねい全たく鬼が太鼓でも叩いて居るのが落ちたらうと思つて居るとドッコイなか〳〵其様れ手輕なもんぢやアねい俺も其獣物の爲めに危なく命を取られる處だつたが宜い塩梅に其奴が突走つて往て仕舞つたんで俺ア助かつたが銅八はトウ〳〵お陀佛よ」と跡は小聲にてヒッ〳〵今日の仕末を物語り　來「サア其様いふ譯で銅八の野郎を殺づけて見れば此處にも長居は出來ねい之から直に支度して攝け落と洒冷てもうと自分の思ふ處を語つた　無理「ム、夫様事で手間ア喰つて居たのか道理で大層遲いと案じて居たんだ……併しれ主がッウ早く片を附けて仕舞やアモー夫れ迄だと盧……無僧の姿と出扮ちまして熊ヶ谷を出立しましたが之から人は來太郎を呼ぶのに眞正直に來太郎と云ふ人は一人もない雷獣と闘

敵討雷太郎

かつた處から雷といふ字が付き仕舞には雷太郎〳〵と呼ばれるやうに相成りましたな

演者曰く之れ迄は來太郎にて口演しましたが爰に雷の字を取りて世の人が雷太郎と申します故演者も夫れを型にして之より雷太郎と改めて言上仕ります

エヽ之から雷太郎は無理太郎と共に夜に紛れ密かに熊ヶ谷を出立したけれど何を云ふにも惡事の重なる二人の者……殊には銅八は惡者とは云へと俠客一刀流の名人綾瀬權太左衛門の實弟故殺した以上は如何なる祟りがあらうも知れずと二人道を急いで下野地方へと走りました爰に下野國那須野が原に閻魔の庄兵衛といふ者がありまして之も全たく旅人を脅やかし或いは近在の豪家等へ押入つて金錢を奪ひ手下を聚めていづれも博奕をして居るなど惡いと云ふ惡い事は一ッとしてしない事はない雷太郎

等二人の者は世を忍ぶ身の上なれば昼の内は人目を憚かり夜道を急ぎ行く程に早くも那須野が原へと差し懸りました今じやア那須野といつても實に開けて居りますが其頃の原といつたら岬々と生ひ繁り何が棲で居るか殆んど分らない位ねだ「無理」何うだい嘯しにやア聞いて居たが此樣薄氣味の惡い處じやアねいと思つて居たけれど嘯しよりやア來て見た方が物騙らしい之れじやア嘯半分と云ふのも當にはならねい「雷」コーして夜道を歩行いて居るけれど思へば世間の奴等は、順なしい人間ばかりだナア此處いらは出るかと思つた處でも出ろうにもしねいが今夜は殊に依ると油斷がならねいぞ兄哥……と嘯し乍ら參ると案の定小山のやうな大男がノソリ〳〵と其處へ出て來た ×「ヤイ命知らずの椋鳥奴等世間の奴は順なしい人間ばかりだは克く出來た此處ア俺の縄張りで名代の那須野が原だ只じやア決して通れねへ

三途の川さい渡るにやア弘誓の船に乘らざア此處を通るにやア手形と思つて全裸体になり大小ぐるみそつくり此處へ置いて往け左もなけりやア刀の齒糞にして呉れんと狼の吠るが如き大聲で罵しりかくれば此方の二人は大に怒り 「雷」何を奴等が痩腕で大小ぐるみ置て往けもねいもんだ夫よりやア手前が持つてる懷中をソックリ此處へ差出し三遍廻つてチン〳〵すりやア命ばかりやア助けてやらア左もなけりやア覺悟をしろ首の用心でもするが宜いや 無理ねすつとの商賣は俺の親分の五右衛門此方奥儀は悉皆此方にあるんだ手前一人が巾を利かしやアがつて高慢ふつてる其面が飛んで往かねいやうに用心しろと雷太郎無理太郎刀を抜いて切り込んだり彼の大男は二人を相手に上段下段と斬り結び電光石火の早業は流石の雷太郎も舌を捲いて驚ろくゝら ゐ互ひに隙を懸け合ひ精神を勵まして油斷なく 無理「雷……決し

て馬鹿にやア出來ねいナカ〳〵手剛へ此野郎……雷無理太郎……汕斷するな心ろ得たか」と言葉を懸けては齒圍する彼の大男は兩人が詞を聞いて忙がはしく身をひるがへし。○「ヤア〳〵」兩人共曰らく待て……雷の名はトクより知れり無理太郎とは獄卒が事にあらずや如何に閻の夜とは云ひ乍ら我れ過まつたり〳〵斯く云ふ已は閻魔の庄兵衛なり」と大聲にて名乘りましたから無雷「扨は那須野の閻魔よな……之は〳〵」と斗り二人共及を鞘に收め纏がて火打石にて灯を燈し互ひに顏を見合せて其無事を祝し三人「アヽ危なかつた〳〵スンデの事に大事な命を殞す處だつた……」と先各自の無事を祝し之より三人連れ立つて閻魔の住家へと落付きましたが扨てされより如何相成りますか次席に申上げます

第六席

庄兵衛の方へ落付し雷太郎及び無理太郎の兩人にナニシロ惡事に懸けちやア庄兵衛抑の及ぶ所ろでない　雷「何だい庄兵衛の兄哥此頃ア隱張良い鳥も懸らねいから張り合がぬけたやうじやアねいか扨うして何だか厄介になつても景氣がいゝと勢みが付くけれど何も實入りがねいやうじやア俺ッちまで勢みが付かねいやノウ無理左樣じやアねへか　無理「夫りやア雷の云ふ通りだ云はゝ此方ア居候よ景氣が惡くちやア飯の喰ひ心も惡いやアナアツハヽヽヽ　庄「何を云ふかと思つたら詰らねい事を云ひ出したもんだナア仕事なんぞは幾らでもあらア出せいすりやア二人や三組の金子をせしめねいつて事アねいけれど俺も一ッ腹に大い巧みがあるので夫で控へて居るんだな心配しねいで其時に手で

も貸してれ呉んねい　雷「夫りやアモー手を貸す處じやアねい癩して明いてる身体だものう……　無理「シテ其大けい巧論ていナア何いふ事なんだか少許り聞かして呉んねい　庄「外じやアねいがモー大概手配りも附いたから夫じやア咄しましやうが……ナアーに言つて見りやア詰らねい事に愛の那須野の下に郷士でもつて川合宗太夫といふ豪家があるんだ之れ迄隨分手下の奴等が度々往ちやア遇りそくないイツも手敵損になつちまうんだが今度丁度兄哥たちが來たのを幸はひ殘らず斬いて仕舞つて根こそぎ金子を持つて來やうと思つてるんだ　雷「ウムー那の郷士の家かアッハヽヽヽヽ　庄「何が可笑だ雷……俺の云ふ事な不足でもあるか　雷「イヤ兄哥左様憤怒にならねいで呉れ何を隠さう俺もアー那處の家は手附けに一寸嘗めて見た　庄「ナニモー先を越したのか其奴は何もれ手廻しだつた　雷「全体俺もモー一遍那

處へは往つて見てアノ別嬪の女房を抱癪をして見ていと思ふんだから思ひ立つたが吉日今夜直ぐに出懸けて往こうじやアねいか　無理「又雷の病氣が始まつたな女せい見りやア直に抱癪をする事ばかり考がへて居やがつて仕末の終ねい奴だナア　雷「左様マアア笑つて呉れるな若い時きやア二度とありやアしめいマア〳〵大目に見て置いて呉れ……左様して今夜は無理と二人で庄兵衛の兄哥へお土産に川合の千兩箱を搗がして來やうじやアねいか無理「夫れも宜いなア……夫じやア庄兵衛の兄哥斯うしやう今夜は下手丈け借りて俺等二人で遣つて見やうが若し仕損じたら敵を取つて貰ひましよう其の縁り手下の者は荷物を負つて來るのに借りて往ざアならねい　庄「宜とも〳〵夫れじやア滅とに濟まねいが二人の兄哥に頼もうか知らん　雷「無「ヨシ〳〵承知した……ヒソコで充分用意を整のへ其晩は手下の者十五六人を引き連れ

觀音靈驗

川合の家を差して參りました、ナニシロ鄉士とも云はれる程の家柄でありますから中々用心も嚴重であります　雷「兄哥〳〵此處に見越しの松があちア此處から上つて往つて塀を乘り越し裏門の木戸を明けさせて中へ入りやア譯はねへやナ　無「成程夫れが宜からう……と手下の者一同を裏木戸から忍ばせ三人ばかり見張りとして門の外に待つて居る外の者一同は雨戸を外し中へ這入つて家内の者一統を縛り上げ主人宗太夫を案内として倉庫へ連れ行き金銀の數々悉く奪ひ取り手下の者共殘らずに背負る丈け背負して歸らうとする、雷太郎は金錢に望みがあつて押入たのセやアない全たく宗太夫の女房お富といふのに懸想し此女を奪つて行からと思ふんですから最前より二間に於てサヤ〳〵に口說いて居る　雷「れ前の樣にソー剛情を張るもんじやねいや俺が所うして漸々の思ひで押込みに來たのもれ前が可愛いばつかりだ……ナンと眞實があるじやアねいかウンと云ひねい、エーッイ……ウンと云ひねいナ　富「アレ其樣忌やらしい……寧ろ私しを殺してなりと夫の繩目を解いて下さいましれ情けでございますす拜みます〳〵　雷「コレ〳〵左樣グッ〳〵云つたつて仕方がねいや殺ら泣いたつて吐たつて逃げたつて逃られやしねいやナ……エヽ夫れ程亭主が戀しいんなら斯うして呉れるとッ……と次の間に居た宗太夫を怒りに任せて斬り殺す　富「俺れ泥棒……克くも夫を殺したな……汚らはしい誰が手前達の云ふ事に從がうものか殺さば殺せ生きかはり死に代り恨みを晴らさずには置ないぞ」とハッタと雷太郎を睨み付けた　雷「小癪な事を吐しやアがるナ……と突然れ富を荒繩にて縛り上げ無理太郎に何か密話き已れはれ富を引搦ぎ山奥を差して參ります無理太郎は手下の者一同を差圖して目星しい者は搦げる丈け搦がせ庄兵衛の住家

へと立帰る雷太郎は只一人山中へ女を連れ行き又サマ〳〵に言葉を盡し必に從がへんと致しますけれども真操な女ゆへナカ〳〵雷太郎の云ふ事を聞きませんばかりでなく酔の限り泣き叫び富「夫を殺されヲメ〳〵と仇樂しみに世の中を送らんサア泥棒殺すなら殺せ何時か報ひは眼面だぞ……」と悪口を申すものだから雷太郎もグッと癪にさはつて仕舞つたケレども素々惚れて居る女の事故何か旨して望みを遂げたいと種々に慰さめましたが聞き入れゝばこそソコで全裸体に致し大木に縛りつけて無躰に冒されゝと致したれ富は無念の歯噛をし　富「エヽ恨めしや無理非道の盗人奴、何んで肌身を汚されうかと突然肩先きへ喰ひついた雷「ウヌ喰ひ付いたな……とムラ〳〵ッと怒りし顔色凄ましくエヽ可愛さ余つて憎さが百倍……と二尺八寸の山刀を抜き放し咽喉を見苛けて扶りましたが今まで花の如き顔ばせも忽ち悪鬼

の如く眼の玉は飛び出して髪は逆立ちて身の毛もヨ立つばかりである無慈悲なる雷太郎はセヽラ笑ひ　雷「何だ苦しいか……エヽ苦しからうがナ……と反す刀にて胸元を刺し通したからモー女も耐りませんガックリ往生をして仕舞う其時後ろにアッと叫ぶ聲がする……不思議に思つて雷太郎は振り廻つて見舞ると最前手に捕けたる宗太夫の亡魂幻の如くに付き纏ひ恐ろしき顔をして雷太郎を睨み付けて居る去れども大勝不敵なる雷太郎の事なれば此様ことでは更に驚ろかない振り向きざまに横へ拂うと手堪へが致して姿は其儘見ねなくなりました　雷「エヽ何だ馬鹿〳〵しい驚ろかしやアがらア……と一刀を鞘に納め悠々として此場を立去りしが爰に一ツの不思議なれ咄しがあります此川合宗太夫の家に忠介といふ一人の小僕がありましたが兩親にも先き立たれたる事故宗太夫夫婦の者も目を懸けて召使ひまするで獨

子の様に思つて忠介を不憫がつて居るマダ年齢は漸やく十三であるけれど實に生れ付き賢こくして聡明なものだ丁度此晩も泥棒が這入つたといふので其物音に驚ろき目を醒したけれど外の者みたいにブル〳〵顫ゐて腰を抜かすやうな事はしないで庭に大きな釜があります物だから其内へ密つて這入り蓋を捧げて彼等の様子を伺がつて居ると其内に鎮まつた忠介は何か心に頷づきながら今度はソッと釜の中から這い出てゝ見れば無惨や主人は殺されて居た　忠「己れ盗賊奴主人の敵といふは彼等の中に居るだらう何れにせよ跡を迹て楼家を探し出し官所へ訴へて敵を取らなくちやアならねいと夫から蹌も身体へ繃ひ乞食のやうな姿になつて大勢のあとを一丁程放れ附けて行くと那須野ヶ原の脇道より山の中へ這入つて何處へ往つたか一同の姿を見失なつた　忠「ハテ不思議な事もあるものだ確かに此處は一

筋道外に往く處はないのだに大勢の者を見紛るといふ事はない筈だ」と谷の水音を便りに辿り行くと主人宗太夫の姿が忽然と往く先きへ顔はれました大抵のものならばアッと云つて其處へ尻餅を付いて仕舞うのでございますけれどソコは氣丈忠介小供ながらも主人の敵を討ちたい精神であります故　忠「南無阿彌陀佛〳〵と唱へ乍ら跡へ附いて行く艘て十四五丁も往つたと思ふ頃擔ぎ傾ぎし家の前へ出たト見ると主人宗太夫の亡魂は左も嬉しげに笑ひ指を指してソコだ〳〵と云はぬ斗りに歌へて居る　忠「確かに之れが今の盗賊の楼家に相違ないと門の間から覗いて見ますると荷物を却したりして手下の者がガヤ〳〵云つて居る中に無理太郎の姿と云ふものは平顔の赤つ面と來て居るから一目見ても誰にでも分かる顔だ　忠「アヽ那の怖い顔の人は今來た中の頭らしかつたがモー此處と定れば今に敵きを取つて遣

るから慎へて居ろ」と立歸らうとしたが不圖思ひ當つた事がある
と見て来た道へ取つて歸し門へ「いろは」の三字を泥にて認ため
其儘其處を立去つたが又もや宗太夫の妻はが顯はれ先きに立つ
て山の入口まで送つて來て妻はパッタリ見えなくなりました忠
介は暫らく合掌して唱名致し氣を取直して家へ歸りました、デ夜
の明けるを待受けて直に處の代官所へ訴たへ出でシカ〳〵カク
〳〵と委しく昨夜の始末を述べ樓家の門へいろはの三字が目標
の爲め認ためてあるといふ事をも證據の爲めに申述べました夫
れ故上でも兼てより那須野ヶ原の盜賊には目を付けて居た事
故早速捕手の者を庄兵衛の住家へと差し向けられた其日は生憎
に無理太郎雷太郎をはじめ多くの手下の者も仕事に出て居たも
んだから鬼神を欺むく庄兵衛をも迚も叶う譯のものでない全た
く運命の盡き終に繩を懸けられ引き立られましたがナニヤ今

迚何十人となく人を惱ましたる天罰が一度に身に降り懸つて來る
事故堪らない引き廻しの上獄門に曝されました……仕事先きの
雷太郎並びに無理太郎は手下の者共より庄兵衛の樓家へお手が
這入つて庄兵衛は繩に懸つたと云ふ事を聞き吃驚仰天した……
と云ふのは若しや庄兵衛が自分達の事を白狀でも仕やアしない
かモシ白狀された日にやア今にも追手が懸るかも知れないと驚
ろくのも無理はないのであります　雷「何だい兄哥イッ迄此處に
グヅ〳〵して居たつて最早仕方がねい下手をまごつきやア御用
の聲を聞かなけりやアならねいがソイッも余まり下さらねい事
そ如何だい外に仕方もないから庄兵衛の兄哥にやア濟まねいけ
れど之から二人で瞞德寺を極めてまうじやアねいか夫にしても
二人で此儘逃げちやア何せ分るにやア極つて居らア夫れよりか
アれ主と二人はべつ〳〵になつて往く先きで何處か落ち合うと

云ふやうな事にして置たら如何だらう　無理「夫れも面白い相談だナヨは兎もあれ斯うして居ちやア如何にも危やいや……然なら雷お主から先きへ一先づ此處を立退くが宜からう　雷「左樣か夫れぢやア左樣と極めて一足先きへ御免を蒙むらうが行く先は秩父迄で何處か待合せるから……　無理「宜し〳〵　合点だッ……之から雷太郎は相談の上妻を換へて只一人無理太郎と別れました無理太郎に於きましても最早猶豫する場合でないと手下の者にも失れ〳〵再會を期して別れを告げ已れは面体を山奏卸しにて指り崩し恰かも癲病の人みたいに姿を換へ頭を剃つて旅僧の樣に相成り雷太郎と道を換へて逃げ去つた併し出家の樣になつては法衣といふものが看板だ幾ら何でも法衣を着て居なかつたら頭ばかり剃つて居ても出家とは見ねない　無理「何しても此姿だじやア下旨いや夜になつたら何處か寺へでも這入つて坊主をアア殺し

法衣丈も落換へて往きたいもんだと其日は十里ばかりの道を來たが扨何を云ふにも登間は如何にも危險で往來は出來ませんから夜になつてイツも歩行と云ふ事に極めて居る丁度二日目の夜でございます或る村外れへ差じ懸ると其處に辻堂がある軒は傾むき屋根抜も頽れて居るが確かに堂守は居るらしい暫らく樣子を窺がつて居るとカスカに灯が戸の空隙を洩れて見ねます其内にボク〳〵木魚を叩き出した　無理「ハテ時を厭はねいで經なぞを讀む坊主だなアモー之れ夜も更けて來るし今時分讀經するなんて正逆幾ら早いからつて夜明けの看經でもあるめい夫とも今つから寒るんで本尊樣の前で寐言でも言つて居るんかしらん何にしても搗う事はねい飛び込んで坊主を叩きアて遣れ」と突然戸を蹴放して内へ躍り込んだ坊主は吃驚して　坊「お前は誰でい貴賓乞寺へ押込みに這入つたんで見込やアありやアしねい……と云

ひ乍らハヤがた〳〵と頭へて居る無理「ナニ己を泥棒だと泥棒な
ら泥棒でも宜いが何も金を欲しいのれ供物を搗き山そうのツて
云ふんじやアねい外に欲はねいんだ只手前の命が欲しい斗りだ
坊「エヽッ……無理「何さ其様に慌ろく事アねいや何せ一度死にや
ア二度たア死なねい此様な處にクスブリ込で居て粟の飯や稗の飯
で腹の虫を抑へて居るよりやア寧そ一思ひに殺して遣るから地
獄へ往くとも極楽へ往くとも勝手な處へ往つて見ろ土地柄も目
先きも變つて飛んだ宜い處だソウだから　坊「何ぞ命ばかりはれ
助け下さいなし命あつての物種です命がなけりやア飯も喰へな
せん南無御本尊様此様いふ時の御身代り何卒お願ひ申ます……
アレー……人……人殺し……人殺し……無理「此乞食坊主奴ヂタ
バタしやアがるねいと厄手でムヅと首をアたから堪らない大力
無双の無理太郎にアじめ付られちやア息の通う筈もねい　坊「ウ……

ウムー……と目を白黒やつて終々ガックリ往生して仕舞ひまし
た無理「エヽ脆い奴だ……と捲き付けて居た帯を解いて法衣を脱
がせ赤裸体にして死骸を其處へ轉がして置き手早く夫れを着換
へて此場を立去る處へ道か彼方に大勢の人聲が致します　無理
南無三寶……見付けられては一大事殊には追手の者かも知れず
も周章狼狽く表へ出て見ると松火は天を焦す如くにして手に〳〵
竹槍抔を持つて居るらしく人數三十人ばかり辻堂を目懸け押寄
せて參りました益々慌ろく無理太郎裏道傳ひに道なき處も搏は
ばころ身一ツでもつて逃去つたが余まり周章て自分の手荷物の
古葛籠から頭に載たく菅笠までも忘れて居つて仕舞ひました處
へドヤ〳〵と大勢の人數が辻堂へ來た　○「淨念さん今夜は大分
遲かつたが何時の粥はモー出來て居るけい、ヲイ淨念さん……之
りやアいケ不審ぞい……ヲヤ素裸体で寐て居らア戯談じやアね

い幾ら寒くねいッたつて最早之れ今に冬になりアとヅカ〜
がつて側へ往つて見て　○「ヤア之りやア大變だヲッ死んでらア
大方夫れぢやア泥棒か何かに遭られたにやア違ひねい可愛想に
なア……之れぢやア今夜の兵糧はおジャンだ……一同の者も大
いに落ろき之から村へ引き返そうとすると身の丈け抜群する一
人の大男が松の根方へ腰を掛け外に三人の者を從がへて煙艸を
燻らせて居る　一同「ヲヽ茂右衛門どん大方此泥棒らがした業にや
ア違ひねい淨念坊主の仇だからうべい　○「夫れが宜かんべい夫
れ遣つちまへと一同の者が噪ぎ立てました

第七席

れ咄しは少々後へ戻りますが爰に彼の萬屋龜次郎に於きましては雷太郎の爲め父と姉との二人とも死に失せましたから口惜しさ無念さ實に寢ても眠られぬ程でありますが左樣右樣する内にモし之れ姉の百ケ日も濟みましたから或日龜次郎は武兵術に向ひ龜「私は商人の家へ産れ根が此通り虚弱な性質だから父上の仇を討つなどゝ云ふ事は出來ないがも知れないけれど一心凝つては石に立つ矢の試しもありどが云ふ位ひ……アノ雷太郎の爲め父上は素より姉上までも自害なされたは實に殘念千萬モー少し私も劍術でも出來れば明日が日からも直に仇討に出るけれど未だ之れホンの竹刀の持ち樣を覺えたが覺えぬ位ゐ之より玉川の綾瀬さんに頼み申して暫らく劍術の稽古をしやうと思ふから今日は一寸往つて頼んで來る店の處は克く頼氣を注けて居てれ呉れ　武「ヘエ其儀は御心配下さいますな大旦那のれ影で漸やく商賣の道丈は如何なり斯樣なり覺えましたが只今れ咄しのアノ

仇討……と四邊を見廻し聲を密め……其討仇も速より思はぬでは御ざいませんが未だ之れお嬢樣の百ケ日も經過ない內に彼是申上るのも罰なものと實は遠慮申して居りましたが貴郎から左樣仰しやれば何卒已もれ供が願ひたう御ざいますだが悲しいかな今まで算盤玉で育つた人間竹刀の持ちやうも知りませんから玉川の親分の處へ出でなさるなら何卒已しもお連れ下すつて共に仇討をれ願ひ申たう御ざいます此機は偏へにお聞濟を願はしう存じます」龜次郎は武兵衛の一言を聞いて涙を流し「ヲヽ武兵衛克く云つて呉れた夫れ丈の言葉で父への恩返しは足りて居るが爰は一ッ考がへものだれ前が此家を出た日には跡は全然暗全樣母樣はアノ通ひ頭を丸めて仕舞ひ旦夕れ念佛ばかり申して居るから家の事は構やアしない夫處をお前が出て仕舞つては何して家が立つものか……俺は暫らく出て居つたつてお前せい

居れば安心だが二人一緒に出て仕舞やア跡の始末に困る何卒れ前は此店に居て呉れる樣にコリヤア俺の頼みだ父上へはれ前の志ろざしは充分届いて居るから……と龜次郎は武兵衛の出立を止めまする武兵衛は之を聞きサマ〳〵に言葉を盡して龜次郎に頼みまするものだから「龜夫じやア御うしやう俺も今日綾瀬さんへ往こうと思ふが葛飾の大之進樣にも相談して何か宜い工夫があるかも知れないゆへ御意見次第に任せやうじやアないかと綾瀬へ往くのは二三日先きへ送り其日は武兵衛と共に葛飾へ往つて高野大之進に此事を咄しまし[illegible]スルと悴の大之亟は此咄しを聞き「大之亟「父上夫りやア龜次郎さんの云ふ處も武兵衛さんの云ふ處も何方も一理あること就ては俺も乘々申上げて置いた通り眞文右衛門の敵討に出たいと思つて居た程だから二人の思ひ立つたのを幸ひに之から綾瀬さんの處へ往つて御相談申し三人

一緒に出掛けるやうな事にしましやう夫れで跡の處は隅田の茂太夫様に萬事後見を頼んで一時商賣は休むといふ事にしたら如何なものでしやう之れが商賣を止めちやア暮せないと云ふ譯ぢやアなしずるから左様したら何なものですねい　大之進「成程夫れも宜かちう今茲でアヽして二人が爭そつて居た處で仕様がなしするから左様した方が宜からうよヲー龜さん悔もアヽして往くのなら一緒に自分も敵打に出掛たいと云つて居るんだから狂げと之りやア武兵衛どんもれ連れなすつた方が宜でございましやう　龜「イヤ段々のお咄しで俺も皆様の御意見に從がひます左様なれば之から綾瀬さんへ伺がつて又克く御意見をも聞き劍術の處も御教導を願ひましやう　大之進「左様れ咄しが極れば俺も綾瀬さんの處へ參りましやう……又何なれ咄しがあるやら計られないから……と今度は三人で綾瀬樓水左衛門の處へ參りました

樓「イヤお三人お揃ひで克くでざらしやつたヲ　龜「誠とに其後は御無沙汰を申上ました速に伺がはなくてはなりませんでしたが遂々手前の用事をばかり搬つてれ伺がひも申ませんで申譯けもございません」大之進「武兵衛も夫々挨拶が濟んで　龜「扨今日伺がひましたのも實は少々仔細のある事でと之よりして只今申述べましたる敵討のれ咄しを致しサア何しろ左様いふ譯でございますから敵討ちに出掛りやア素より命はないものと覺悟しなくちやアなりませんが何を云ふにも劍道未熟の者でございますゆへ暫時の間修業をいたし夫から後に發足を致したう存じます」委細の咄しを聞き及んだる樓太左衛門流石は義心に厚きものである樓「ナニシテも夫りやア殊勝の至りだが茲で一年や二年三年人が修業した處で武兵衛どんなどは未だ刀の拔き様も知るまいと失禮ながら俺は思ふんだ、處で仇は如何いふ者かと云ふと云ふ

と雷太郎は知つての通り浪人者の果なる吾妻國次の倅ではあるし劍術は頗ぶる達人殊に兄弟分なる獄卒の無理太郎といふものがある此奴もナカ〳〵腕節の勝れた奴だから迚も此處で三人がチツとやツツとの間だ習らつたつてもし彼等には到底及ばないと云ふのは鏡に掛けて見るやうなものだ夫よりか斯樣いたうは實は俺にも一人弟があつたがナニシロ弟と云ふも名ばかりで如何にも心の克くない奴だから兄弟の縁を切り勘當して仕舞つたなれど此頃人の噂さに聞くにやア熊谷堤で雷太郎に殺されたと云ふ事併し之りやア表立つた咄しではないが殺されて見りやア肉身の愛と云ふ事もあるに因り俺は其前達三人に助太刀をするといふ名目にして出立を致そう左樣して首尾克く本望を遂げりやア俺の爲めにも自然弟の敵を打つやうなもの此儀は如何でござらう　三人「左樣願はれさすれば之に越した事はござんせん何卒何分願ひます　權「ダガ隅田の茂太夫さんにも此處のところは克く御相談なさるが宜いねい　龜「夫りやアモー御咄しの次第を申聞かせりやア如何んなに悅こびますか知れません　武「處で綾瀨の旦那さま俺は一ツのお願ひがございます　權「ホヽー又改たつて何か用かな　武「イエ外ではございませんが此二人樣は劍術の御心得もございますけれど俺は何を申すにも商賣の中で育ちましたものですから……　權「劍術を敎へて呉れと申すのか　武「如何にも左樣でございます　權「ヨシ〳〵　夫りやア俺が承知いたしたダガナカ〳〵十日や二十日で覺えられるもんでもなしするから……　夫れぢやア斯樣致ろう外に詮方がない突の一手を敎へやう　武「夫れならば十日か二十日で覺えられますか　權「正逆左樣も往くまいけれど五十日も遣つたなら筋方こなれも付くだろう　武「夫じやア何うか左樣願ひたうムい升が旦那樣や葛飾の若

旦那樣其間た仇討の御發足を御延し下さる譯に參りませしやうか

龜、大「夫れやア待つもなんにも……左樣すれば其間俺等も御敬導を願うから俺等二人には必暇なく、修業を致すやうにするが宜からう　武「左樣なれば何か卜願ひ申すと之から三人共に綾瀬先生を師と仰ぎ五十日を期して劍術を勵んだがナニを申すにも一心凝つたる人々の事とて僅か五十日の稽古といふものが丁度人の一年遣つたのにも優る位ひである武兵術も充分突の一手は熟練もせず龜次郎も殊によると此一手でもつて負けを取る事もある樣太左衛門も先づ此分ならば宜からうと見留めを付け愈々門出をいたす事に相成つたがナニを云ふにも晴れて敵討が出來なければ往かんといふので領主へ訴へたへ敵討の免狀を得萬屋の家は牛島茂太夫に后見を賴み四人等しく出立いたし之より雷太郎の跡を慕つて野州那須野ケ原へと趣ひきました處が前席にも述べ

ました通り四方見渡しの附かぬ位ゐ渺茫たる廣野でございますから此處に雷太郎等が樓家を搜へて居るかと云ふ事は解らない樣「何うも斯うふ處へ出喰しちやア仕方がねい片ッ端から卿を分けて尋ねやア（ア）ゝ云ふ兒者だから惡黨仲間の處に潛んで居ないとも限らないが殊によつたら此原の中に人知れず巢窟を搜へて居ないとも限らない　龜「夫じやア是から卿を分けても尋ねましやう、チー大之亟どの　大「如何にも夫が宜しうございらう；……とソコで原中で一夜を明します夜も段々更けて彼是丑三ッ近くに及ぶ頃はひ遙か彼方に當つて狼が一匹ウオーッと吠へた樣太左衛門は耳を引立て　樣「今のは確かに狼の友を呼ぶ聲に違ひないが殊に由つたら今夜ならは淨山寄つて來るかも知れないと只一人胸中に考へがへてた外の三人は何が狼の遠吠へだかソンな事は知らないスルと其中にヂキ俺等の近くで一匹の狼以前に增

して凄まじくオウーッと一聲吠へましたから今度は皆なも氣が付いた一同「何だらう今吠へたのは犬にしちやア余まり凄まじすぎるし正逆に牛が吠るのではなからうが……」權太左衛門はカラ〳〵と笑つた　權「ヲイ〳〵一同の衆ソンな態無な事を云つてちやアこまるぜ今のは狼の吠へたんだ　龜「夫じやア此邊にも狼が居ますかネー　權「冗談を云つちやア困るぜ……居ますかねい處にやアねいモー一町ばかりの處へ來て居て此方の油斷を覗がつて居るんだ油斷せいありやア飛懸つて喰殺そうと思つて居るんだが今吠へたばかりじやアない先刻も一聲遠吠へたから今に澤山寄つて來るだらうと實ア待つて居たんだ　一同「惡い物を御待受けですねい……ガ油斷は出來ないと三人の者は身仕度を充分に致し敵にでも廻り合つたやうな心持で一刀の目釘を示しイザや來れと待受けたり處へ飛び出したる一匹の狼眼は百錬鋭の如く

紅の舌は炎を吐くかと怪しまる　武「ソラ出たぞ畜生奴と衆て覺ねた矣の一手で狼の横腹を目懸け突き出す一刀をヒラリ体を避したるが　狼「ナニ小癪な矣の一手位ゐで俺の身体及へ物が立つか」とも何とも云はないで又武兵衛に飛懸りました　武「俺れッ……と云つて再たび突き出す修練の一手は誤またず狼の脇腹へグサッと刺した其内に狼は友達が一匹殺られましたから跳れもウオー〳〵と吠へて十五六匹飛び出した　權「サア來たぞ〳〵三人で皆な是を退治て仕舞へ俺が此處で勝負を見物するからッ……と傍はらの石へ腰打懸け三人で十五六匹の狼を相手に闘かふ有樣を見分して居る……狼も恐はい人は能く知つて居ると見て最初一番弱い武兵衛に飛懸つたが今度は又權太左衛門の處へは一匹も飛懸らない暇たりもせず見て居たる權太左衛門は危險と思ふ者へは氣合を懸け詞の助太刀をして居るがナニシロ來

觀音靈驗

だ疲れも充分の腕前ではありませんから較ともすると危ないので自分の身を守るのみ四五匹の狼を退治た斗りでモー充分勞れて仕舞つたスルと又十匹ばかりの狼がウオーッと云ふかと思ふとダコへ加勢に飛び出したニヤリ〳〵と笑つて居たる權太左衛門も加勢の一隊が繰り込んで來たから迚も此分じやア三人では覺束ないと見て取つた　權「ヤア三人の衆一分勞れたらしい俺が一人で此位のは退治て仕舞うから此方へ來て休息なせい大丈夫狼は此處へは來ねいから」と鐵扇を携さへ飛び込んだり夫れを機會に龜次郎大之亟武兵衛の三人は後ろへ退ぞき石の處へ來て勝負を見て居ると權太左衛門は力抜は抜ない前後左右から飛付いて來る狼を或ひい蹴倒し張り倒し瞬たく間だに十二三匹ばかり其場へ投殺して仕舞つた　權「サア畜生何匹でも出て來いと益々勇氣を振つて狼へ手が觸つたかと思へば直に投殺して仕舞うん

ですから全で子供を相手にするやうなものだスルと其内で狼の隊長とも云ふべき一匹がウオーッと長吠へいたすとり殘の狼十匹ばかり順を乱さずに卿を分けて逃げ去つた……之れは大方迚もアノ人が出ちやア勝負は叶はないから一先づ引揚げろといふ号號なのでございましやう三人の者ホッと一息を吐いて死んだる狼の傍へ行つて見ると孰れも狼の目玉が飛びくり出て居るのもあるし臓腑の出て死んで居るのもあるから三人の者は權太左衛門の怪勇に慄ろき益々頼母敷思ひましたソコで一夜を其處に明しまして明る日は充分に那須野ヶ原を探ると四五日前に閻魔庄兵衛といふ盗賊の首領が取押へられたといふ事を聞き及びまして夫れに其樓家といふのも再たび盗賊共の爲めに樓む事の出來ない樣にと火を懸けて燒き立たといふ事を承知したので　權夫では雷太郎此處かに潜んで居たのに相違ないが庄兵衛と云ふ

觀音靈驗

のが召縛られた時に甘く細目を免れて逃延びたのに違ひない」と夫とはなしに樣子を探と何でも奥州地方へは往かないらしいデ再たび跡へ取つて歸し夜中乍らも參つたのが前席に申上たる彼の辻堂であります　樞「外に宿る處もなしするから切て今夜は此辻堂の軒下を借り一夜を明ろう　三人「夫が宜しうございませうと辻堂を指して參らうとすると今向ふの道よりして百姓三十人ばかり手に松明を振り照し竹槍を携さへて是又全じく辻堂の方へ靜々と參ります　樞「是は不審な事があるもんだ正逆に百姓一揆でもあるまいがッと暫らく此方は差し扣へ松の根方に腰懸けて樣子如何にと伺がひ居たりスルと何だか一同の者共ガヤ〳〵噪いで今度は自分達の方へと參つたが別に何も惡い事をしたでは なしするから悠々として居る癪ての事に同勢が樞太左衛門初め外二人をグルリと取圍んで仕舞つた　×「ヤア畜生人殺し奴……

一人殘らず打き殺して仕舞へとアワヤ打つて懸らんと致す四人の者も大いに驚ろき　樞「各々夫れは人違ひでござらう如何なる事情かは知らないが狙りにれ前違に打殺される譯も無けりやア又人殺しなどをした覺ねはねい大方夫りやア人違ひであらう　○「何を吐しやアがるんでい物騷な一本半分差して居て大方其奴を引こ欲いて坊主を威脅たんたらうがナカ〳〵　那の坊主は承知しねいから夫れで殺したにやア違へねい可愛そうに那も科もねいものを殺ろすッて云ふ法があるかサア坊主の敵だ此竹槍で突き殺すから覺悟しやがれと又大勢の者立噪ぎアハヤ四人の者は田樂差しにされやうとしたが果して此場の納まりは如何相成りまするか之れより迫々佳境に進むの件り次席のお樂しみと致しやう……

第八席

此方は四人の者更に百姓達の云ふ事は何が何やら譯が解らないケレども素より無罪でわるかろく處はなく　樵「ヤア百姓奴等何を噪いで居やアがる能く聞け吾等四人は武者修業の者一昨夜は那須野ヶ原に於て三十四足らずの猴を退治て來た他達だ猴は殺し、たが人を殺したなんぞといふのは無耳に水だ殊に坊主を殺したなんぞとは何を證據に云ひ掛りを謂んだヤア其證據を見せろ、サア何だ夫れでも人殺しだと飽まで剛情を云ひ張るかとカッと晩らんだ樵太左衛門一刀のソリを打たして寄りなば切らんと身搦へたり百姓達もコリ云はれて見りやア別に證據のあるの譯でもなしするから少しく尻込を致した其時一人頭立つたる者が進み出で　甲「是はれ侍樵賊とに飛んだ人違へを申上て相濟

みませんが何をれ隠し申ましやう實は他等は此邊に猴が出て作物を荒らしますから夫れを退治やうと斯して大勢揃つて猴狩に出掛けましたが例日も此辻堂の堂守は至つて愚意でありますので夜中になると腹が減つて來るから中食に此處で粟の粥を炊て貰ひ腹をこしらへる約束になつて居ますデ今夜も其通り盛つて見ると無體にも其坊主は赤裸体にされて死んで居る大方是りやア善くねい奴が來て法衣でも剝いて其上へ殺し坊主の臍繰金でも盜んで往つたものと鑒定しますが貴郎方が丁度斯して居なさるもんだから終々疑がひまして飛んだ無禮を申上たやうな譯……何卒惡しからず思し召し下され失禮の段は幾重にも御詫を申上まする丁寧に述ました樵太左衛門もこで漸やく譯が解つた　樵「ア、成程左樣いふ譯であつたのか夫れとは少しも知らなかつたが何しても氣の毒千万の事と之より百姓一同を進

れ立ち辻堂へ往つて見ると成程坊主が一人裸体のまゝ死んで居る權太左衛門は死骸の側へ立寄り改めて見ると未だ死んでから一時余も經つ位ゐのものだ夫に何分か未だ胸尾に温たみがありますゆへ生き還らんとも限らないソコで武術の奥儀を以て觀切に介抱しヤツと氣合を掛けて活を入れますと　坊「ウーン……といつて息を吹き返した　權「コリヤ坊主氣を確かに持て……

坊「ハ……ハイ……と云ひ乍らキヨロ〳〵四邊を見て居ると不見不知の侍が四人に跡は村の者が大勢居る　甲「ヲー淨念さん氣が付いたけい　坊「ハイ有難ございます……モー確かでございます……ハイ〳〵有難う存じます……ヱヽ怖ろしい坊主だと一体れ前何して裸体にされて殺されたんでいい寶は此旦那方が疑ぐりを受けて御迷惑をして居るんだ包ます……を咄しねい淨念さん　坊「ハイ實はモー貴郎方が御約束の御中

食時分だと思つて弱の仕度をして御念佛を申して居りますと大坊主が面つて言へば赤く爛れてる奴が突然戸を蹴破つて中へ這入り金も何も取りに來たんぢやアねい命を貰ひに來たんだと抽倒して咽喉をゞられ夫から後は一才無裏でございましたが……モシ〳〵旦那拙僧ア地獄廻りをして參りました　甲「夫りやア何しても飛だ事だつたノ　坊「夫れからヂマア聞いて下せい皆さん……氣がウーンと遠くなると斯う段々暗い處へ這入るやうな氣がして來て恐ろしい深い井戸へでも落ちた樣にヅーッと足がすくんで來たスルと其處に三途の川と木標が立つて居て赤鬼と青鬼が船頭になつて俺を渡しに乘して呉れましたが……ハイナニ乘合はございませんでしたが向ふを見まするとと恐ろしい光る灯が付いて居てトゲ〳〵した物のある高い山です、ソコで赤鬼に聞いて見舛るとアレは娑婆に居る時にも聞たらうが針の山といふ

名代の山だ……ヘエ成程針の山……處で那の光る灯はと申すとアレは此頃發明になつた電氣燈だと云ふ事ですが地獄も余程開けましたよ夫に御覽なさい三途の川邊りにや亡者會社の頓惱丸などゝ云ふ蒸船が百艘もわつて始終通つて居ますけれど亡者でも馬鹿に出來ない葬式會社だのは中々盛んのものでモー社長の閻魔大王などは妾の二十人からもあるといふ云ふ事……ソレで妾が云ふ事を聞かないと手前達はモー婆婆へ返すぞと云ひますと就れも慄へ上つて仕舞ふそうです……ヘエ夫に鐵道は開ける電信は慰る……

甲「ヲイ〳〵 淨念さん冗談云つちやア往かねい地獄の咄しを聞きに來たんぢやアねいよ此處に居る旦那方がれ前を殺したらうといふ冤の罪を受けたから此旦那でねいとかあるとか明りを立てなくちやア仕樣がねいやな

坊「ナーニ坊ちゃん旦那は地獄の里にやア居りません……夫から三途の川の中程

迄參りますとヲーイ坊主氣を確かにしろーと云ふ聲が聞えたもんですから赤鬼と青鬼は吃驚して艜を押す拍子にドンブと船が沈んで仕舞つた

櫂「ヲイ〳〵 坊主戯言を申すな拙者共は一同の者より貴樣を殺したらうと云ふ嫌疑を受けて居るんだ如何なる者が殺したが氣を確かにして一同の者に申聞せろ

坊「ヘイ〳〵……モマ少しでございますから一寸只今の申續きを……

甲「モー宜いといふ事よ……夫では全たく此旦那方が手前の咽喉をアたんぢやアねーな

坊「左樣です……船が轉覆返るかと思ふと矢張り此處へ戻つて來て皆樣が御介抱下すつたんだ

甲「アレ……未アレだ淨念さん戯言にも大概にするが宜い

坊「ア、若し〳〵俺が惡かつた遂珍らしい咄しだから聞かせやうと思つて夫が却つて仇となる……確かりした處を申します全たく拙僧をアー殺したのは只今も申す通り丈は拔群の大男で頭はクリ〳〵 坊主にな

り面体は赤く爛れて癩病やみの様でありますが其奴が突如道入つて來て〆殺ましたので夫に違ひはありません　櫓「フム！全たく夫れに違ひはねいナ　坊「如何にも左様でございます偽はりは申上ません　櫓「如何でござる各々方夫れで疑がひは晴れましたら　甲「申し譯はございませんで何共ハヤ申譯は……と地面へ面形を押さぬばかりに平身低頭して詫ありました　櫓「イヤ〜左様詫を致すにやア當らねい寃の罪さい晴れりやア夫で結構だが夫に就て思ひ當る事がある、甲「へヽエ　櫓「イヤ外ではないが此方等四人で裏道を上つて參ると一人の大坊主が大慌てたる様子にて往き違ひさまスタ〜蒐けて往つたが胡論な奴と思へど其儘に致して置た……扨は其奴がした業ではなからうか　甲「大きに左樣かも知れません……と語り合ふ内坊主も漸やく正氣になつて　坊「ヲヽ其儘にある古葛籠と菅笠は其大坊主の持つて來た荷物だが大方慌てた爲めに置きッ放しにして逃たには違ひない……ソラ御侍さんの後ろにある其葛籠だ　櫓「成程此れか、夫れでは一ッ中を改めて見やう……「武兵衛どん一寸其葛籠を持つて來て呉れ　武「ハイ畏こまりました……と葛籠を櫓太左衛門の前へ直しますと蟾て蓋を取つて見るに不審しき品々ばかりにて雷太郎と認ためた手紙やら無理太郎より抒と認ためました手紙が二三通出ましたので夫となく之を龜次郎に渡す　龜「ヤア之りやア雷太郎奴が仕業よな　大、武「ナニ雷太郎の……と兩人とも人前がありますから夫と云はず目と目を見合して居る　龜「併し此文体では強がち雷太郎斗りの仕業じやない無理太郎の様にも見るヲ……　櫓「イヤ三人の衆大概仔細は解つた跡で綴くり詰もましせうが其坊主といふのは必らず無理太郎が姿を換へたに騙がひなしマア〜騙がすと時節を待つが肝心だと之を制し彼方

觀音靈驗

の一同にも克く利解を話したから、全たく人違ひして申譯ないと詫を言ひ素の道へと引き返す頃はモー東雲の空にして塒を離れし烏が向ふの森に鳴き立てましたれ話しは二ツに分れ雷太郎は閻魔の庄兵衛が御用になつたといふ事を聞き兇狀持ちも風解鶴涙にも慈ろくものにて居ても立つても那須野ヶ原にはウロ付いて居られない其處で無理太郎と相談の上兩人道を換へ姿を換へ秩父の方を志ろざし漸やく逃げ延びて小佛の虎右衛門と云ふ者の方へ落付いたケレども其頃は熊谷堤で御用金を奪ひ宰領を迄殺害した事が大分八ヶ間敷く相成り人相書を以て雷太郎の行衛を探索といふ次第に相成りました　雷何も兄哥れ前の處へ來て斯厄介になつて居ちやア濟まねいが今に獄卒の兄哥も落合う筈だから夫れ迄の所はれ賴み申しやす　虎何も雷の兄哥其樣他人行義の事を云はなくても宜ぢやアねいか俺ア一旦ウンと云つて

受込みやア骨が舍利になつても人に彼之れ云ふやうな事はねいと其處のところは少と斗り安心して居て呉んねい　雷如何にもれ前に心配懸けるのが氣の毒だから……　虎「左樣言はれちやア俺が氣が惡いやなれ主も知つての通り男を賣るが此方達の稼業だ何の役人風が吹いたつて知らねいッてば夫れ迄の事だ……　親風かも知れねいが世間は樣の下へでも隱れて居て呉んねい夜はモー掃はねいから　雷「成と」に何うも濟まねいが夫じやア何分賴みます……と雷太郎も虎右衛門が親切にして呉れる故心置なく此處に月日を送り嚴して探索方の目を暗まして居た然るに先きつ頃より雷太郎は毎晩のやうに宗太夫夫婦の亡魂に冒され「アラ浦目しの雷太郎よノウ……アラ苦しやうらめしや……とサメ〳〵と泣くかと思へば又カラ〳〵と打笑ひ恐ろしき顏色をして睨み付けるから流石剛勇の雷太郎も之には殆んど閉口いたし刀を拔

いて切り付くれば姿がなくなりますが又直ぐに顯はれると云んで終夜まんじともする事が出來なく身体も自然と勞れて參ります、デ虎右衛門も薄々此事を承知して居ましたが余り馬鹿々々しい事だから默つて居る、デ或日自分の親分と頼む仝じ秩父の藏に住う鐵の棒龍右衛門の處から使ひが來た　使「虎右衛門の兄哥が居るなら直に親分が來て呉れろッて云つて寄したよ　虎「ヨヽヨ〳〵直ぐに行くから左樣云つて呉んねい……ダガ急に左樣呼びに遣すといふナア何か譯があるのか知らん勘次手前使に來たんだから大概樣子は解つて居るだらう　使「已ア克く知らねいけれど何でも親分は大變今朝からお主の事を怒つて居らア大方余まり良い話じやアあるめいと　虎「左樣か何んでも構はねい直に行くと左樣いつて呉れ　使「夫ぢやア成り丈けれ早く……ハイれ八釜しう」と使ひの者は立歸つて仕舞ひました一体此鐵の棒龍

右衛門と云ふのは此近在切つての大親分で自分の實弟に血の池の熊藏といふのがあるがこれも又兄に劣らぬ俠客にて兄弟とも所ういふ逆樂に似もやらず心立て至つて正直温順にして仁心深く非道なる事を厭ひますので誰一人龍右衛門兄弟を惡く云ふ者はない全体俠客などといふものは自分の子分を多く養なつてあるからして自然と大きな面をしちやア我意を通すものですから近所の者抔は虻虫仝前に心得善く云ふ者はないものでありますが龍右衛門兄弟は人に慕はれると云ふ程だから平生の行なひも拙し量る事が出來まする、デ此頃人の噂さに聞くには子分の虎右衛門が盗賊の張本たるお尋ねもの〻雷太郎を圍まつて從いたと云ふ事が親分の耳へ這入りました　龍「何うも虎の野郎にも困つたものだ已の子分にやアッウ惡い事をする者は居ねいけれど虎と云つちやア皆なが鼻摘みだドウして那云ふ野郎が出來た

かと思ふと可愛想でもあり面が悪くもあり今に來て見やアがれサシザ云つて遣らなけりやア腹の虫が治らねいと弟の血の池に話しをして居ると勘次は歸つて參ました　龍「ヲヽ勘次御苦勞だつた虎は家に居たか　使「ヘエ居りやして今に參るといふ口上でございした　龍「ソウか他に誰れか居やアしなかつたか　使「別に誰れも見ねませんでした……　熊「左樣かマア夫方へ往つて緩くり休め　使「有難ございます……と勘次は部屋へ往つて休んで居る引き遣へて遣つて來たのは小佛の虎右衛門恐る〳〵親分の前へ両手を突き　虎「ヘエ親分は無沙汰を致しやした只今は何うも御使ひで恐れ入りました　龍「ヲヽ虎ヅーと前へ進め夫處じやア話しが出來ねい　虎「ヘエ夫じやア御免を下ぜいまし　龍「時に虎今日使ひを遣つたのも外ぢやアねい少しれ前に聞きてい事がある　虎「何の御用かア知りませんが知つてる事は隱さず申上ます

龍「ヲヽ左樣か克く言つた寶は此頃人の噂さにやア鐵の棒の子分に虎右衛門といふものがあつてれ殺ね者の雷太郎を其家へ圍まつてあると云ふ專ばら風聞だがヨモヤ其樣ことはあるめいナ知つての通り巳の子分にやアソンナ面汚しの者ア一人もねいから虎手前正道に己に内所で雷を圍まうやうな事ハしやしめいナ　虎「ハイ……　龍「サア虎……如何だ夫れとも人の評判する通り手前の家の樣の下に潜んで居るに違ひねいか　虎「モー親分に夫れ迄種を揚げられちやア何うにも斯しても仕樣がねい全たく仰しやる通り雷は他ちの家へ圍まつて置きますが何うも賴寄て來られて否だ置く事ア出來ねいとも云ひ乘る稼業ですもんだから……夫に他も賴まれちやア跡へ引かれねへ性分ゆへ親分にも隱し申してるのは恐うございますが當分の内と云ふ事で圍まつて置きました　龍「虎夫が恐いんだ男を殺くと云つたつて何でも構はね

い悪も善も一緒にして仕舞つちやア何にもならねい夫ぢやア酒も味噌も一緒と云ふもんだれ前も豫て知つて居るだらうが俺は非道な事は大厭ひ人に情けを施こし人に害をなさねいやうにするのが男達の道だ夫を手前はドウも悪い方へ走りたがり俺ともこ張り腹が合はねいで困つちまうエヽマア克く考がへて見ろ今雷太郎といつちやア人相書で御尋ねの厳しい盗賊の張本だ人の風聞にさへ立つて俺の耳へ這入るからにやア今に御領主の御尤めがあるに違ひねい其時に小佛の虎右衛門が圏まつて泣いたと云はれちやア第一俺が世間の人へ申譯ねい子分にアヽ云ふ者があるからにやア矢張り親分もアヽ云ふ了見力の人だらうと輕蔑れるのは當り前だ夫や之を考がへたら手前も少しやア悪い事を仕たと思はねい事アなからうがナー　虎「ハイ〳〵俺が重々悪うございます」傍から血の池の熊蔵も　熊「ヲイ虎お前只ペコ〳〵頭ばかり下げて居たつて夫で宜つて譯のものじやアねいぜ眞實親分の異見に從がう譯ならば今日限り其雷太郎を早く打き出して仕舞へ若し夫れが出來ねいんなら此方にも其量見があらア　龍「虎……次して俺達やア手前に悪まれ口を叩きたかアねいんだケレども斯うして親分子分の間柄になつてゝ見れば俺も默つちやア居られねい……夫で全たく手前が歸つたら直ぐにも咄しをして追拂うならよし左もなけりやア此方から綱を打つて御領主へ差し出すから度胸を据へて挨拶をしろと睨と虎右衛門に申し渡しましたが愈々之れより雷太郎と鐵の捧龍右衛門の間だに大喧嘩を仕出かし小佛の虎右衛門裏切りの講談でございますがいつもながら一寸一息吐きまして次席にゆづりちくはしく辨じ述べます……

第九席

虎右衛門は親分龍右衛門より厳しく意見を言はれましたが心ろばね至つて邪しまな男だから反つて俺れが辱かしめられし如くに心得其場は意見に従がつたる如くに見せかけたが心中大に怒りを含み無念に思ひて立帰りましたが、子分「コリヤア親分れ歸んなせい　虎「ヲヽ大分帰りが遅かつたから雷の兄哥は心配して居たらうナア　子分「先刻も出て参りやしてモー親分は れ帰りかと云つて居やした　虎「ヲヽ左様か夫りやアドーも待遠だつたらう子分「ソシテ親分銭の棒の大親分は何と仰しやいました大層御顔の色も宜くねいが例の一件で打ち出せとでも云ふんじやア有りやせんか　虎「マアた様云つた様なものよダガ何も心配な事はねい……夫から手前気の毒だが雷の兄哥を一寸呼んで来て呉れ俺が

少し聞しがあるからつて……子分「ヘエ畏こまりやした」と駆て子分は様の下なる雷太郎の隠れ場所へ参り子分「親分〳〵……　雷「ヤヽ何と兄哥は帰つて来たか　子分「ハア只今帰りましたが一寸御目に懸りていと云ふ事でございます　雷「左様か何ぶふ事か知らねいが直に往くから　子分「夫じやアれ早く願ひます雷太郎は若しや虎右衛門が親分の銭の棒に意見されて或いは自分を突き出すと云ふ事がないとも限らない人の心と飛鳥川實に換り易きが世の習ひと既と要心して九寸五分を懐中に呑み都々と虎右衛門の居間へ参りました　雷「ヲヽ兄哥れ帰りでございましたが　虎「定めてれ主も待遠でしたらうが實は余まり宜い咄でもねいものだから終々長くかゝつて仕舞つた　雷「シテ用と云ふのは定めて俺の事でれ主も迷惑をしたらうと思ふ　虎「ソウ切り出されちやア言はずにやア居られねいが早い咄しがれ主を縛付きにして突き出

せと云ふ談判よケレどもソコだよ兄哥何も俺を捉めへて悪黨だの同類だのと云ふにやア當るめい全体親分は余さり蕊正直過るもんだから夫で俺のする事が氣に入るめいが何ぼ何でも大勢の中で恥を掻せるにも當らず悪いは悪いで宜いからして疵を付けて叫すにやア當るめいソイツが癪に障つて堪らねい　雷ウーン成程兄哥の云ふ通り素より素性の宜いもんぢやアねいからして決して善良とは云はねいが疵を付けて悪く云ふにも當るめい今ころ日影の身だけれど俺も雷太郎と肩書のある人間だ先きが鐵の棒か樫の棒か知らねいが其様ものでビクともする俺じやアねいと兇狀持の身をも忘れ跳圍荒く罵しりて大に立腹した虎右衛門此様子を篤と見澄し密かに雷太郎を制し　虎ソリヤア雷の兄哥怒るナア野暴だ……と只斯いつた斗りじやア解るめいが兄哥一寸耳を貸して呉んねい」と耳打をして咄しました　雷ウム成程

……ム……ム……皆いく左様往けば實に持つて來いと云ふ上首尾だ」と手を拍つて大に喜こび　雷謀りごとは密にあり細工は流々仕上げを御覽じろかねと猶も兩人が密議を凝らして居る處へ突然這入つて來た一人の大法師釣鐘の破れたる如き聲を發し

僧「吾れは諸國廻歴の僧なり願はくば一切の功德を以つて一文片錢の志ろざしを乞ふものなり

兩人「エヽ、何だ突然に吃驚させあがるぢやアねいか」と振り返つて見外ると顔は腫れ揚つて赤く爛れ全で癩病やみの如くであつたから衆れて言葉もなき折柄件の法師はカラ〳〵と打笑ひ　僧「雷小佛、事なつて目出たし〳〵友達にさへ見分の付ぬ程なれば卿を分て探ねるともヨモ知るものあるまい……善哉々々吾こそは獄卒の無理太郎と云へる新米人の大法師に候斯樣に候へば奉加に一杯

の酒を傾め給へと申し候……雷「ヲヽ之れは〳〵珍らしい人が來た……兄哥獄卒の兄弟が尋ねて來た　虎「無理の兄哥とは珍らしい客樣だ……サア〳〵冗談はヌキにしてマア〳〵此方へれ上んなせい」之より艸鞋を脱いで上へ揚げ雷太郎も暫らく面會なかつたもんだから之れより四方山の咄しに時を移し且今日鐵の棒よりの一伍一什を咄しました　無理「ウム夫奴は何うも飛んだ事だ併し惡くひは其鐵の棒兄弟だ何うにかして早く方を付けたら如何なものだらう　雷「夫に就ちやア虎兄哥も大骨折りさナニシロ相手が相手だから……と其日は夜半の頃まで酒宴をいたし一同快ろよく床に就きましたが一時ばかり經ちまするとと雷太郎無理太郎の二人はムックと床の上へ起き上り　雷「サア首生でも何でも來い……ナンダ宗太夫夫婦の亡魂だと……宗太夫も蔭もあるもんか、ウヌ等何百人來たつて怯ろく雷樣じやアねいぞ　無理「ヤア大變な生首だナ……ヲヤ行燈が飛び出したぞ……ヲヽ一ッ目小僧が隅の方で笑つて居やがらア……ナンダ足を潜たりしやがつて此盤若奴……アレアレダ否に笑やアがるナア」とダンビラを引ぬいて空を拂ふ余まり何うも噪々しいに依つて虎右衛門はソッと樣子を窺がふに豈圖らんや灯はホンヤリとして雷と無理の兩人は寐惚けながら刀を拔いて頻りに切り拂つて居る樣子だ虎「何だ物騒な眞似をしやがるじやアねいか……生首だの亡者だのつて……ムーン妙だナア……ヲヽ危ねい〳〵今度は雷と無理と鬪かつて居やがらア　雷「何だ此亡者奴手前は矢張り宗太夫の夫婦か「無理「宗太夫の夫婦だから手前を取り殺すんだ外にも亡者は澤山居るけれど相談して見たら俺が一番罪障が深いから浮ばれねいぞ」といつてチヤン〳〵バラ〳〵雨人が頻りと鬪かふ有樣は

全然此世からなる地獄の責苦に逢ふやうな次第である虎右衛門は見るに見兼ねて　虎「ヲイ雷の兄哥……獄卒の兄哥寐惚けちゃア迚けぬいせと兩人を刀の背にてポーンと打ちました二人も初めて我に歸り　雷「ヲヽ兄哥れ主は何を寐惚けて居るんでい　虎「戯談じやアねい已ア寐惚けて居る所か生氣なもんだれ主逃二人で何だが宗太夫だの生首だのつて云ひながら刀ア抜いて切り合つて居るので危なくてならねいから夫で起したんだが見ねい雷の兄哥ア二の腕へカスリ疵を受けたじやアねいか尤ども已が先きへ獄卒の兄哥の方を生氣附けたから刀を引く時にカスッたんだ　雷「ソーか何とか已ア言つてたかい　虎「言つて居たにも何にも宗太夫に生首……此奴を口續けに言つて居た　無理「已も何か言つて居たにも何にもれ主が宗太夫夫婦の亡者だと云つて雷の兄哥に切り込んで居たんだ　無理「河

の藪夫れぢやア已の身体へ宗太夫夫婦の亡魂が乘り移つて雷に仇をしたんだ……アヽ恐ろしい生首であつた……之れ此通り冷汗が流れて居らア　雷「已ア全たくれ主を宗太夫の亡者だと思つて居たよ道理で幾ら切ッ拂つても〳〵來ると思つたれ主が切り込んで來るんだから堪らねいや　虎「全然二人のする處を見て居るとアレでも生氣の沙汰になるかと思つて心配した位ねだ　雷「無理「マア夫れでも小佛の兄貴が附いてゐ來れたから宜かつたんだ若しも左樣でない時にやア夫れこそ飛んだ事になつて仕舞う處だつたれ臨でマア〳〵助かりました……併し毎晩此樣事にあられちやア實に閉口して仕舞うが何とか亡者除けの宜い工夫はなからうか知らん　虎「夫りやア無い事も無い　雷「全体獄卒の兄貴の來ねい前から何も宗太夫夫婦が已の身体へ付き纏つて毎晩の樣に唸されて困つたが此樣事ア初めてだが其亡者除けの工夫

ていなア如何したら宜いんだらう知つてる事なら教へて呉んねいナ　虎「夫りやア何も隠して居る譯でも何でも無い寶ア那の鐵の棒の親分の持つて居る盤若丸の名刀は悪魔降伏怨敵退散の劍だといふ事だ夫れだもんだから狐が附いたとか生靈が取付いたとか云ふ時にやア何時も親分が往つちやア治めて遣るんだが何も夫りやア親分が有難い樣じやアねいアノ名劍の利益でもつて狐や生靈が落ちるんだ夫れだからアノ刀を奪ひ取れば吃度其樣心配はなからうと思ふんだ　雷「ウム夫奴は何よりか有難い左樣いふ譯なら猶更の事だ敵と思ふ龍右衛門彼奴を亡き者にして討ち取れば一擧兩得……此樣甘い事アねい夫じやア小佛の兄貴ソウ云ふ手筈にして貰うか善は急げだ直に明日は取懸らうじやアねいか　虎「雷の兄貴ア性急だから仕方がねい夫じやア斯うしやう今日俺が手紙を書いて龍右衛門兄弟を引き寄せるから……ど

ガ夫りやア素より偽手紙を書くんだ隣村の夜叉の金八からの使ひだと云つて遣りやア吃度來ねい事アねいんだ就ては其手紙の認ため方だが……雷の兄貴は手が宜いて云ふ訳だしするからお主に一ツ偽手紙を頼もう……ソラ之が金八の書いた手紙だ斯樣いふ塩梅に書いて貰やア宜いんだから」雷太郎は手に取上げて見ると偽筆には至つて造作もない書風でございます　雷「ヨシ〳〵斯ういふ手紙なら何時なんどもでき引き受けた……夫れぢやア何か御相談申度儀有之候に付今夕景より御出下され度奉待上候……とでも書きやア宜んだナ　虎「マア〳〵其處いらで宜いや何とでも書いて呉れ」夫れでは〳〵と云ふんで雷太郎は二三通書いて見る處存外見事に出來たがソコで使ひを遣るに困つたと云ふのは夜叉の金八の手紙を持たして正逆に自分の子分に遣る譯には往かない　虎「仰も之には困つたナア獄卒の兄貴如何したら宜もん

だらう　無理「左様さ別に之といつて甘い考げへもないナ……ダガ
れ主の子分に持たして遣る譯には往かずするから寧ろれ主が金
八に私まれて持つて來た体にしたら如何なもんだらう而すりや
ア別に疑ぐりを起すやうな事アあるめい　重「成程獄卒の兄貴ア
甘い處へ勸付いたぢやア左様いふ事にしたら如何だい小佛の兄
哥……　虎「夫れも宜からう！……夫じやア田市の庚申塚の處で待
つてゝ呉んねい」之から悉々く身支度に及んで虎右衛門は何氣な
き体にて親分鐵の棒の處へ參りました　虎「親分今日は……　龍
ヲヽ虎か良く來た……マア上れ　虎「ヲヽ此りやア宜、ところだ血
の池の親分も銅佛の皿次も居るのですかい……ヂャア御免ねい
何方も……時に親分今日夜乃の處へ往つたら是非親分に御足勞
を願ひていと云ふ譯で手紙を已ちに頼んで寄越しやした大概用
は貰めていやすから已ちと一緒に參りやしやう　龍「ヲヽ左様か

ドレ手紙を見せろ……何だと御相談申度儀有之候に付……御相
談なら向ふから來るが宜いや何も此方から御迎ひにも當るめい
がソコを手紙で呼びに寄越すし夫に虎に頼んで寄越す位ねだか
らヨク〳〵の事だらう……宜〳〵直に往かう……　熊、重「モシ〳〵
親分何だか其手紙ア少とばかり不審やうに思はれやすな　龍「ナ
アーニ不審い事があるもんか俺も鐵の棒だ野郎等が十人や二十
人仇をしたつてビクともするんぢやアねいから　熊、重「夫でも用
心に若はなし油斷大敵と云ふ事があるから已等がお供を致しや
しやう」虎右衛門は折角申器が旨く往たと思ふて喜こんで居る處
へ血の池といふ無鐵砲な奴と銅佛といふ子分が供をして往かう
と云はれたんで困つたもんだと思つたケレども幾人供をして往
つたからつて先方は親分の事だし何とも云へねい其内に鐵の棒
も悉皆支度をして例の盤若丸の一刀を腰に挾さみ　龍「虎……夫

ちやア一同で出掛やうと打連れ立つて辭り村なる夜叉の金八方へ參りました途中庚申塚の邊りまで參ると　虎「一同一足先へ往つて下んねい已ア小便を遣つて往くから……」と何氣なく一町ばかり遣り過し樣子如何にと覗がふと柴の控龍右衛門の行く先きへ立塞がりました一人の大男は言はずと知れた雷太郎と獄卒の無理太郎との兩人でありますが扨庚申塚に血の雨を降すの件りは次席のれ樂しみ……

第十席

雷「ヲイ、彼處へ來たのが確かに鐵の棒だが御生憎樣なもんだ二人のれ供が附いたと來て居やがらア　無理「ナニ捕はねい先方が三人なら此方も小佛とッヤリ三人だ一人〳〵なら誰でも來いだ、サア來た〳〵飛び出せ〳〵　雷、無理「ヲイ、其處へ往くのは鐵の棒龍右衛門かよくも雷の惡体を吐きやアがつた虫ケラじやアあるめいから吐かした事又知つてるだちう、サア尋常に勝負しろ」と大音聲に呼はつたからチョッと向ふを見ると乘て噂さに聞いて居た雷太郎と今一人の者が各々得物を携さへ待伏せを致して居たものが躍り出た不意を喰つて驚ろく三人　雷奴極惡非道の無理太郎も此處で逢ふとは百年目惡を懲し善を助くるは此方の望み達衆の務め其舌の根を留めて呉りやう一寸も其處動くな……と三人等しく見據へたり　雷、無理「ヤア吐いたり〳〵汝等如きの小河童の刃が身体に立つて耐るものか首根子が宿換しねいやうに用心して來い　龍「何を小癪な……と鐵の棒は盤若丸の名劍を扨き放ち突然雷太郎に斬り附けました　雷「小賢しいかな其腕立て望みとあれば閻魔の廳へ遣つてやると仝じく火刀を引き拔き丁々發矢と斬り結ぶ鐵の棒は左程劍術は出來ま

せんが大力無双なる上に性質大膽なる事にてナカ〳〵雷太郎抔の及ぶところでない夫に引き換へ雷太郎は珍てより劍道に身を寄せ今では達人よ名人よと呼ばれた位ゐの事でありますゆへ良く其技には達して居る故に此二人の勝負と云ふ者は實際何れが勝か何れが負けるか更に分らん位ゐだ……其間だに血の池の熊藏は兄龍右衛門が雷太郎と拔き合せて切り結ぶを見るよりモハヤ之れ迄と覺悟を極め腰なる一刀を拔く手も見せず獄卒を目懸けて斬り付けたり無理太郎も樫の棒を振り廻して熊藏の刀を打ち落そうとしました處が熊藏も腕節の強い奴だから更に怯ろかない　熊「此芋掘り坊主奴怪しやがれと飛び懸り樫の棒の中央を切折りすかさず踏込んで打懸くれば無理太郎は身を沈ませ折れたる棒の余りにて猶も受留めてぞ圖かひける　無理「ヤア己れナカ〳〵侮の達者な野郎だ之で往生しやがれと又取り直す樫の棒

を熊藏は受流しつゝ眞甲目懸けて二ッになれと切り付くるを樹にて拂ふ無理太郎甘く熊藏の左りの腕を打折つたケレども剛氣の血の池熊藏左りの腰を折られた位ひでは更に怯ろかない右手を以て突を入れたが先方が大の男たがら手元が狂つて無理の太腿四五寸切り付けた双方手負ひになつて來たからモー戰かひゝ左樣烈しくない銅佛の重次は親分龍右衛門に助太刀致さんものと執望て隙を覗がつて居ましたけれど何を云ふにもモー日は遠れて仕舞つて薄月夜の事と云ひ且つは烈しく戰かふ事故に更に斬り込む隙がない此時小佛の虎右衛門は不意に後ろより廻り出で重次に打つて懸りましたので　重「ヤア此野郎誰かと思やア虎だ此恩知らずめ義理知らずの畜生奴吾やア克くも雷の泥棒野郎に加擔して親分に楯を突きやアがるナ何でも其樣な事だと思つたから已も血の池の親分も附いて來た譯だ此野郎も犬にも劣る

極つくばり姿切りをする穀潰し」と大いに怒り烈しく打込む其勢ひに虎右衛門は忽ち刀を前に打落され逃げ出さんとする處を樹の根に躓つきツデンドウと倒れました得たりや應と銅佛の重次は上に乗し懸りさま咽喉を目懸けて突かんと致すをサツクの虎右衛門は落せし刀を手ばやく拾ひ取り今乗し懸らんとする重次の横腹を目懸けてグサと貫ぬきたり仕損じたりと重次に於ては重傷を搏はず虎右衛門が咽喉を目懸け突き通しけるに運の好いのか手元が狂つたのか僅かにカスつた昇り故下よりガバと重次を蹴飛ばし起き揚りさま斬り付けました夫れが爲め敢なくも非義非道の刃に仆れた雷太郎と龍右衛門は宛然仁王の荒れたるが如く千變萬化に打合ひつゝ虚々實々火花を散して闘ひけるが如何しけん雷太郎の八尺八寸の業物は盤若丸の爲めに打落されに龍右衛門が切込む一刀に只一討に相成らんと致すを

石手樣の雷太郎盤若丸の下を搏くゝり片手を延ばして龍右衛門が刀持つ手を確かりと捉へも吾取らんと捻ぢ合ふ内猶片手にては龍右衛門の髻を握り大地へ動と捻伏せれば組敷かれ乍ら龍右衛門は雷の髻の腕へ喰ひ付き左りの手を差し延べ腰をすくひて投返す夫れが爲めに雷は二の腕を喰ひ切られ龍右衛門は髻を引き抜かれると云ふ始末で血は滴々と大地を浸し太刀は四邊へ飛び散つて今はモー互ひに力づくで命かぎりに捻ぢ合ひ喰ひ合ひますばかりトウ〳〵田の中へ轉がり込み上になり下になりして泥まぶれになり互ひに死ぬ迄は放さぬといふ決心で闘かつたが此時小佛は漸やく銅佛を仕留めたから急ぎ雷の助太刀を致さんものと來り見るに豈圖らんや田の中へ轉がり込み互ひに勝負も分らぬ始末だから己れも田の中へ飛び込ひとサア泥深くて仕樣がないけれども ソンナ事は云つて居られない空然龍右衛門の後

ろから組突いたが龍右衛門は自分の子分に欺されたのですから心外で堪らないゆへ忽ち男氣を顯はしスクと投げに虎右衛門を投倒し咽喉を捉んでウーンと一ゞめゞ付けた大力の龍右衛門に付けられてトウ〳〵目玉は飛出す血沙は流れる無惨な最期を遂げやしたは全たく惡の報ひでございます田甫の眞中に於ては無理太郎棒打落され九寸五分にて討合ひましたが熊藏は兄龍右衛門か勝負の危うきを見て此場を切り拔け兄を救ひ無理太郎は跡にて仕留めんものをと身を退かんとする處を無理はスカサズ付け入つて熊藏が高股へ九寸五分をグサッと貫ぬき前の方へ刎ね切つたものだから股は二ッに割かれて仕舞つた急所の深手に熊藏も目暗みてグラ〳〵とする處を又眞向へ切り付けられたので衆沙眼に入り全く進退自由ならば死物狂ひに相成つてる無理「ヤイ〳〵己れ思ひの外手強ひ野郎だ無理太郎が腕骨の擂梅

を見やがれ　熊ヲッとどつこひな手は折つても滅多に俺等のはぶしが立つものか何んと己れ猪小才な……と暫らく挑み合つて居たが流石剛氣の熊藏も次第〳〵に勞れが出て來て受太刀に成る計り其處を付け込む獄卒はヤッと聲懸け難なく其場へ斬り倒しました無理「熊を見やがれ出子助め……と止めをさして遊かに田の中を見外ると首は鐵の棒の爲めに組敷かれモー跳ね返す勇氣も無く既に急うく見ゐたる故手傷を受けし無理太郎も已れの重傷は忘れし如く深田を越して後ろより龍右衛門を目懸け九寸五分にて斬り付けた不意を喰つた龍右衛門頭腦を切り付けられたのだから堪りませんウーンと其場へ倒れた處を二の太刀にて又斬り付けたから幾ら剛勇でも堪つたものではない脳の如くに切りさいなまれトウ〳〵絶命に及んだは天道果して是か非かと嘆息の外はございませんダが何時かは此報ひと云ふものが雷獄卒

の二人の身に及ぼし敢果なき最期を遂げる件りは追々と言上いたしますがサア此噪ぎと云ふものが村中へ聞へたから子分の面々吾も〳〵と田中の庚申塚を指して參る　雷「南無三彼等……の爲めに認かつては一大事と手早く盤若丸の一刀を奪ひ取り足に任せて逃出したが益々追手が厳しき故導そ秩父の谷底へ身を投げて運を天に任せんものと二人は走りながら相談に及んだモー彼是夜明け近くになるとは言へど松明の灯りは天をこがして實に物凄まじき斗りだ　無理「待て〳〵　雷……今此絶壁から飛び込んだ處で幾ら運を天に任せるとは云ふものゝ命の無いには定つて居る夫れよりは寧ろ此處にから坐つて居る此藤蔓之を力に取付いて運を天に任した方が宜さそうに思はれるが左樣したら如何なものだから　雷「成程夫れは奇妙々々早速左樣いふ事にしやうヒヤアねいかと中でも太そうな藤蔓に縋つて谷底へと下りて行く　無理「エーヨイ之がホンの命の綱だ、俺が先きへ落ちたならば染み甲斐に線香の一本も上げて呉れ　雷「俺が先きへ落ちたらば頭役に念佛を頼まうと思へば之れが地獄の一足飛びとでも云ふのかナ　無理「夫りやア大きに左樣かも知れねいが虎右衛門は可愛そうに今時分はモー三途の川は渡つて仕舞ひ閻魔の前で舌でも抜かれて居るかも知れねいよ　雷「左樣〳〵　大きな釘抜で赤鬼と青鬼に責められて居るのか……夫は左樣と大分長い藤蔓だナア何處まで往つたら谷へ下りるだらうか　無理「ナアーニもう直きだと聽て夫から五六丈も下りたかと思ふと漸やく足が地に届いた　無理「アヽ長い道中だつた夫にしても隨分此秩父といふ山は高いやまだなア……アヽどつこひしよと……アヽ腰が傷いが之見や流ば悉かり閉竜て血は留つちまつた　雷「成程俺も幾らか痛みが取たがアノ龍右衛門の野郎に二の腕へ喰付かれたんで實に下

りる時に難儀をした……ヲヽモー夜は明たが彼處に清水が流て居るから血でも洗つて少し休もうと初めて安堵の思ひを致し四邊を見たところが蟒の住家ども思しき洞穴が數多あるゆへ結何之れこそ幸はひと神の根を食し細くも命をつないで其處に棲つて居た、ケレども如何にせん斯う云ふ深山の事でありますから蛇が多くて仕樣がないアッチの手へ纏まつたりコッチの手へ纏まつたりして誠とに氣味が惡いダガ好い塩梅に宗太夫夫婦の亡魂は纏はれない勿論此樣ところで出られた日にやア夫れこそ法が付かねいが之れと云ふのも全たく盤若丸の功德でありますデ五日斗りの間だといふものは心細くも此處に居ましたが切斯いふ處であつて見舞るから人なぞの通る處でない、處が七日目の朝の事です小川を越して向ふに何うも怪しげな影が見ゆる

無理「ヲイ〳〵」　雷「何だい」　無理「那處を見ねいあるやア確かに人影だ

せ　雷「左樣さ段々此方へ來るやうじやアねいか二人連れで」　無理「左樣よ夫れだからね主を呼んだんだな」　雷「ムヽ其奴は有難い此いらへ來る位ゐの者だから逃れ狩人だらうスルと難儀は持つてるだらう難有い〳〵漸やく米の飯にあり付くのかなア」　無理「夫れにしても追駈けて斬すのも骨が折れるから今に此處の前を通るにちがいねい左樣した處を何の苦もなく遣つて仕舞ほうじやアねいか」　雷「夫が克かちう……ンテ見ると人家のある所までは遠くはねいな」と話しをして居る內に神ならぬ身の狩人二人はヨモヤ此樣洞穴の中に盜賊の根本雷太郎や獄卒の無理太郎抔といふ尾嘗付きの曲者が住んで居るとは思はないゆへ咄しを仕ながら盜つたスルと突如洞穴の中から二人飛び出したから狩人の方とやア熊でも出て來たんだらうと不意を喰つて叱驚したが熊どころじやアねいモッと恐ろしい鬼とも蛇とも云ふやうな人間だ

雷「ヤイ狩人之から何方へ往きやア人家があるんでい、サア教へなけりやア打つ斬るぞ　狩人「ウム吾りやア熊じやアねいなエ、吃驚させやがつた矢張り人間か……家のある方へ往くにやア之れから二里半もあらア夫も道なんかのある譯ぢやアなし道のねい處を歩行て行くんだ　雷「左様か夫れを聞きやア此方のもんだ……ヤイ狩人手前の命は貰つたぞと突然盤若丸の一刀を抜き放ち切つて掛る此方も狩人の事でありますゆへ決して負けては居ない狩人「なんだ小癪なと山刀を抜いて闘かつたけれど素より及ぶ譯のものでない終に兩人共悪者二人の爲めに殺されて仕舞つた無理「モー斯なれば百年目だ……何嗚が泣くだらうッて……此奥たらし奴ジタバタしづに往生しやがれ　雷「我も刀の及くうとなれよ幾ら泣いても喚いても前きの世からの約束だ諦らめろ南無阿彌陀佛々々々々々々と二人の狩人を無慚にも殺害いたして仕

舞さしたが實は狩人も山籠りを致うと思つて秩父の山奥へ踏み込んだんですから辨當の用意なども充分に致してある夫れが爲めに雷も獄卒も充分に腹を拵らへ狩人の着物を剝いで道なき道を辿りつゝ秩父の山を遁出したのは大膽不敵の曲者でありまし……

第十一席

エ、雷太郎のれ咄しばかり伺がひついきまして肝心の仇討に出立致しましたる綾瀬權太左衛門等の音信を絶へ定めし看客諸君の御心配御待兼の事と存じます……扨權太左衛門は后見役と相成り高野大之亟萬屋龜次郎主從と共に那須野ケ原に狼退治を致したが遂に敵雷太郎の行衛も知れず何地を宛とも定めなく參ると途中に於て百姓の爲めに坊主の仇と疑ぐられ既に飛んだ災

觀音靈驗

難に逢う處でございましたが宜蓮梅に寃の罪も晴れ殊に夫れが爲め手懸りも得ましたに依り之より上力筋を志ろざし發足し久々にて古郷武藏の國へ入り淺草觀世音へ參詣し四人共齋戒休浴いたして一七日の間だ斷食をなし普門品を讀誦して何卒敵雷太郎の有家を知らせ首尾克く本懷を遂げしむる樣と一生懸命に相成り祈願に余念もあらざりき……茲に又那須野ヶ原の郷士にて川合宗太夫の家に養なはれたる小厮の忠介は盜人の跡を附けて漸やく其巣窟を見出し門に「いろは」の三字を認ためて立歸り代官所に訴たへて敵を討つて貰をうとしたが當の敵にあらざる閻魔の庄兵衛のみ捉はれて獄門に曝されたので猶無念の遺る瀬なく何卒主人の仇雷太郎を打ち取つて日頃の大恩に報ひんものとソコで已れは充分に旅支度となし家をば村長に預けまして先づ江戸表へと志ろざしたがナニシロ未だ旅慣れぬ事であるから其夜

に旅屋へ泊り日頃信心する淺草の觀音に參籠し敵の有家を尋ねんものと宿の亭主から樣子を詳しく聞き夫より淺草寺へ出懸けて參つたのは丁度綾瀬等の一行四人の者が觀音へ籠つたのと全し日であつた之と云ふも全たく宗太夫夫婦の亡魂が導びきを致したのであらうと後にて思ひ合せたり……デ其頃は未だ只今の樣に觀音も立派な伽藍でもありませんがチャンとれ籠りの堂といふのも出來て居て心神の者は孰れも夫れへ行つてお籠りをする處が其日は丁度綾瀬等の四人の者と宗太夫の家に養なはれた忠介の五人しかでございません即はち此二組であつたから自然と親しくなつて咄しをする樣になる所が双方とも大事の仇討つ身であるからソー迂闊に夫れ等の咄しは仕ないが孰れも觀音を深く信ずる事である故普門品の讀誦に怠たりなく一七日の斷食をなし參籠いたして居つた丁度七日目即はち滿願の日ではご

觀音靈驗

います何れも通夜につかれて眠るともなくトロ〳〵と熟睡みまするとと異香かんばしく光明かゝやきて觀世音菩薩あり〳〵と顯はれ給ひ「觀」善哉々々汝等日頃心神の力厚きに依りて此の歌へを授く可しとあつて一枚の御影に文字の書いたものを下すつて其儘元の扉の中へ入らせられた　「龜」綾瀬どの私くしは只今妙な夢を見ましたが殊によつたら觀音様の御利益かとも思ひます

「樓」ヲヽ左様かい實は俺も不思議な夢を見たが一体れ前のは何ういふ事だ　「龜」左様でございますと云つたが自然四邊を憚かる様子といふのは四人の者ならば何れも遠慮は入りませんが茲に一人忠介といふ他人が這入つて居る事故少しく躊躇いたして居るスルと忠介は之を見て四人の者に向ひ　「忠」如何なる御縁か知りませぬが能りの日より仝じこと此處で御一緒になりましたが何をか隠し申ましやうと一層聲を密め……俺くしは仇討つ身で

ございまするが昨夜の夢に主人夫婦の亡靈顯はれ此處にお記りの四人のれ方は其方と仝じく仇を討つ方で其仇と云ふのも矢張りれなし人であるゆへ四人の方を力と仰き首尾能く仇討を遂げるが宜ひと申し夫から只今仇の居ります處から委しく教へて呉れました夫れに觀世音の御利益か不思議に薩の御姿を拜み御告げをも蒙りましたが貴郎方のれ咄しでドウやら俺しに御遠慮ぢ夫れ故私しから咄し申しましやう實は觀音様のれ告げと云ふのは……義は大石にあつて須からく宿志を遂ぐべしと云ふ八字を與へ給ふと覺めて夢が覺めますさと不思議や懐中に尊ぶ

義有大石須遂宿志

の御姿の上に

と御書にしてございました勿体ない事でございますが之でご

います夫れに敵と申しますのは雷太郎といふ極惡非道なる盜賊の張本でございますが私しは申上る事に詐はりはありませんゆゑ若しも御胸に思ひ當る事がありますなら包まず御咄し下さいましと先方から切つて出られた此咄しを承たまはる四人の者も扨は不思儀の事もあるもの哉彼の雷太郎の爲めには如何に難義を蒙むつたものがあるか知れないと就れも顏見合はして居る

樣「イヤ忠介殿とやら貴郎のれ話しは詳しく分りましたが……時に俺しが觀音の靈夢を被むつたと云ふのも夫れと同じ事少しも違ひはありませんと懷中より彼の御影を取出し人々に示すと龜次郎大之丞武兵衛も共に我も〳〵と懷中を探さぐり御影を見せ夢の事をも語り合ひける故全たく忠介と敵は全じ雷太郎である といふ事を承知いたし之と云ふのも觀世音の御引合せと猶も喝仰の涙に暮れました

樣「忠介せの貴郎は未だ御年弱の事ではあ

る克く御一人で仇討などの志ろざしを起しなすつたか今申すも イ就れも夢は全じれ告げ夫に私しらの目指す敵といふのも其雷太郎ですから之からは共々御力になり一日も早く行衛を尋ねて本望を遂げたいものでございます 忠「全たく仰せの通りでございます何か一日も早く敵に廻り逢ひ本望を遂げて御主人夫婦の後羅の安堵を晴したいと旦夕夫れば かり心懸けて居りますが就ては貴殿をれ見懸け申してお願ひがございます 樣「ハヽア何の儘用か知りませんが俺しに出來る事ならば御力にもなりませう 忠「夫を聞いて安心いたしました私しは斯うして仇討には出て居りますが何を云ふにも弱年の事殊には劍道未熟の至り故强敵なる雷太郎に逢つたところで返り討となるのは掟のもの夫れ故若しも其場に臨んで返り討ちにでも逢ひましたなら何か俺しになり換つて敵を討つて下さいましお願ひと申すは此一義に間濟み下

さいますれば難有い仕合せでございます　權「ヲヽ何かと思つたらイト易い御咄しでございます何れも斯うして敵討に出たからにやア捨る命は覺悟の前、ケレども成可く身を大切にして慰らなければ結局は輕はづみの爲めに遂に一命を敵に取られるやうになるものでございます俺も三人の后見となつて出て居るんだから及ばず乍ら力を盡しますから安神して共々に敵を尋ねましやう　忠「其お詞を伺がつて百人の味方を得たより氣丈夫でムいます何か左樣なれば宜しく御願ひ申しますと之より權左衛門の引き合せにて大之丞並に龜次郎とは兄弟の盃をさせ大之丞が第一の年がさですから兄とし龜次郎を次とし忠介が一番年が若いから三弟として茲に首尾よく約束も出來ました體て滿願も濟みましたゆへ敵の有家を探らん爲め出立しやうとしたが扨何地に居る事やら更に解らない　權「アヽ忠介さん昨日の咄しに敵の有家

を宗太夫夫婦の亡靈が告げ知らしたとか云ふ事だが夫れは全たくの事でありますかへ　忠「ハイ夫れは確かの事を申し上げました一体俺しは宗太夫夫婦の殺されました晩に密と盗賊の跡をつけて樓家を尋ねに參つた處途中で道を見失ひ當惑して居るところ主人宗太夫の亡魂があり〳〵と顯はれ俺を導びいて樓家を敵へた事がございました其時空中に聲ありて　○「忠介れ前の体へは此宗太夫が附き纏ひ屹度敵を取つて貰うから其積りで居て呉れよと云ふ主人亡魂のれ告げであるから必らず嘘はございません　權「ヲヽ左樣か夫では何々確かだが宗太夫殿の知らせでは何處に隱れて居ると申されたか　忠「左樣でございます大磯の宿へ往つて居れば必らず自然と敵に廻り合ふやうになるし場所は七里濱で討つやうになる努々疑がう勿れと云ふ知らせでございます　權「ヲヽ左樣聞けば實に確かなものだ夫れでは少しも疑が

ひのある可き筈はない觀音の靈夢といひ宗太夫どのゝ知らせと いひ思ひ合せば孰れも忠臣孝子の志ろざしを憐れみて惡人を耶 ひの致す處だと之より江戸を立つて大磯へと志ろざしたケレど も孰れも未だ弱年の者ばかり少しく年を老つて居るのは武兵衛 一人であるから權太左衛門は何から何までの世話を燒かなくち やアならない誠どに一人で大骨折ですデ大磯へ着いた事は着い たが別に頼寄る處もなし致すから暫らく上州屋といふのへ宿を 取市内の樣子を見て歩行たがナニしても海岸で女郎屋などもあ る處ゆへ中々繁昌な土地であります夫れに諸國の者が大分入り 込んで居るもんだから權太左衛門も考がへた　權「コー云ふ土地 ならば殊によつたならば盗賊等の姿を換へて立寄らないとは限 らない夫に就ては居酒屋とか何とか云ふ店でも拵へて酒や肴を 賣たつなら自然人も多く出這入るも殊に斯う大勢で宿屋飯を食

つて居ては大變だからと甘い處へ考がへを付けたケレども斯う いふ事の相談といふのは何時武兵衛が相手だソコで武兵衛にも 自分の思はくを悉々く咄したところ流石十露盤玉を弾いて青つ た者だから總て左樣いふ商法上に懸けては抜目がない武兵衛も 充分賛成しました誰も此地に知る人がない　武「夫では爲そ斯う なすつては如何でございましやう皆な武士の姿で參つた譯では なし兩刀は鹿へ包んで荷拵らへにしてあるし丸腰の商人風で參 つたからヨモヤ此處の主人だつてもし敵討などの連中だとは思 ひますまい夫ですから大磯の土地へ暫らく家を持ちたいから周 旋をして呉れろと頼めば決して厭とは申しますまい左樣すれば 亭主の手から捜して貰うのが何より山道でございます左樣なす つたら如何なものでせう　權「成程夫れが宜からう流石はれ前は 斯の道へ掛けちやアまだ心なものだ早速ソウ云ふ事に取極めやうと

手を拍つて女中を呼ぶ　女「ヘイお召しでございますか……」と雨手を突いて丁寧に用を聞く全たく之れは權左衛門が女中への付け届けが宜しかから客を大事にするのである　權「アヽ姉さんや外の用ぢやアないがね一寸亭主を呼んで呉れないか左樣長くお手はふさげないからつて云つて呉れ　女「畏こまりました只今ソウ申します……と辭て亭主の前へ來て　女「旦那樣……　亭「何だよ此女中は……エヽ吃驚した大きな聲で後ろから呼ぶものがあるものか　女「夫れでもアノ八番のれ客樣が……ソ[illegible]ぶく女中までへも注け届けの良い氣の付くれ客樣が一寸旦那に御目に懸りたいと申して居ります決して長くお手はふさげませんから直に來て下さいと申します　亭「ヲヽ左樣か……夫れなら左樣と早く云が宜や　女「夫だから申したのぢやアありませんか　亭「エヽ著倒へ所も貴樣は口が達者で困るチッと嘴なむが云ひ　女「夫でも貴

郎の惡口なんぞはれ客樣に申しやア仕ませんやアね……此間茲のやうに六番へ御泊りになつたれ客樣が酔つぱらつて亭主の藥鍋を呼んで來い抔と申したつの姿しは貴郎をれ呼び申しにやア參りませんヽ……チッ旦那樣惡い事は申しませんアヽ云ふれ客は大事にして早くお座敷へお出でなさいまし　亭「ホントに良く曉舌る奴だナア手前が曉舌り出すと全然燕の囀るやうだドヽの詰りは言はなくても宜い藥鍋の事までも擔ぎ出しやアがつてホンとに呆れた奴だ……モー用はねい那處へ往つてろ　女「旦那往けと仰しやらないでも妾しも亞所に用があります從らモー參りますよ　亭「アレだ……人の見境のねい奴には困つたもんだ……と辭て亭主は羽織を着換へて權太左衛門の前へと出ました　亭「エヽ誠とに御粗末樣でございます　權「ヲヽ亭主や……サヽ其處では敷居越し……サア〜モソッと此方へ參つて呉れ　亭「エ

イエもう此處で宜しうございます　權「實はノ今日はれ前に折入つての願みがあるからツーと前へ進んで呉れ　權「左樣でございますか夫では何ぞ御免を蒙ひります」と前へ出た　亭「エヽ何ぞ御用でございますか　權「左ればさ實は如うして大勢厄介になつて居るが俺と此處に居る武兵衛は少し緣が遠いが關は皆な兄弟同士だ夫だもんだからモー荒れ方台定めし外のれ客も迷惑をするだらう　亭「イエ何仕まつりまして長らく御逗留下さいましても何もれ構ひも申しませんで誠とに相濟みません　權「イヤ何して其樣處じやアない皆な丁重にして呉れるんせ家こんで居る……夫で頼みといふのは外ではないが何處か商買の利さうな家を一軒周旋して貰ひたいが如何いふもんだらう　亭「左樣でございますな左樣なれば此地へ暫らく御住ひになりますのですか　權「夫れはモー勿論の事だ尤とも前々から居酒屋抔は手慣れて居

るから成可くは左樣いふ物を商ないたいと思ふ　亭「ヘヽエ……夫では幸はひ思ひ付きの家がございます余まり手廣いと申す譯ではございませんが一寸小意氣な左樣いふ御商買には持て來いと云ふんで尤とも賣つても宜し貸しても宜ろしそうですが……旦那樣も御存じて入らつしやいましやう手前共の通りを眞直に左りへ參りまして一寸横へ曲りますと三軒目の家で只今店は閉つて居ります元は那處で二六蕎麥と申して蕎麥屋が居たのでございました　權「ヲヽ左樣か夫りやア何より思ひ付きの家だ……ダガ賣つても宜し貸しても宜いんなら商買の立つ迄は貸して貰ひたいねい家作は買うけれど家屋丈は貸して貰ひたい夫も當分の内だ……　亭「ハイ夫れでは早速先方へ懸け合つて見ましやう吃度甘く相談は出來る事と思ひますがマア當つて見なけりやア分りませんから……　權「夫じやア何分頼んだ……アヽ亭主一寸

待つて呉れ之は少しだが下で一杯飲で呉れ實は此處で一杯遣ゝ作ら嘲そうと思つたが左樣も往かなかつたから……　亭之は何も恐れ入りますモー毎度れ心附けを頂戴いたしまして又斯いと御心配を下すつちやア何共相濟ません次第で……　樽「マア其樣事を云はずに取つて置てれ呉れ……之より亭主は禮を述べて座を下り先方へ懇合て見ますと貸ても宜と云ふ事になりました樽太左衛門も厚亭主に禮を述て道具一式買調へて居酒屋を開店致したが傍ら饂飩を商ひて元を切ても安く賣といふやうにした元々利益を取うと云ふ商法でないからサア賣出の當日から流行ワ〳〵　甲「ヲイ〳〵　樽次此度店開きをした紀州屋へ往て見や中汲が一本でれ換りと來るとお負けを入れて又一本に仕て客越すじやアねいか中々ナノ看注ゞ云ふのが如才ねいから那ぢやア流行るだらうよ夫に妙な商賣を遣つたもんで饂飩を賣るとは妙じやアねいか　乙「ヲー饂飩といやア大通りの九三でも何でも叶はねい半個のお換りと來たら矢張り一ツぶりだアノ分じやア何し一杯じやア出られねいナカ〳〵　商法に拔目がねいなア那奴は眞ものゝ店になるだらうよと就れも安いので通りものになり大磯の紀州屋といつたら新店ながらも繁昌するやうになりましたが全たくは武兵衛の商法に拔目のなき處より斯く評判が高く相成つたのである、デ此處に數月の間別に何のれ話しもなく暮らして居たが敵を搜る事に於ては更に油斷がありませんが茲に一ツの間遊びより大騒動の出体するといふれ咄し一寸一吸いたします……

第十二席

樽太左衛門も武兵衛の懸け引きで商賣も繁昌いたしますから店

觀音靈驗

の方は更に心配はない尤とも一年や一年半は元を切つて賣つても宜いと云ふ覺悟ではあるが仝じ始めたのならばドウか甘くやりたいといふのが人情でございます併し隨分此居酒屋といふ商賣も苔蟲い商賣で中には酒に喰醉ふしブウ〳〵と云ひだし騒ぎの客に喧嘩を賣つて飛んだ噪きを引き起し又は持ち合せの懐中が淋しい爲めに皿小鉢を投げ出して乱暴を仕掛ける抔實に言語に絶した振舞の者が多い其中に置て甘く匙を取つて行くんですから扨思つたよりは困難の商法だ……武兵衛は何しても事に慣れて居るので商賣に掛けたら實に上手なものですから甘く客を扱らつて行く然る處此頃は惡者共が多く立廻り錢も持たづに來て……は只で飲を食するといふ實に乱暴極まつた事をする只今で申す無錢遊興ですが斯な者が大分に殖へました之と云ふのは此頃鎌倉蛇ヶ谷に住める小陶の磯右衛門仇浪の黒遊といふ二人の海

賊があつて此れ等の手下が大磯あたりへ逍遥て來ては例の無錢遊興をして大意張りで居るんだスルと或日の事です此海賊の手下共が三四人紀州屋へ來ました武兵衛は店に居て樣子を見るとドーと眞正な人間ぢやァない　武扨は噂さに聞いた海賊の手下共に相違なし店の爲めには克くない奴等だが敵の手懸りには持つて來いだ……と猶も彼等の擧動に注意して居ると唯しをする事が誠張り解らない何れも符聽のかうな事で雷とか無理とか云ふ事は更に仇吞りません只折々饒浪だとか小陶だとか云ふ事は耳にする　武ンチ見ると雷や無理の手下ではないらしいケレども蛇の道は蛇だ眩度知つて居るには違ひない……と思つて居る若い者となつて立働らいて居る大之亟龜次郎忠介の三人も又仝じく言ひ合はさねど彼等が樣子に目を付けて居ります其内に段々酔が廻つて來たと見へ調子も段々高くなつた　甲「ヲイ若いの

モー一本酒を持つて來い今のは何だ全で水も全じだ篤棒奴人を馬鹿に仕やがるねい酒も水も分らねいやうな鈍馬が何處にあるもんか確かりしやアがれ　龜「ヘイ〳〵　誠と仁相濟ません別に惡氣で致した事でもなし夫に水なぞは差止ません積でしたが……

ア、此德利でございますか水の這入つて居りましたのは……

乙「ヤイ何れでも宜やいモー知らずに飲んぢまつたが飲んじまつてから氣が付いたんだ夫で跡を注文するのに又那な水なんか寄越されちやア堪らねいから斷はつて置んだ……　ヤイ青二才奴德利を振つたりしやがつて余計な事をしやがるねいと云ひ樣傍へにあつた小皿を取つて突然投げ付けた龜次郎は躍てより武術の心得はありませす事なからヒラヲと体を換します故小皿は飛んで向ふの柱へ當りコナ〳〵に碎れて仕舞ひました　丙「エヽ畜生生意氣に避けやがつたなナア俺の手並を見やがれと今度は傍はらに

あつた本鉢を取つて龜次郎の眉見を睨つて投げ付けるナンボ何でも此樣奴が打かつて堪るもんですか　龜「エー小癪な事をしやがるな……　とチラリと躱を換し再たび小皿を投付けんとする其手をビシリと手刀で討ちました　丙「アイタヽヽ……　と小皿をポロリと取落した……　全体喧嘩を賣つて乱暴するといふのは此奴等の手ですから斯うしちやア飲食の代を踏んで出やうと云ふ夫れで殊によれば撲らか强請めて歸らうと云ふんだから實に素生が惡いや……　デ今龜次郎が手向ひを致したのを見て一同惣立ちになり一圓「ヤイ青二才手前達ぢやア解らねい番頭を此處へ出せ……　ヤイ番頭帳場にばかり嚙り付いて居ねへで何とか此處へ來て挨拶を仕ねいか……　と力んでも武兵術は只ニヤリ〳〵と笑つて居る　甲「此畜生只笑つて居やがらア癪に障るしやアねへかと言ひ乍ら酢海鼠の盛つてあつた中皿を取るより早く武兵術を目

掛けて掛げ付けると体を換すの暇さもなくヒューと飛んで來ね もんですから小鬚へ其皿が當つてダラ〳〵ッと血が流れるクワッと憤ぢはりし武兵衛に於て立ち揚りさま打擲附けて遣らうかと思つたが武「イヤ待て〳〵此處いらが勘忍する處だ成る勘忍は誰れもする成らぬ勘忍するが勘忍……と云ふから此處は我慢の仕處だ夫にやア敵を抱へた大事の身だ事そ此盃胸を探つて置けば別に災害もなからうと流石は我慢強い武兵衛の事とて莊所を手當して一同の前へ頭を下げ　武「誠とに心付きません段は手前の不調法でございます決して若い者の罪ではありません何卒御腹立でもございましやうが今日の處は私しに免じて御容赦を願ひ御引き取り下さいますやう……別に酒や肴の代は頂戴いたしませんでも宜しうございますから……　乙「ヤイ〳〵番頭其一言が聽に障らア吾りやア人を卑見りやアがつて段がねいから蔑れるんだと思つて居やがるなサア斯なりやア皆んなも此處を勘くな……馬鹿にするにも程にしやがれ他を誤だと思ふ仇浪の子分で颶風の虎と云つちやア巾利のれ兄いさんだグズ〳〵仕やがると賊殺すぞ　武「ヘイ〳〵何とも申し譯はございません何卒御勘辨を願ひます　甲「其りやア往けねい今になつて謝罪つたつて元々手前の方で惡いんぢやアねいか徳利の中へ水を入れて酒の積りで出すものがあるもんかれ負けにアノ中若い野郎が飲で る筈で高天原なんか極め込みやアがつて馬鹿にするにも程があらア……夫れに虎の兄哥が腹ア立つちやア此方達は手が附けられねい……ダガ夫れも魚心あれば水心だ……れ前の方で何とも申譯はございませんと酒肴を新らしくして一人前金の一兩ヅヽも包んで出すといふんなら虎の兄哥を宥めて皆なも勘辨する樣に取計らつて遣るから克く考へて挨拶をしろ　武「夫は貴郎方

の御無理と申すもの初めから一口召し上つた時に之は酒ぢやア、ねい水だと仰しやれば直にれ取換へも申しまするしれ詫びとして五兩でも十兩でも差上げねい事はございませんが召し上がつてから水だなどと仰しやつては何も証據がございません言ひ掛もとより外は思へませんから決して仰しやる通りの事は出來ません御勝手になさいまし」と幾ら我慢の勝い武兵衛でも小髮には小皿を投げ付けられて疵を受けるし幾ら詫ても詫れば詫る丈增長するからモー勘忍袋の緒も切れた夫に昔しなら知らぬ事今では多少共劍術も心得て居る事故大きに氣象も荒々しくなつて居る……一同の者は勝手にしろと云はれたんで益々立腹して仕舞つた　丙「何を紋……勝手にしろと克くも吐かしやアがつたナ……サア源兵衛……虎……家台骨から打きこわして仕舞へと四人の者は怒立になつて乱暴を初めました事に慣れたる武兵衛まへ

つて仕舞つたのでございますからモー外の若い者には全たく手が附けられない奥の一間に於て此噪動を聞き及んだる樓太左衛門……仁王と字なをされる程だから實に恐かない顔をして居る虎髯の生へて居る事故に店へは少しも出ない番頭の武兵衛に任して置くのですが此騒ぎしやア打捨つて置けない夫に表には黒山のやうに人が立つて居る……奥より出でたる樓太左衛門は一刀を携さへ店へ出て來たが突然乱暴をして居る颶風の虎の樓髮を取るより早くツデン動と投げ付けた殘り三人の者は之を見て三人「ヤア俺りやア何だイヤに侍風を吹かせやがつて怪我でもすると往けねいからトットと此場を退いてやがれ　樓何を俺れ小癪な事を吐しやがるな俺を誰だと思ふ仁王の樓太左衛門と綽名を取つた男達だ侍だなんぞと思ふやうな輪ぐり返つた目玉を持つて人を見損くなうやうな野郎なら高の知れた三下奴全体俺

等ア海賊の下手だナと三人の者を取つて投げ一昨日來い引立つて再たび表の方へと投け付けた　甲「アイタヽヽ、何と云ふ力のある野郎だらう仁王様だとか云やアがつたが全たく那りやア仁王様の生れ換りかも知れねい」と腰を擦りながら立揚る　丙「アーイタ……アイタヽヽ源兵衛手前は如何した　源「如何したも斯うしたもあるもんか石の上へ腰を叩付て骨が碎けたかと思つた位ねだアイタヽヽ　乙「ヤイ〳〵何を泣面しやアがるんでい痛いて我慢しろ〳〵　今に仕返しに來て野郎共を一人〳〵に打ち擲つちまうから……何だ竹の野郎弱いじやアねいか息が止つちまやアがつた……ヤイ竹確かりしろ見つともねいぢやアねいかと云ひ乍ら活を入れたが此奴聊か柔術の心得もあると見ねた其の内に彌次馬といふ尻尾のない馬が幾らも居るもんだから　×「アノ泥棒野郎擲つちまへ那云ふ野郎が居るから此大磯の町が寂

れて仕舞うんだ　○「左様とも〳〵其頃ア悪い者が澤山になつて茶屋小屋ぢやア皆な大磯に迷惑して居らア斯云ふ時に打擲で仕舞はにやア法が附かねいと余まり非道な振舞が募りました故悉く悪まれて大磯の町の若い者は見つけ次第に擲つちまへと云ふ相談が出來て居た處だから堪りません跳れも石を投げるやら棒切を振り舞して擲るやら表の方では忽ち一場の大喧嘩が始まつた併し若い者は町内一同の事であるから段々人數は増すばかり仇浪の手下の者等は僅か四人の事である故サン〳〵打つて打つて打ちのめされ袋の内の鼠同様半死半生の目に逢はされて仕舞つた　×「ヤイ泥棒野郎今日丈は生命を助けて遣らア未だ泥棒した手許も見ねいから勘辨はして遣るけれど此次から此町内へでも足を踏込んで見ろ見付け次第に打殺ろして仕舞うぞ夫れとも遺恨に思ふなら何時なんどきでも仕返しに來い卑怯なこと

はしねいで明い商賣の者なぜを相手になんぞ決してするナ今日の處は免して遣らアトツトと消へて失しやアがれ」と突き放されたから四人の者は初めの威勢は何へやら雲を霞と逃げ去つたが是よりして大磯も海賊の評判は薄らぎました……併し之れは全たく手下共の巣を換へたので今度は遊女町へ入り込み時々乱暴を致すといふ事を聞き及んだ　龜「兄さん何うも全たく詰らない事になりましたよ此間店へ來た海賊の手下らしい人は表でもつてサン〳〵町内の若い者に擲られたもんだからモー那からと云ふものは更に影を見せなくなつて仕舞つたが綾瀬さんのれ心持でも少し小氣味の宜やうにして盛て遣つたら吃度今度は頭とか何とか云ふものが手下の遺恨を晴らしに來るだらうと思つて夫でアヘ懲らして置たんだそうですが余程悪まれて居るものと見ねてキビ〳〵と袋叩きに逢つて仕舞つちやアこ度と再たび來る

事が出來なくなつて仕舞つたでしやう處が此頃聞けばドウやら那の道中が遊女町へ足を入れて折ふし乱暴をするやうな話しですが那處は町家と遠つて金を遣つて愉快をするには屈竟なとてろシテ見ると海賊の張本といふ者共も吃度遊びに參るには違ひない……之から密つと人知れず探索を致そうではありませんか大「成程夫れも宜考がへだ併し若しも此事が綾瀬殿に知れたなら如何な御叱りを受けるか知れません殊に俺しは年上の事必らず御立腹なさるには相違ない　龜「其御遠慮は御尤ともなれど敵を討つ爲めに行衛を探ねるんであります時は別段左したる御小言もなからうかと思ひます……之が女に迷つて行くとでも申したら如何な御咎めを受けても仕方がありませんが全たく左樣いふ譯ではございませんゆへ之から折々は密かに探ねに參りませう夫に就れ夜分の事だから商賣の妨げにもなりますまいし忠介さ

んも居る筈だから武兵衛に頼んで出懸けさしやう　大「成程左ら言はれもやア尤ともの處もある夫じやア支度をして今晩あたりにも出かけて見やうと之より鶴次郎大之亟は遊廓へ足を入れて雷の行衛を探ねましたが最初の中こそ素白一方の敵捜索の爲めでございましたけれども一度遊び二度を馴染で見るとナカ〳〵遊びの方が凝つて來て返つて敵を尋ねるといふ方は口實になつて仕舞つたが茲に一ッの手懸りより終に雷太郎の有家を探し出すの講談一寸一吸して辨じます

第十三席

エ、引き續ひて伺がひます兎角に此お女郎買ひと申しますものは止めやうと云つて止むものでもなし意見を云はれたつて止る譯のものでもございませんが一度伽羅の香が身を染みては自ら悟

りを開く迄は止む者でない

傾城にふられて歸る果報もの

で何も此女に好かれるとか花魁に持てるといふやうな好男子は女郎が有り勝のものでございますが成程夫りやア幽分振れた時の心持は悪いもので誰しも好むものはないけれど返つて夫れが……の身の爲め　甲「エーヲイ辰お前の奴は何時もデレ〳〵側にばかり居たがりやアがつて歸るつていと歸されいて云つてるつていが色男にやアなつて見ていもんだナア　乙「ウンニャー……甲「何だウーンニャーだと……猫の鳴くではあるめいし　乙「ダモよ余さに持てるんで長の野郎なんかにやア氣の毒でならねいからよ……又振られるつて言つても那の位ゐのも珍らしいなア尤とも野郎のやうに色の眞黑けなお鼻のお獅子な、天井黄臭じやア物れる女郎もねいからナア……

甲「ヲイ〳〵　置て臭れ〳〵　手前

が一人で持てると思つて人の讒訴は止めにしねい……ダガ那れ切り長の野郎は遊廓へ足踏みもしねいで一生懸命になつて稼いで居るから克く鋏と相談したにやア遊へねい　乙「太きに其奴も左樣だらう併し長は仕合せものだ女郎に振られりやア悪比壽樣に可愛がられて丸しきにやア不自由はねいや　甲「れ授けなもんだ……御方便なものだ……色男金と力はなかりけりかヲ……アッハヽヽヽ　乙「冗談じやアねい今夜も來て呉れろッて手紙を寄越しやアがつたが如何でい都合して行かうじやアねいか　甲「左樣よ夫じやア羽織を質物すからお前も何か質物しねい……左樣して片きやア先方も氣が濟む此方も氣が濟むつていもんだ　乙「宜しいれ前が羽織を質物なら俺も羽織を質物して往こう、足りなかつたら彼女に立換へさせるか新造に承たまはり仕て置て貰やア何んでもねいや」抔と斯いふ郎の相談と云ふ物はヂキに居し

が纏まるもので出來る丈の無理算段をしては出掛ますもの……三度に一度は斷はらう幾ら交際だからといつて遊廓とところへ足を入れるやうじやア碌な事はないと思ふ人と云ふものは實に稀れだ尤とも一度も遊んだ事の無いものは格別一度でも味をたら多くは病付きになりますものです……隨分近頃は怪しからん無理情死だなんぞと云つて得心もしない娼妓を捉まへて無理に情死を企だてるなんて往々新聞紙上に浮名を流すものがあるありますが實に男子として斯な所業をするなんぞと云つてはれ恥かしい話しだ不義理の借財が嵩まつて首も廻らなくなつたから散々飲んだり喰つたり愉快をして揚句の果てに冥途の道連れだなんぞと娼妓を無理に笑き殺し自分も死ぬなんて言語全斷の至りであります併し青年の方は分けても迷ひ易きもの故遊廓抔へは決して足を踏み入れないやうにして勉强するのが肝心でさ

います先方も勸めの商賣ですもの未に迷つて色香に溺れると云ふは全たく鼻の下の長ひ所……所謂鼻下長と云つて笑ふ可きの至りである實に内幕を悉くれ咄し申せば二席や三席は之れで斗りも密がなくてはなりませんゆへ就れ又克き折を見て伺がひます……

エヽ冗言は扨置き茲に大磯の傾城町に於て其頃流行ましたが大磯屋長兵衛と申し數多の娼妓を抱へて居たれ職を張つて居たは小磯といひ之れは頗る美人に枚目が萬代三枚目が白玉……此三人の花魁といふものは大磯屋の米櫃です何しろ女が美つてお客を大事と勸め面白く遊ばせるといふんですから鈴本主水の文句じやアないが吾れも吾れもと名指しで揚がるといふやうな譯……デ彼の大之亟幷に龜次郎は人の入り込む遊女町を探ねたら又仇の手懸りもあらうかと云ふんで全盛並びなき大磯屋へ登樓

り大之亟は小磯……龜次郎は萬代……と敵妓も悉皆極りましたが素より女に溺れて來た譯ではないから左して散財もせず寐て居ても油斷なく内外の樣子に氣を配つて居る處が大之亟と云ひ龜次郎と云ひ實に當世の好男子でございますから初會の晩より惡からず思はれ敵妓の方でも疎末に仕ません　小「モシエ主は何故ソー無言て計り居なさすへ妾が十言も云つて漸やく一言も返事する位ゐ何せ妾のやうなものが貴郎方のれ馴染にやアなれますまいから諦らめては居ますがホンに思ふれ方に思はれるヲ……て僅ならぬ浮世ですワネ……アヽ辛氣臭い」方に思はれるヲ……て僅ならぬ浮世ですワネ……アヽ辛氣臭い」と大之亟に夫とはなしに眞心を打明けんと云ふ持てなし振り斯うされて見ると人情と云ふ物は妙なもので余り惡くも思はない大「決して前を惡と思つて失れで咄しをしない譯じやアないんだが只何となく眼られないんで初めて遊びに來たものは之だか

ら困まるのう　小「アラマア甘い言ばかり仰しやつて居なさす何屋か外に好いお馴染みがあるから其の人の事を思ひ出して眠られないんでしやう、ホンニ主の樣な方に思はれた女は冥利が叶つたと云ふもんですよチー　大「何だか甘い事ばかり言つてソウ嬉しがらせちやア困るじやアないか　小「アレ未だアンナ言を……エヽ人の氣も知らないで惡らしい」抔と持てる者といふものは初會の時から違つたものです龜次郎も又全じこと　万「マア主のやうな優しい方に如何して來て頂だかれたでしやう大磯あたりの娼妓じやア定めしれ心にも叶ひますまいが、チーモン主は明晩も吃度來て呉んなさすの……アヽモー何だか初會から斯んなじやアれ馴染になつたら何んなだらう」と勤め氣離れた未通女の心ろ龜「万代さん俺しは未だ女の肌抔は知らない無骨者ですから定めしれ前さんもお厭でしやうが今夜は無據辯で登樓たのです此屋

は大層流行る家ですねい　万「ハイ隨分賣れますが貴郎の樣な如おない方が無骨者だなんて……ヲホヽヽ……マア妾は之れ切り來て下さらないだらうと夫が心配で心配でなりません之れ御覽なさい胸がドキ〳〵してモー他愛なくなつて仕舞ました吃度來ては下さいますまいチー……アラ惡らしい妾に斗り口を言して置て主は其方抔を向いてサ……と怨めし氣に云ふを龜次郎は之を打消し　龜「何でれ前を惡ひのなんのと云ふ事がありましやう又吃度來る程に何卒愛想盡さずに俺しに樣子を敎へて下さい　万「アヽモー知つて居る事なら何々の督文を書いても吃度れ知せ申しますとも……　龜「エヽ万代さん吃度ですか……有難い俺しは他人とは思ひませんダガ今言つた事は一時の氣休め一すぢを嬉しがらせた斗りでしやう　万「アラ又那な事ばかり幾ら勤めをして居ても之れ斗りは嘘は申しません貴郎に嘘を言つた

つて……　嘘を言つたつて欺し甲斐が無いと云ふのか　万「風實に妾が之れ程思ふのに……　尤ともお初會から斯な事を申しちやア嘘妙な女だとれ思ひかも知れませんが少しは察して下さいましと跡は互ひに言葉なし……　全たく小磯も大之亟の男振りと云ひ氣舞ひと云ひ實に申分なき、處に打こんだのですが万代は又鮑次郎の優柔な男振りの如何にも美くしく親切なところに想ひを懸け勤め離れての持てなし……　夫でなくとも若い身空の事でありますから前にも申した通り迷ひ安きは尤ともな譯ですが今此待遇を受けては猶更らの事翌朝になつて二人は歸つて來たが切之れからと云ふものは繁々通つて互ひに惡からぬ情交と相成りました夫れ故自然と眞心も話しますやうな次第で終に二人は二世の契りを確め仇討ちの爲めに遊廓へ這入つて仇の有家を探すと云ふ事を明かした女の方でも此話しを聞き一層氣を懸けて

れ客の樣子を探る茲に姉妹分になつてる白玉の群へ繁々通ふた客で阿波の大盡といふ者があり丹が只大盡〳〵といふので別に名は云はない夜來て朝早く歸る……　處が大盡は何時も一人の供を連れて來ますが最初の内は自分は相方にもナカ〳〵樣子を明さなかつた併し花魁の方でも此奴阿波の大盡といふのは喰せ物だ何か泡沫錢の道入る職業の人に違ひねいといふ事は白晄んで居る……　ダガ余まり往く度に白玉から尋ねられるんで隠す譯にも往かない惚れてる女に隠し立をするやうじやア先方も氣まづく思ふだらうといふ心があるもんだから……　大盡「夫じやアお前にばかり打明けて話すから吃度人に云つて呉れては困るよ　白エーエ宜うございますとも吃度其樣事は申しません　大盡「吃度から明して妾の心の落付くやうにして下さいませ　大盡「實は何を隠ろう沖に繋つてある觀音丸の船頭だが

余まり船頭だなんかと云つて來るのも面白くねいから夫れで面倒さの者に阿波の大盡だと云はして居るんだ　自「ヲヤ左樣でございますか夫れでは今に船が出るとモーれ出が無いのですね　大盡「モシ左樣いふ事にでもなればれ前を身請けをして連れて行くから安心して居なさい　自「夫れぢやア嬉しうございますが何だか當になつたもんぢやアございませんねい　大盡「イヤ全たくだよ嘘の偽はりのと云ふ事があるもんかナと此夜は其儘歸り明晩と契つて船へと戻りました

れ話し二ッに分れ茲に又雷太郎無理太郎の兩人は秩父の山奥に於て狩夫二人を殺害し漸やく里へ出ました處がナカ〳〵此邊りは未だ矢釜しい人相書が廻つて雷太郎の行術を捜索すると云ふ譯ですから迂闊にやア出來ない　雷「兄哥折ういふ風に矢釜しくなつちやア俺もヅキが廻つたんだから寧それ主にも迷惑の廻ら

ねへやうに名乘つて出やうかしらん　無理「馬鹿な事を云ふな兄弟分になつたからには生れる時は別々でも死ぬ時は一緒と兼々約束をしたぢやアねいかれ主一人を先へ殺て何をべン〳〵と俺が婆婆にウロ〳〵仕て居やう夫りやア余まり情けねい事を云ふッてもんだ　雷「夫りやア誠とに有難てい事だが是から先きの相談は如何したもんだノウ兄哥　無理「俺の考がへる處じやアモー克い分別も出ねいからして寧ろ海賊と化けたら如何だらうと思ふんだ今迄陸に居たものが海へ行つてりやア確然目明しの手には分りつてはなしだ　雷「ムー其奴は宜い知恵が出た、ヂさア成程左樣いふ事にしやうと之から密々に相談を極まして盗は辻堂の縁の下或は山林の中へ抔隠れ夜になつては歩行て漸々江戸を通り越し品川まで無事に參りました　雷「モー此處らで一仕事しやうじやねいかアノ沖に繋つてある親船は大分大きい船らしいから一

ッ彼船を奪ひ取つて之から四海を我者と乘り廻す事にしやう之から二人して岸に繋いである小船に飛び乘り親船の許まで漕付けて見ると船頭は品川の女郎屋へ遊びに往て船には居ない殘つて居るのは水夫梶取の端した人足ばかりだから雷太郎が突然親船へ飛乘り長い刀を引拔いて脅かしたところが何の他愛もなく從がつて仕舞つた……尤とも命の惜くねいものはないから恐されるよりやア增しだと何れも服從する

雷「ヲイ兄哥〳〵」

無「ヲい仕事は何だ甘く往たか

雷「丁度折が克かつたから直に船を駛らせやうお主も早く親船へ乘んねい

無「合点だとヒラリと飛乘りたる事にて船中の者は益々慌ろき取敢へず云ふが儘に鎌倉沖まで船を出させましたは實に大膽不敵なるふるまひであります……

第十四席

何も人には色々の癖のあるもので酒の好なものがあると思ふと博奕の好なものがあるソーかと思へば女郎買の好きなものがある……隨分不醉酒でもつて繰り込むなんていふ悠氣な方もあります左れば古人の名歌にも

人毎に一ッの癖はあるものよ
我には許せし嶋の道

之を見ても其癖といふものは免れられないものと見ねます、デ伺がひ積きに相成りましたが船を一艘奪ひましたが船に名のないのも妙なものだと思つて觀音丸といふ元の名を其儘に用ひて船中の者は總て船の繰縱をのみ司させ一寸も外へ出られないやうにして置たが鎌倉の沖

へ繋つて暫らく様子を窺がうところが別に船の中までは詮議の届かないと云ふことが分りましたから二人の者も安心した其内に全じ海賊の仲間で仇浪の黒造小陶の磯右衛門抔と別懇になり今じやア自分の船へ來て客分同様になつて居る、デ味方も追々と増て參りましたので雷太郎はソロ〳〵癖が出て持病が勇つて來たと云ふのは何も女が好きで女と見たら目無し鳥だ夫れに引き換へ無理太郎の方は又酒と來たら目無し鳥……實に色々の癖といふものゝあるものでございます夫れで雷太郎も久々の暇を請さんと少し船を進めさせ大磯の沖へと繋ぎセッセ廓通ひを始めたので大磯屋長兵衛の抱へなる白玉の處でございます、デ阿波の大盡と名乗つたのも實は此雷太郎の事でありますが白玉は自分の處へ來るれ客でもドウも此雷は虫が好かないソコで姉妹分になつて居る小磯と万代に阿波の大盡の噂さをした　万「チー小磯

さん何ぞ白玉さんのれ話しじやア何やら主の言はれた事に似て居るしイがありませんが　小「左様さね殊に由ると夫れが探索ねて居る人かも知れないわ　万「夫れじやア那の大さんとれ連の龜さんが尋ねて居る方なんですか……　小「イエチ白玉さん尋ねると云つたつて唯尋ねるんじやアないの……チー万代さん姉妹分の白玉さんだものう明して其お客の様子を尋ねて貰つた方が宜でしやう　万「妾もそう思つて居た處夫じやア小磯さん話して頂戴な……ソコで大之亜龜次郎等は親の敵を討つ爲めに諸國を廻つて居るのだが實は此大磯に其敵と云ふのが居るといふ事で雷太郎といふ盗賊の張本だといふ事を詳しく話した白玉も聞いて吃驚り白「夫じやア那の大盡が夫れに相違はございませんが確然受合つて素生を探つて吉左右をれ知らせ申す」と相談が纏まり大盡の來るのを待つて居た斯とも知らぬ雷太郎大盡を吹か

して白玉の許へ通つて來ましたが白玉は雷太郎が大酔いたしまして眠つて居るのを窺がひソッと紙入の中から二通の手紙を拔き取り素知らぬ顔して其の手紙を小磯と万代に渡した雷太郎はソンな事は更らに知らない曉つきに及んで例日の如く船へと歸る跡で三人の娼妓は其の手紙を開いて見ると金子無心之狀で「仇浪より雷ぜのへ」として「ある之れを見たる三人の喜こび　白「チー小磯さん此手紙の文言では吃度夫れに相違ありませんよ　万「全たく顔形から人柄まで主のお話しに符合だから……夫じやア小磯さん一時も早くれ知らせ申して上げましやう」と之より文細々と認めて紀州屋なる大之丞龜次郎の兩人へ証據の文を取添へ使屋さんに持たせて遣つた

此がは大之丞並に龜次郎に置きましては度々女郎屋から使ひが來るので人前が好くない遠慮して居りますが前掲を見るとイッ

にない大玉急としてある大「是りやア何か急な用でも出來たにはいないと急ぎ封を押し切つて見と敵の樣子が知れたと云ふ事明細の手紙で証據として二通添へてあつたデ此事を人々に話しを致しました處權太左衛門は　權「夫りやア何しても宜い手懸りだ就ては今一度其の人物を確かめて直に仇討を致すやうに仕やうが必らず〳〵　敵の樣子を見たとても早まるやうな事があつては成りません」と確く誡しめられ大之丞は龜次郎と共に大磯屋へ往き白玉にも逢つて阿波の大盡なる雷太郎の樣子を尋ねますと全たく夫に相違ない處へ雷は手下の者一人を供に連れ相變らず白玉の許へ通つて參るを龜次郎は障子の隙より窺がひ見るに姿こそ變れ全たく雷太郎に相違はないゆへ天にも昇る心地して大之丞にも其事を告げ二人とも〳〵　立歸り權太左衛門初め忠介武兵衛にも詳しい話を致した處孰れも大に喜こび早速仇討の支